

1 指示語・接続語

◆確認問題◆

8～9ページ

- (1) 細菌や寄生虫 (2) 害虫 (の天敵。)
- (3) 例細菌や寄生虫は人間の健康にとって悪ばかりなのか (という疑問。)
- (4) ③ || イ ④ || オ (5) ⑤ || イ ⑥ || ウ ⑦ || エ

解説

(1) まず、——線①を含む一文や、前後の内容を確認する。それから、指示語の指す内容は、指示語より前にあることが多いことを押さえて考える。

この数十年、葉を使ったり消毒したりして、細菌や寄生虫を体から一方的に追い出してきました。それらは人間の健康にとって悪ばかりに見えますが、果たしてそうなのでしょうか。

複数のものを指す指示語

「複数」

「それら」は、複数のものを指す指示語。「人間の健康にとって悪ばかり」に見える複数のものを探す。——線①の前を確認して「細菌や寄生虫」を捉える。「それら」に「細菌や寄生虫」を当てはめて、文意が通ることを確認する。まず、——線②を含む一文や、前後の内容を確認する。

農薬を使って害虫を殺すということ

ある生物を食べる、別の生物

害虫を退治するために農薬を使ったのに、その天敵を殺してしまったために、かえって害虫が増えたということがありました。

——線②が「その天敵を殺してしまった」と続いていることに注目。「天敵」とは、ある生物を食べる、別の生物のこと。——線②の直前の「害虫を退治

するために農薬を使ったのに」という部分から、害虫用の農薬が、害虫を食べる「天敵」にも効いてしまい、殺してしまったという意味だと受け取れる。以上から、「その天敵」は「害虫の天敵」を指していることを捉える。

——線を含む一文や、前後の内容を確認する。

この数十年、葉を使ったり消毒したりして、細菌や寄生虫を体から一方的に追い出してきました。それらは人間の健康にとって悪ばかりに見えますが、果たしてそうなのでしょうか。

↑ 前て述べた内容に疑問を投げかける定型表現

指示語「そう」を含む——線は、前に述べた内容に疑問を投げかけるときの定型表現。——線の前で述べているのは、「それらは人間の健康にとって悪ばかり」に見えるということ。したがって、それらは人間の健康にとって悪ばかりなのだろうか」と疑問を投げかけていることを捉える。

記録ポイント 「そう」が指す内容に「それら」という指示語が含まれるため、「それら」を(1)で捉えた「細菌や寄生虫」に置き換えて答える。設問に二十五字以内で書く指示があるので、「なのだろうか」を「なのか」などと書き換える。

(4) 接続語は、語句と語句、文と文、段落と段落をつなぎ、前後の関係を表す働きがあることをまず確認する。

「群れる」という戦略は、弱者の戦略として極めて有効である。

しかし

群れることにはデメリットもある。

「デメリット」の例を挙げて説明

④ 群れることにはデメリットもある。

③ 群れることにはデメリットもある。

② 群れることにはデメリットもある。

① 群れることにはデメリットもある。

⑤ 群れることにはデメリットもある。

⑥ 群れることにはデメリットもある。

⑦ 群れることにはデメリットもある。

⑧ 群れることにはデメリットもある。

⑨ 群れることにはデメリットもある。

⑩ 群れることにはデメリットもある。

⑪ 群れることにはデメリットもある。

⑫ 群れることにはデメリットもある。

⑬ 群れることにはデメリットもある。

⑭ 群れることにはデメリットもある。

⑮ 群れることにはデメリットもある。

⑯ 群れることにはデメリットもある。

⑰ 群れることにはデメリットもある。

⑱ 群れることにはデメリットもある。

⑲ 群れることにはデメリットもある。

⑳ 群れることにはデメリットもある。

㉑ 群れることにはデメリットもある。

㉒ 群れることにはデメリットもある。

㉓ 群れることにはデメリットもある。

㉔ 群れることにはデメリットもある。

㉕ 群れることにはデメリットもある。

㉖ 群れることにはデメリットもある。

㉗ 群れることにはデメリットもある。

㉘ 群れることにはデメリットもある。

㉙ 群れることにはデメリットもある。

㉚ 群れることにはデメリットもある。

㉛ 群れることにはデメリットもある。

㉜ 群れることにはデメリットもある。

㉝ 群れることにはデメリットもある。

㉞ 群れることにはデメリットもある。

㉟ 群れることにはデメリットもある。

㊱ 群れることにはデメリットもある。

㊲ 群れることにはデメリットもある。

㊳ 群れることにはデメリットもある。

㊴ 群れることにはデメリットもある。

㊵ 群れることにはデメリットもある。

㊶ 群れることにはデメリットもある。

㊷ 群れることにはデメリットもある。

㊸ 群れることにはデメリットもある。

㊹ 群れることにはデメリットもある。

㊺ 群れることにはデメリットもある。

㊻ 群れることにはデメリットもある。

㊼ 群れることにはデメリットもある。

㊽ 群れることにはデメリットもある。

㊾ 群れることにはデメリットもある。

㊿ 群れることにはデメリットもある。

単独で行動していれば……できるが、群れで行動する場合、エサが豊富になれば、エサのとりあいになってしまう。

(5) 接続語の前後の内容を確認し、文章がどのように展開しているかをつかむ。

群れていれば、天敵に襲われても、

一匹が襲われている間に他の仲間が逃げることができる。

⑤ ……ある条件のもとで生じる結果二つを並べている

何匹か食べられれば、天敵がお腹なかいっぱいになってしまう。

⑥ ……前を根拠・理由として、後に結果を述べている

群れることで多くの仲間が身を守ることができるのである。

⑤ は、群れていて天敵に襲われたとき、どういふ結果になるかを二つ並べていることから、対比・選択の接続語「あるいは」が当てはまる。

⑥ は、この前で示した「他の仲間が逃げることができる」「天敵がお腹いっぱいになってしまう」ということを根拠・理由として、「多くの仲間が身を守ることができる」といふ結果が生じることを述べている。したがって、順接の接続語「そのため」が当てはまる。

⑦ の前：弱者の「群れる」といふ戦略の効能

← 話題の転換

⑦ の後：群れることのできない弱い生き物が、強い者から逃れる手段には、どんなものがあるだろうか？

そのもっとも有効な手段が「逃げ隠れ」することである。

⑦ の前までは、弱者の「群れる」といふ戦略について文章を展開している。⑦ の後では、「群れることのできない」弱い生き物の「有効な手段」＝戦略」として、「逃げ隠れ」が新たに話題として取り上げられている。

⑦ の前後で話題が転換していることから、転換の接続語「それでは」が当てはまる。

◆ 演習問題 ◆

10 ～ 11 ページ

(1) (C) フェアトレード (C) (7) (9) 字

(2) 例 「ぼくが正しい」「いや、私が正しい」と言い合うこと。

別解 自分と相手のどちらが正しいかという言い合い。

(3) 自分・相手「順不同」 (4) A E B W C カ

(5) 7 ～ 8 (段落) (6) E

(7) だれも強制「フェア」だ(と言うかもしれない。)

(8) (a) 先進国 (b) 途上国 (a) 強い者 (b) 弱い者 (c) フェア

解説

(1) 線①を含む一文「ぼくはそこに使われている「フェア」という言葉が大好きだ。」をもとに、線①より前を確認する。「段落では「フェアトレード」といふ言葉について「……という国際的な活動のことだ。」と説明していて、他の話題には触れていない。したがって筆者が大好きだといふ「フェア」といふ言葉は「フェアトレード」の「フェア」であることを捉える。なお、かきかっこ「」を付けて答えても誤りではない。

(2) まず、指示語を含む一文や、前後の内容を確認する。

「正しい」は、自分だけでも成り立つ言葉だから、「ぼくが正しい」「いや、

私が正しい」といふふうに言い合うこともできる。そしてそれがケンカ

のものにもなる。指示語

何がケンカのものにもなるのかと考えると、線②より前を確認する。

直前の一文では、「正しい」は自分一人でも成り立つ言葉であるために、「ぼくが」「いや、私が」と言い合うこともできると述べている。それを受けて、そうした言い合いが「ケンカのものにもなる」と述べていることをつかむ。

解答をまとめたら、最後に「それ」に当てはめて、文意が通ることを確認する。

記述ポイント

「ぼくが正しい」……言い合うことを抜き出しても誤りではないが、この場合は核となる部分だけを残して簡潔にまとめるとよい。また、

「ぼくが……私が正しい」を、「正しいのはどちらか」と言い換えてもよい。

誤答例 「正義をかけて二者が言い争うこと。(文章中の言葉でまとめていない)

(3) 線③を含む一文や、前後の内容を確認する。

「次」の文で「双方の合意」と言い換えられている
自分だけではなく、相手も「フェア」だと感じるからこそ、「フェア」。
つまり、「フェア」は双方の合意なしには成り立たない。
言い換えたりまとめたりする説明の接続語

線③を含む文の冒頭に、説明の接続語「つまり」があることに注目する。
「フェア」は……成り立たない」は、前で述べた内容の言い換えであること
を押さえておく。「双方」は、関係する二つの事柄の両方を指す指示語なので、
「フェア」という言葉が「何」と「何」の合意なしには成り立たないのかと考え、
「双方」が指しているのが前の文の「自分」と「相手」であることを捉える。
(4) 接続語の前後の内容を確認し、文章をどのように展開しているかをつかむ。

A の前…双方が「フェア」だと思ふからトレードが成り立つ。
一方が「フェア」だと思わないならトレードではない。
直前の二文の内容をまとめている
A の後…トレードとはその定義からして、「フェア」なのだ。

A …「その規模が……『強奪』だ。」と述べた直前の二文を受けて、「ト
レードとは……『フェア』なのだ」とまとめている↓説明・補足の接続語工
「つまり」。

B …前で述べた「現代世界で……『フェア』ではなくなっている」こと
の例を後で挙げている↓説明・補足の接続語「例えば」。

C …前後とも途上国の服づくりの話題である。前では苦しめられている
労働者について、後では環境汚染と資源枯渇について、という問題を並べ
ている↓並列・累加の接続語「また」。

(5) 線④を含む一文や前後の内容を確認して、それ以前で述べてきたどの
ような状態について「きみはどう思うだろう」と読者に問いかけているのか
と考える。直前の⑦・⑧段落では先進国の人のために途上国で行われている

服づくりについて述べており、それは、(4)のBで確認したように、⑥段
落の「現代世界で……『フェア』ではなくなっている」ことの例である。つ
まり、⑥段落の「貿易がフェアではない現代世界」の具体的な状態をどう思
うか、ということなので、「こんな状態」が指しているのは⑦・⑧段落。

(6) どう見たって「フェアじゃない」よね。

「フェアじゃないけれど、法律で禁じられていない」
↓「逆接の接続語」でも「
どれも法律で禁じられていることではない」。

(7) まず、線⑤を含む一文や前後の内容を確認する。

企業はもちろん、先進国の消費者たちは、こう言うかもしれない。
「指示内容（先進国の企業や消費者の言い分）」
「合意」の上でのことだから、これは「フェア」だ、と。
「指示語」

先進国の企業や消費者たちは、どのよう言うかもしれないのかと考える。
指示語の内容が前にならない場合は、後の部分にも注目。二行後に「……『フェ
ア』だ、と」と、引用を示す「と」で結ばれている文があることに着目し、「こ
う」が後にある「だれも……『フェア』だ」を指すことをつかむ。

(8) 線⑥の「そういう思い」が指しているのは直前の一文。直前の一文に
もそれを救いだして」とある。「それ」が指すのは、さらに前の一文の「フェ
ア」という言葉。比喻が使われていて捉えにくいのが、直前の段落で「強い者
がどんどん強くなり、弱い者がどんどん弱くなる。」ということを批判的に
説明していることを押さえ、そうではないようにしたいと思っっている人々が
「フェアトレード」運動を始めたということをつかむ。(1)で確認したように、
①段落では「フェアトレード」がどのような活動かが説明されている。

「先進国」の企業や消費者はかりが得をして、「途上国」の生産者がいつ
も損をするような貿易(トレード)のしくみを改めて、もっと公正(フェア)
な関係をつくらう ↑人々の思い

- (1) 心が明るく前向きになること
 (2) 例悲観的なときは現状を正確に認識できるから。
 (3) A 楽観的なときが狭くなる(27字) B 注意を集中 C 例気づく(3字)
 ア (5) ④⑤⑫ (段落)
 (6) A 視野 B 思考(考え) C 発想力 D 集中力(思考力) [C・D 順不同]
 E 人間の強さ

解説

(1) まず、指示語を含む一文や、前後の内容を確認する。

指示内容
 人は誰でも、心が明るく前向きになることもあれば、心が暗く後ろ向きになることもあります。私たちはなんとなく前者が良いことで後者が悪いことだといった先入観にとらわれがちですが、……

指示内容
 「前者」は、二つのうちの前のもの、「後者」は後のものを指す。——線①より前を確認して、直前で二つの心の状態を挙げていることに着目し、「前者」はその一つ目の「心が明るく前向きになること」を指していることをつかむために、②のような場合に悲観的な性格に切り替えたほうがいいのかと考える。直前の一文を確認し、「一時的に悲観的な性格に切り替えたほうがいい」のは「ミスが許されない状況」に置かれた場合であることを捉える。設問の指示に従い「アロイ教授の分析結果」が書かれた②段落に着目する。

↓ 悲観的
 後ろ向きな心理状態…現状を正確に認識できている
 前向きな心理状態…現状に対する認識能力が低下↓過大に楽観的にとらえる

分析結果の「その結果、……ことを突きとめました。」から、筆者が「ミスが

許されない状況の場合、一時的に悲観的な性格に切り替えたほうがいい」と考えるのは、悲観的なときは現状を正確に認識できるからであることを捉える。

【記述ポイント】理由を答えるときの文末は「……から」「……ため。」などとする。

(3) ——線③を含む文を読み、まず、何が人間が生き残っていく上で大いに役立つ機能なのかと考え、指示語「これ」が直前の「楽観的なときは……狭くなる」機能を指すことを捉える(A)。そうした心の状態と視野の広さとの関係が、敵から生き残る上では、どのように役立つのかと問われているので、詳しく述べている——線③以降の⑥・⑦段落に着目する。

・肉食動物や敵が襲ってきたとき…悲観的になる↓視野が狭くなる
 フレドリックソン博士の調査から
 わかった相関関係
 ・何も心配ごとがないとき……楽観的になる↓視野が広がる
 遠くから近づいてきている敵など……新たな発見ができる

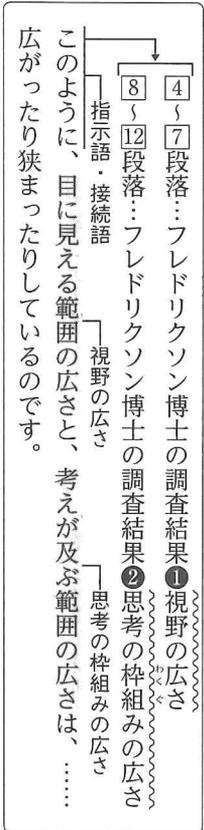
B…⑥段落に「視野が狭くなると、……肉食動物や敵だけに注意を集中でき」とある。C…⑦段落の「なぜか……広がります。」の二文に着目。視野を広げておくことで、未知の危険にいち早く気づく可能性が高まると述べている。

(4) 接続語の前後の内容を確認し、文章がどのように展開しているかをつかむ。

脳は、落ち込むと同時に、ミスをしにくい脳機能にシフトする
 ④、
 ……条件を補足している
 ミスをしにくくなるのと引き換えに、発想力は低下してしまう
 ⑤、
 ……いくいちがう、逆の内容
 人生のピンチでは、発想力よりも判断ミスをしないほうが大切だ

(4) ……前で述べた「脳は……ミスをしにくい脳機能にシフト」することに、それと「引き換えに……発想力は低下」という条件を補足しているので、説明・補足の接続語「ただし」が当てはまる。⑤…「発想力は低下」と述べて後で、ピンチのときは「発想力よりも判断ミスをしないほうが大切」だと、逆の内容を述べているので、逆接の接続語「でも」が当てはまる。

(5) まず、指示語を含む一文や、前後の内容を確認する。



「このように」は、指示語と接続語を兼ねていて、前で述べた内容をまとめたり、次につないだりする。ここでは、「このように」の後で「目に見える範囲の広さと、考えが及ぶ範囲の広さは、……」広がりたり狭まりたりして「とまとめていることから、「このように」は、フレドリクソン博士の二つの調査結果について述べた④〜⑫段落を指していると読み取れる。

(6) まず、——線⑦を含む一文とその前後の内容を確認する。

……こうした心理的な揺らぎは、人間の弱さの象徴のように世間では考えられています。でも、こうしたとらえ方は、少なくとも脳機能の評価としては間違いです。地球上のありとあらゆる場所に進出できた人間の強さは、むしろ、心理的な揺らぎに支えられていたからだと言えるのです。

⑭段落では「でも」の後で筆者の意見が述べられていることを押さえ、設問で与えられた文を確認する。(5)で捉えたように、設問文の「フレドリクソン博士が調べた結果」は④〜⑫段落、まとめが⑬段落にある。Aには④〜⑦段落で述べた「視野」、Bには⑧〜⑫段落で述べた「思考（の枠組み）」が当てはまる。C・Dは、視野や思考の枠組みを広げたり狭めたりすることで高められるものが当てはまる。⑩段落に「発想力が高まる」「集中力を高める」とあることから、三字の指定に当てはまる「発想力」「集中力」を抜き出す。

文章の最後……人間の強さは、むしろ、心理的な揺らぎに支えられている
 ←言い換え
 設問で与えられた文……心理的な揺らぎによって、……脳の合理的な仕組みが機能し、それがEを支えている

2

要点・段落

◆ 確認問題 ◆

14〜15ページ

- (1) 例 日本人が自己主張が苦手な理由（について）。(14字)
 別解 なぜ日本人は自己主張できないか（について）。(15字)
- (2) ① Ⅱカ ② Ⅱ工
- (3) アメリカ人へすことだ。
- (4) ⑥ Ⅱ工 ⑨ Ⅱオ
- (5) A人の意向や期待を気にする B欧米的な価値観

解説

(1) 話題をつかむときは、文章中で繰り返し使われている語句に注目する。冒頭から見ていくと、「日本人は自己主張が苦手だ」「もっと自己主張ができるようにならないといけない」「日本人が自己主張が苦手なのは理由がある」などと①段落で前置きした後で、「僕たち日本人はなぜうまく自己主張ができないのか」と②段落で問いかけています。以上のことから、筆者は「日本人が自己主張が苦手な理由」について述べようとしていることをつかむ。

【設問例】日本人と欧米人の自己主張の違い（アメリカ人の例も挙げているが、文章の話題の中心にはなっていない。）

(2) 接続語の前後の内容を確認し、どのような働きをする接続語なのかつかむ。

日本人が自己主張が苦手なものには理由がある。そして、それは決して悪いことではない。

← 話題の転換

① ①段落を受けて問題を表示している

② ①段落で、日本人が自己主張が苦手であること、を前置きとして述べ、②段落では、①段落を受けて「日本人はなぜ……できないのか」と問題を提示している。このことから、「では」が話題の転換を示すことをつかむ（Ⅱカ）。

4段落：アメリカ人にとってのコミュニケーションの最も重要な役割

← 一方、：アメリカ人の場合と日本人の場合を比較

5段落：日本人にとってのコミュニケーションの最も重要な役割

「2方」の前後の内容に着目。4段落「アメリカ人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は、……」、5段落「日本人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は……」とあることから、「一方」は、前のアメリカ人の場合と後の日本人の場合とを比較する役割を果たすことをつかむ（Ⅱ工）。

(3) (2)でみたように、4段落ではアメリカ人にとっての最も重要なコミュニケーションの役割について説明している。4段落を構成する三文の内容を捉える。

一文目：最も重要な役割は、相手を説得し、自分の意見を通すことⅡ 中心的内容

二文目：遠慮のない自己主張がぶつかり合う

三文目：お互いの意見がぶつかり合うのは日常茶飯事

具体的な説明を加えている

各文の内容を確認すると、一文目でアメリカ人にとってのコミュニケーションの最も重要な役割とはどのようなものかを述べ、二・三文目ではどのようなコミュニケーションを行っているか具体的に説明を加えている。したがって、中心的内容を述べている一文目が4段落の中心文である。

(4) 6・9段落の内容と、その前後の段落との関係を確認する。

5段落：日本人にとってのコミュニケーションの最も重要な役割とは？

前段落で述べた内容を

言い換える働き

相手の意向を気にする

相手の期待を裏切りたくない

まとめている

6段落：つまり僕たち日本人にとっては……最も重要な役割は、お互いの気持ちを結びつけ、良好な場の雰囲気^{雰囲気}を醸し出すことなのだ。

6段落冒頭にある説明の接続語「つまり」に着目する。(2)で確認したように、5段落では日本人にとってのコミュニケーションの最も重要な役割について

説明しているが、6段落ではそれらの説明を別の言葉で言い換えて、「日本人にとっては、コミュニケーションの最も重要な役割は……ことなのだ」とまとめていることをつかむ（Ⅱ工）。

8段落：何かを頑張るとき、……僕たち日本人は、だからのためという思いがわりと大きい

9段落：だからのために頑張る例を列挙（親・先生・監督のため）

10段落：自分の中に息づいているだからのために頑張るのだ。

9段落冒頭には接続語がないが、段落の果たす役割は、前後の段落との関係から捉えることができる。8段落で「何かを頑張るとき……日本人は、だからのためという思いがわりと大きい」と述べた後であることから、9段落は「だからのために頑張る日本人」のさまざまな例を挙げていることがわかる。そのことは、10段落で、9段落の例を受けて「自分の中に息づいているだからのために頑張るのだ」と述べていることから確認できる（Ⅱオ）。

(5) 与えられた設問文を読んでから、11段落の内容を確認する。

前の部分を受ける

指示内容

このような人の意向や期待を気にする日本的な心のあり方は、……などと批判されることがある。でも、それは欧米^{欧米}的な価値観に染まった見方に過ぎない。

筆者の意見を述べる中心文

一文目で、10段落まで述べてきたような「日本的な心のあり方は批判されることがある」という事実をまとめ、その事実に対して、二文目で「それは欧米的な価値観に染まった見方だ」という筆者の意見を述べていることに着目し、11段落の中心文は二文目であることを捉える。すると、要点をまとめた設問文は中心文の内容に一文目の言葉を補ってまとめたものであることがわかるので、Aは「日本人のどのような心のあり方を批判的に捉えるのか」、Bは「日本人がすることを批判的に捉えるのは、何に影響された考え方なのか」と考えて、文章中から読み取る。

(1) 〔例〕文章を書くことが現代社会において持つ意味（について）。（20字）
 (2) 国語力こそが論理力を養う（ということ）。
 (3) 〔例〕良書を読むこと以上に国語力を養うのに適しているのは、文章を書くという行為である。（40字）
 〔別解〕文章を書くという行為は、良書を読むこと以上に国語力を養うのに適した行為である。（39字）
 (4) ア (5) それぞれのくめていく。
 (6) A 現代社会 B 自分で問題く〜と議論する

〔解説〕 (1) 〔1〕段落で書かれていることに注目する。

「文章を書くことが現代社会においてどんな意味を持つかについて、少し私なりの考えを述べておきたい。」
 話題
 筆者の主張

話題を捉えるときは、文章中で繰り返される語句に注目するのが原則だが、「……について（述べる・考える）」などはつきり示されている場合もある。この文章では、〔1〕段落が話題を提示する役割を果たしている。

〔記述ポイント〕 「文章を書くことが……意味を持つか」とそのまま抜き出すと指定字数を超えてしまうので、簡潔にまとめると「与えられた文末「……について。」とのつながりが不自然にならないように注意する。」

(2) 設問にある「筆者が〔3〕段落で伝えようとしていること」とは、〔3〕段落の要点となる筆者の主張を指している。まず、——線①の直後に順接の接続語「だから」があることから、——線①の二文は「国語力がなければ……読解できない」「国語力がつくと、思索力がつく。」こと理由であることを読み取る。さらに範囲を広げて確認すると、「小・中学校などで、……思索力がつく。」

の部分は、具体例を挙げて事実を説明している部分であると考えられる。つまり、冒頭の一文が〔3〕段落の中心文であり、「国語力こそが論理力を養う」という筆者の主張に説得力を持たせるために、小・中学校での例を挙げたり、——線①のような根拠を示したりしているのである。

(3) 〔5〕段落に含まれる各文の内容を確認する。

が、良書を読むこと以上に国語力を養うのに適した行為がある。それが、文章を書くという行為だ。
 野球を例として説明している部分
 たとえば、野球を例にとると、……実践してこそ物事の理解が深まるわけだ。文章も、実践して、つまり文章を書いてこそ論理力が養われる。
 野球の例と同様という意味
 要点となる筆者の主張を支える説明部分

順に読んでいき、まず、「文章を書くという行為」がこの段落の話題であることをつかむ。次に、具体例や理由を述べた説明部分を除く。〔5〕段落の場合には、「たとえば、……物事の理解が深まるわけだ。」の四文が、文章を書くことを「野球」にたとえて説明した部分であり、最後の一文はそれを受けて、文章も野球と同様だと結んだ部分である。すると冒頭の二文が残り、特に筆者の主張が強く表れた第二文がこの段落の中心文だと考えられる。ただし、「それが」と主語部分に指示語が含まれるので、その指示内容が明らかになるように必要な言葉を補って、要点をまとめる。〔記述ポイント〕 「文章を書くという行為は、……である。」というように、語順を入れ替えて書いてもよい。

(4) (3)で確認した〔5〕段落の要点を踏まえて、〔4〕〔6〕段落の関係を捉える。

〔4〕段落：どうすれば国語力・思索力が養われ、深い教養が身につくか？
 方法①良書を読むこと
 〔5〕〔6〕段落：方法②文章を書くこと
 ①以上に②が適している（筆者の考え）

〔4〕段落では、「どうすれば……身につくのか」と問題を提示した後で、昔ながらの方法として「良書を読むこと」を挙げている。それに対して、〔5〕段落では、「良書を読むこと」以上に適した行為として「文章を書くという行為」

を筆者の意見として挙げ、順接の接続語「したがって」で始まる〔6〕段落でも同じ意見を繰り返している。よって、〔4〕段落で示した内容に対して〔5〕・〔6〕段落ではさらに発展させた内容を提示している（Ⅱア）といえる。「良書を読む」こと自体は、筆者は否定していないことに注意する。

(5) まず、——線②を含む一文や、前後の内容を確認する。

指示内容（二点目）
 並列・累加の接続語
 それぞれの人が……自分の意見や人生観を表明していく。そして、互いに議論を重ね、多様な考え方、感じ方を受け止めていく。そうすることが、一人一人の能力を高め、ひいては社会全体を知的で活発にしてい

「そうすることが、……活発にしてい」
 指示内容をつかめばよい。どうすることが「一人一人の能力を高め……活発に」するのかわ、文章中から読み取る。まずは直前の一文が見つかるが、設問に「連続する二文」とあること、文冒頭に並列・累加の接続語「そして」があることに注意して、さらに前の一文も指示内容に含まれることを捉える。
 (6) 与えられた設問文を読んでから、——線を含む一文とその前後を確認する。

指示内容
 現代社会では、自分で問題を見つけ、……人と議論することが求められるている。そのような能力は、まさに書くことによって得られるのだ。
 だからこそ、……順接の接続語
 線の理由
 文章を書くという作業こそが、……重要な意味を持つてくる。

——線を含む一文の冒頭にある「だからこそ」に着目して、その直前の一文の内容が、——線のように筆者が考える理由であることをつかむ。ただし、指示語が含まれているので、さらに前に戻って「そのような能力」が指す内容を捉える。A：……どこで求められる能力かを読み取って抜き出す。B：……文章を書くことによって、どのような能力を身につけられるのかと考える。

◆実戦問題◆

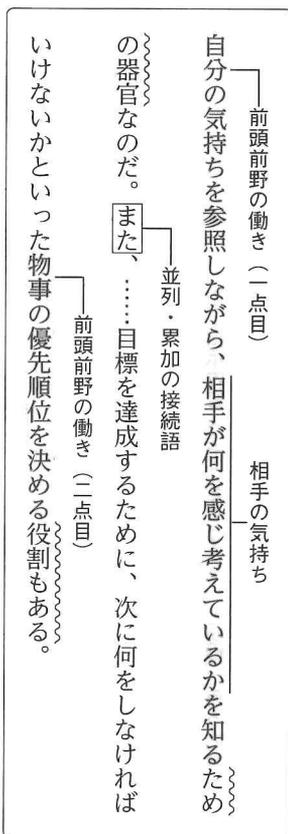
- (1) 例ヒトの進化の過程（について）
 (2) A 道具を製作し、活用 B 社会関係の理解
 例自分の気持ちや参照しながら相手の気持ちを知ったり、物事の優先順位を決めたりする（39字）
 (4) ウ
 (5) ア

解説
 (1) 冒頭から読んでいく。まず、〔1〕段落では、森林からサバンナに進出したことがヒトの進化につながったと述べている。続く〔2〕・〔3〕段落では、サバンナという過酷な環境に適応し生き抜くために起きたヒトの身体的変化について、〔4〕・〔6〕段落では、サバンナでの食料不足にヒトがどのように適応したかについて、述べている。このような文章の展開から、サバンナに進出したことによってヒトがどのように進化したかについて筆者が述べようとしていることを読み取る。「これも……サバンナに適応し生き抜くための、ヒトの進化である」（〔3〕段落）、「ヒトの脳は著しく進化する。……これは過酷な環境でヒトが編み出した、生き抜くために必要な進化だった」（〔6〕段落）、「前頭野の働きを……という進化の過程がわかる」（〔10〕段落）などの表現が繰り返されることから、ヒトの進化の過程が話題であることが確認できる。
 (2) まず、与えられた設問文を読んでから、「食べ物の問題」について述べている〔4〕・〔6〕段落に着目する。

サバンナには簡単に手に入る食料がない——→どう適応するか？
 適応策①非力さをカバーする道具を製作し、活用する
 適応策②目標のために役割分担し複数で共同作業をする
 社会関係の理解＝ヒトをヒトたらしめた分岐点
 類人猿との違い

Aは、食べ物の問題を解決するために、ヒトは何をするようになったのかと考える。問題解決の適応策は⑤・⑥段落で挙げられているが、⑥段落にある「役割分担」や「共同作業」についてはすでに設問文中に挙げられているので、⑤段落の「道具」による適応策を答える。Bは、類人猿とは異なり、何が可能になったのかと考える。「……こそが、類人猿とは異なる、ヒトをヒトたらしめた最大の分岐点」(37～38行目)という表現に着目する。

(3) まず、与えられた設問文を読んで、前頭前野ができることとは何かを答える問題だと理解する。次に⑨段落を読み、前頭前野の働きについて具体的に説明している後半部分に着目する。



前頭前野が「自分を客観的に見る」感覚を司る器官であると説明した後で、「……ための器官なのだ。また、……役割もある。」と、前頭前野の働きを二点挙げている。間に「また」という並列・累加の接続語があることに注意して、どちらか一方だけを答えてしまわないようにする。

記述ポイント ⑦:自分の気持ちを参照しながら相手の気持ちを知る、①:物事の優先順位を決める 以上の二点を、与えられた設問文とのつながりが不自然にならないようにまとめる。⑦と①の順序は逆でもよい。

(4) 各段落の要点を捉えたうえで、選択肢の内容と照らし合わせる。

①段落:森林からサバンナに進出したことで、ヒトは進化した(話題)

②・③段落:過酷な環境を生き抜くために起きたヒトの身体的進化の例

④段落:サバンナにおける食料不足についての説明

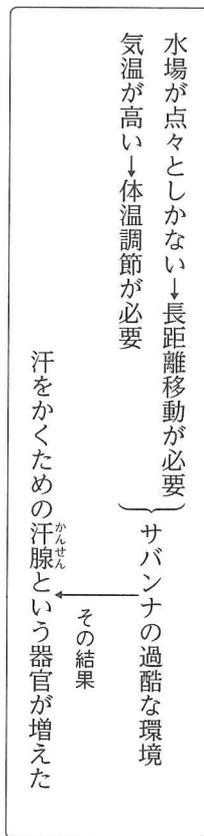
⑤・⑥段落:食料確保のためのヒトの適応策の例

⑦・⑧段落:ヒトの脳が大きくなったことについての説明

⑨・⑩段落:前頭前野についての説明

Aは、冒頭の「なぜヒトは……進出していったのか。」という問題提起に対する答えは、「実は……少なくなっていた」からだと直後(①段落中)に書かれている。イは、③段落では、②段落と同様、過酷な環境を生き抜くための身体的進化について述べている。新たに「食べ物の問題」を挙げているのは④段落。ウは、⑥段落で、社会関係を理解するようになった結果ヒトの脳が進化したことを述べ、どのように進化したかという詳しい説明を⑦～⑩段落で述べているので適切である。エは、⑩段落は⑦段落から続くヒトの脳の進化についての説明の続きであり、特に新しい話題は提示されていない。

(5) 各選択肢を読んでから、文章に戻って内容を照らし合わせる。



Aは、「水場がところどころに点々としかない」ために「長距離を移動しなくてはいけない」こと、「気温が高い」ために「体温調節をする必要がある」ことを述べた後で、「この環境のために、……汗をかいたための汗腺という器官が増えた」とある(8～12行目)。この部分の内容と合うので、Aが正解。イは、「人類は二足歩行に加え、……進化した」(42行目)とはあるが、「森林からサバンナに出たことでヒトは二足歩行が可能になった」とは述べていない。また、「群れではなく個人での行動を重視するようになった」は、「役割分担し複数で共同作業をする」(33行目)ことと合わない。ウは、比較することで進化の過程がわかるのは「前頭前野の働き」(61行目)であり、「食習慣や食べ物の好みの傾向」ではないので、不適切。エは、ヒトの脳は、「ホモ属が出てきた頃」と「現在のホモ・サピエンスが登場したとき」の二回大きくなったと書かれている(45～47行目)ので、不適切。

◆ 確認問題 ◆

20～21ページ

- (1) 西洋庭園は、庭園は自然（16字）
造園家の配慮・細心の手入れ

〔順不同〕

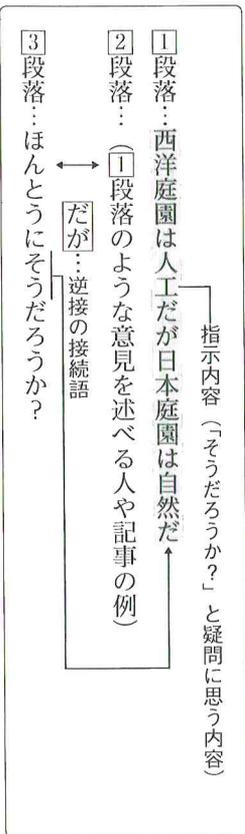
- (2) 1ア 2イ

- (4) 例（日本庭園は）自然なのではなく、みごとに自然を演出した人工なのである。（28字）

別解（日本庭園は）巧みに自然を模した人工の産物であって、けっして自然ではない。（30字）

解説

(1) まず、――線①を含む一文を確認する。冒頭に「だが」という逆接の接続語があることに着目して、それより前で述べたどのような事柄に対して「ほんとうだろうか？」と問題を提起しているのかを考える。次に、前の①・②段落にさかのぼって「そう」の指示内容を捉える。



①段落では、庭園について「西洋庭園は人工だが日本庭園は自然だ」という意見が一般的であることを述べ、②段落では、いろいろな人が同様の意見を述べている例を挙げている。③段落では、①・②段落で述べたことを「そう」という指示語で受けて、「西洋庭園は人工だが日本庭園は自然だといわれているけれど」ほんとうにそうだろうか？」と、文章全体の話題となる問題を提起していることをつかむ。

- (2) ―線②を含む一文と、その前後の内容を確認する。

美しいといわれる庭園：自然に生えてくるはずの雑草が生えていない
・ しかるべき位置に植えられた木や灌木：造園家の配慮による
・ 思わぬ場所に生えてくる木や草の排除：細心の手入れによる
自然に見える日本庭園の美しさを支えるもの

直前の⑥段落で、自然であれば当然茂るはずの雑草が日本庭園には生えていないことを指摘している。それを受けて⑦段落では、「木も灌木も勝手に生えたものではなく、造園家の配慮に従って、しかるべき位置に植えられたものである」とこと、思わぬ場所に生えてくる木や草は「細心の手入れによって絶えず排除されている」ことを説明している。「自然のさりげない美しさ」があり、多くの人から「自然のまま」であるように思われている日本庭園だが、その美しさは「造園家の配慮」や「細心の手入れ」など、人間の手によって支えられているという事実を、筆者が示そうとしていることを読み取る。

- (3) 1 各段落の要点をつかむ。

①段落：西洋庭園は人工だが日本庭園は自然だといわれる
②段落：①段落のような意見をいう人の例
③段落：①段落の意見に対する疑問を提示
④段落：①段落の意見に筆者が感じている疑問
⑤段落：日本庭園は「自然」に見える
⑥段落：自然なら生えてくるはずの雑草が日本庭園にはない
⑦段落：日本庭園の美しさは人間の手によって支えられている
⑧段落：日本庭園は自然なのではなく、自然を演出した人工だ
⑨段落：日本庭園は、巧みに自然を模した人工の産物である

文章の構成を捉えるには、各形式段落の要点や段落冒頭にある接続語を手がかりに段落どうしの関係をつかみ、意味段落のまとまりを考える。この文章は、前置き↓問題提起↓本論↓結論の四つの意味段落によって構成されている。

2 文章の構成の型は、結論を述べる段落がどの位置にあるかによって決まる。1で確認したように、この文章では結論を最後に述べているので、「尾括型」の文章である。

(4) 2で確認した結論部分〔8・9段落〕に着目する。

説明の接続語（前の部分を受けてまとめる）

⑧ つまり日本庭園は決して自然なのではない。みごとに自然を演出した人工なのである。その意味では人工の美といわれる西洋庭園と何一つ変わるところはないのではないか？

「西洋庭園と同じく、人工、だ」ということ

⑨ もちろん……場合もある。けれどふつう讚えられている美しい日本庭園は、細心の注意を払って巧みに自然を模した人工の産物なのである。

⑧段落の中心的内容を繰り返している

中心的内容

⑧段落冒頭の二文の「つまり……なのではない。……なのである。」という表現に着目する。説明の接続語「つまり」には、前で述べた事柄を言い換えてまとめる働きがあることから、前の本論部分を受けてここでまとめを述べていると考えられる。また、「……なのではない」「……なのである」という文末表現を使って、筆者は自分の考えや主張を強く訴えている。さらに、この二文の内容は、(1)で確認した問題提起（「ほんとうに、西洋庭園は人工だが日本庭園は自然なのだろうか？」）の答えにあたる。この二文こそが筆者が最も述べたかった中心的内容＝要旨を述べたものであることを捉える。

記述ポイント ⑦…「日本庭園は」自然ではない「こと、①…「日本庭園は」自然を演出した人工である「こと 以上の二点を、与えられた「日本庭園は、……」という書き出しとのつながりが不自然にならないようにまとめる。⑦と①の順序が逆になってもよい。また、①については、「自然を模した人工（の産物）」という⑨段落の表現を使ってまとめてもよい。なお、文末は、主語の「日本庭園は」に対応する述語で結ぶこと。

◆ 演習問題 ◆

(1) 他者とコミュニケーションしたい (2) コミュニケーションの要がある。

(3) A言葉のしくみ（言語そのもの） B文化
Cコミュニケーションのあり方

(4) E (5) I

(6) 例 母語と外国語の言語習得の方法論には共通する部分が多いので、外国語を学ぶことは日本語力の向上に役立つ。（50字）

解説

(1) 線①を含む一文と、「友人たち」について説明した部分に着目する。

友人たちに共通するもの…その言語を使えるようになりたいという熱意

その言語を使って…他者とコミュニケーションしたい

「人と話したい、本を読みたい、文を書きたいなど」ということ

そのために発音を覚え、文法を勉強し、語彙を増やし、文字を学んだ

外国語を学習した

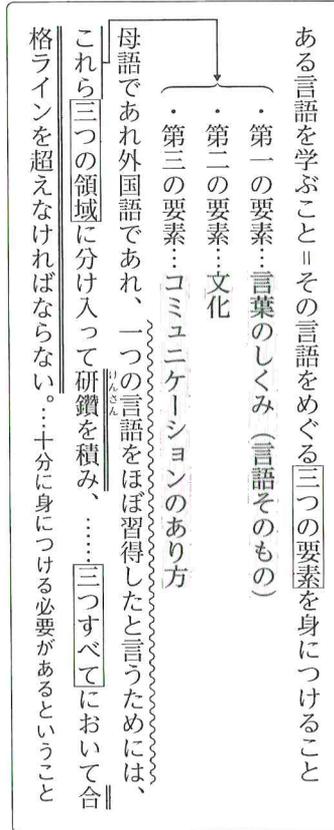
(2) 外国語学習時の友人たちが共通して持っていた「熱意」について、直後の文で「その言語を使って…他者とコミュニケーションしたい」という熱意だと、より詳しく説明している。そして、その熱意のために友人たちは「発音を…文字を学んだ」（＝外国語を学習した）と述べている。

③段落を構成する各文を順に読んでいく。

コミュニケーション能力、とりわけ口頭によるコミュニケーションの能力を身につけるには、まず、母語話者の言語行動を観察する必要がある。挨拶一つとっても、たとえ完璧な発音を習得したとしても、それだけでは不十分だ。……といったことを観察するのである。

「挨拶」を例として、「母語話者の言語行動を観察する必要」性を説明している

- 一文目で「コミュニケーション能力を身につけるには、母語話者の言語行動を観察する必要がある」と述べたことを受けて、二文目「最終文では、「挨拶一つとっても、……観察するのである。」というように、挨拶を例として「母語話者の言語行動を観察する必要がある」ことを説明している。したがって、
- ③段落の要点を述べている一文目が、③段落の中心文である。
- まず、——線②を含む一文と、その前後の内容を確認する。



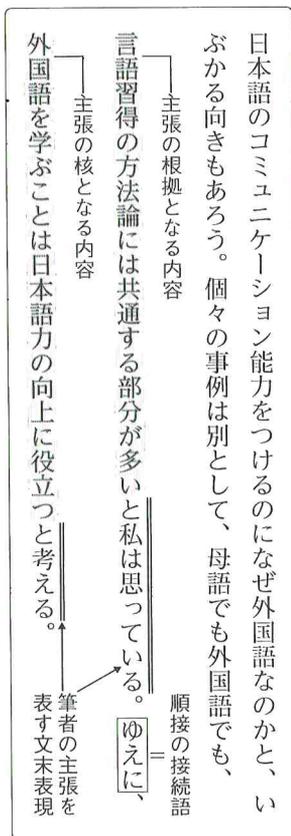
- 「一つの言語を(ほぼ)習得した」と言うために、すべきことを考える。
- 線②を含む一文から、「これら③つの領域に分け入って研鑽を積み、……③つすべてにおいて合格ラインを超え」ることが必要なのだと読み取れるが、このままでは身につけなければならない「③つの領域」が何を指すのかわからない。そこで前の部分にさかのぼって、「これら」の指示内容を捉える。直前の一文で「第一に……、第二に……、そして第三に……。」と挙げられているものが「これら」の指示内容であり、言語習得に必要な要素である。
- 線③の二文と、その二文を含む⑤段落の内容を確認する。



外国語を学習することで「言語的知識はもとより、……さまざまな情報に対して関心を持つ」ようになり、自らの使用する言語(⇨母語)についても「さ

- らに理解し、より適切に運用するためのセルフ・トレーニングを継続して行っていくことになる」と述べているので、エが当てはまる。
- (5) 各段落の要点を押さえる。

- ①段落…外国語を学ぶことは日本語力の向上に役立つ [結論]
- ②段落…外国語を習得した人は日本語のコミュニケーション能力も高い
- ③段落…コミュニケーション能力を身につけるには、母語話者の言語行動を観察する必要がある
- ④段落…ある言語を学ぶことは、言語そのものに加え、文化、コミュニケーションのあり方まで身につけるといふことだ
- ⑤段落…外国語を学ぶことで母語の学習も継続して行うようになる
- この文章では、冒頭の①段落で結論となる筆者の主張を述べている(頭括型)。②⇨④段落では言語学習で身につけるべきものについて説明し、⑤段落では外国語学習が母語の学習に与える影響について説明している(⇨イ)。
- (5)で確認した結論部分に着目し、各文を読み解いていく。



- 筆者の考えや主張を示す「……と私は思っている。」「……と考える。」という文末表現に着目する。二文目と三文目は「ゆえに」という順接の接続語で結ばれているので、「母語でも外国語でも、言語習得の方法論には共通する部分が多い」ことは、「外国語を学ぶことは日本語力の向上に役立つ」と筆者が考える理由になっている。
- 記述ポイント ⑦…「(母語も外国語も)言語習得の方法には共通する部分が多い」こと、①…「外国語学習は日本語力の向上に役立つ」こと この二点を、⑦が①の理由であるという文脈でまとめる。

- (1) ア (2) 世間の評判 (3) ウ
- (4) 例 (本来の姿の科学とは) 自然の精確な観察とその把握を基礎としており、生活に密着したものである。(35字)
- (5) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥
- (6) エ

【解説】 (1) まず、——線①の一文を読み、「ニューヨークの展覧会に出しても、大賞をとりそうな絵」が①段落で紹介された「ラスコウ洞窟の壁画」を指していることをつかみ、それについて説明している7行目以降に着目する。

壁画に対する筆者の感想	→	ラスコウ洞窟の壁画の特長
		筆致も素朴かつ雄渾 <small>ゆうこん</small> であって、形がよく野生動物の姿を写しているばかりでなく、その性格までもみごとに表現している。
		「大賞をとりそう」だと思ふ理由
		とても二万年も昔の原始人類が描いたものとは思われない。
		ニューヨークの展覧会に出しても、大賞をとりそうな絵

ラスコウの壁画の説明のうち、その特長について述べている「筆致も……表現している。」(14～15行目)に着目して、「展覧会に出しても、大賞をとりそう」だと筆者が考える理由を捉える。イは「鮮やかな色が……計算して描いている」、ウは「複雑な構図で描かれた大作」、エは「原始人類には、絵を描くこと自体が難しい」が、それぞれ文章の内容と合わないので不適切。

(2) まず与えられた設問文に「ラスコウの壁画が……描いているように」とあることに着目して、身近で大切なものを無心に描いている「ラスコウの壁画」を例に挙げて、「真の芸術」についてまとめたいことをつかむ。次に、真の芸術とは何と無縁のものなのかを、——線②を含む③段落から読み取る。「(ラスコウの壁画を描いた)原始人たちは、世間の評判を顧慮する必要もな

く、まして商業価値などには、まったく無縁であった。」という一文に着目すると、空欄に当てはまるのは「世間の評判」だとわかる。

(3) ——線③を含む一文と、その前後の内容を確認する。⑤段落では多くの指示語が使われているので、それぞれの指示内容を正確に読み取る。

狩猟によつて食物のほとんどを得ていた彼らは、どうしても、野生動物を捕らえなければならぬ。それができなかつたら、死ぬよりしかたがない。それは本気などという生やさしいものではなく、絶体絶命の問題である。そういう立場にあった彼らは、動物の習性や、運動を、われわれの想像を絶した真剣さで、見つめていたにちがいない。人間の眼は、そういう場合には、瞬間写真に匹敵する能力を発揮するのであろう。

人間の眼は、どういふ場合に瞬間写真に匹敵する能力を発揮するのかと考へて、「そういう(場合)」の指示内容を読み取る。一文前に戻ると、その冒頭の「そういう(立場)」という指示語も同じものを指しているとわかるので、両方に共通する指示内容を読み取る。さらにさかのぼって読み、両者が「それができなかつたら、死ぬよりしかたがない」を指していることをつかむ。ただし、この部分にも指示語が含まれるので、もう一つ前の文に戻って「それ」の指示内容が、野生動物を捕らえることであることが押さえる。したがって、——線③の指示内容は、野生動物を捕らえることができなかつたら、死ぬよりしかたがない」となり、これを簡潔に言い換えたウが正解。

(4) ⑥段落の内容を確認する。

科学の基礎……自然の精確な観察と、その把握とにある。

今日の科学……分化・商業化し、一般の人々には手のとどかないもの

しかし……逆接の接続語

科学の本来の姿……「そういうものではない」

生活に役立つ(＝密着した)ものである……筆者の主張

「本来の姿の科学」についてまとめるので、「科学」についての筆者の考えを

述べている部分に着目する。[6]段落の冒頭で「科学の基礎は、……把握とに

ある。」と確認した後で、ラスコウの原始人たちの科学はその基礎に基づいた「生活に密着したもの」だったと述べている。それに対して、「今日の科学」はあまりにも分化・商業化して「一般の人々には、とうてい手のとどかないはるか彼方かたのもの」となっているため、「科学の本来の姿は、そういうものではない」と批判している。こうした文脈から、科学とは本来「生活に密着したもの」だ、という筆者の主張を捉えてまとめる。

記述ポイント ⑦：自然の精確な観察とその把握を基礎としていること、①：生

活に密着したものであること 以上の二点をまとめる。設問の条件（字数指定・使用語句・書き出し）に合う解答が書けているか、最後に確認する。

(5) 各段落の要点をつかみ、文章全体の構成を捉える。

①～③段落：ラスコウ洞窟の壁画の紹介と、その芸術性について ……序論

④・⑤段落：壁画に表れた原始人たちのもつ「科学の眼」 ……本論

⑥段落：「本来の姿の科学」についての筆者の主張 ……結論

④段落冒頭の「ところで」に着目して、ラスコウの壁画の芸術性から原始人たちの科学の眼へとここで話題が転換することを捉える。また、[6]段落では、前の部分で述べてきた内容を受けて、本来の科学のあり方について筆者自身の主張をまとめている。したがって、右のように三つに分けられる。

(6) 各選択肢を読んだから、文章に戻って内容を照らし合わせる。アは、「絵を描く精巧な道具があった」という記述はない。イは、「狩猟によって生活している彼ら（＝原始人たち）には、野生動物は、きわめて身近で、かつ大切なもの」（21～22行目）であり、「身近な敵」ではない。ウは、アルタミラ洞窟の壁画について「じつにみごとなもの」だと述べた後で、「これ以上の壁画が見つかった」として「ラスコウ洞窟の壁画」（5～9行目）を紹介している。エは、ラスコウの原始人たちについて、②・③段落で芸術的資質、④・⑤段落で科学的資質を評価し、最後に[6]段落で「ラスコウの原始人たちは、非常に優れた科学者の素質をもっていた……芸術家であり、かつ科学者であった」（46～48行目）とまとめている。したがって、エが正解となる。

重点講座 1

説明的文章の形式別対策

標準問題

26～31ページ

1 (1) ①ア ②ウ (2) エ・オ〔順不同〕

解説

(1) 各空欄の前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。

地球上の各地でいろいろな生物が急速に絶滅している、あるいはその危機にあるというのは紛れもない事実なのです。

← ① 一方、…前て述べた事柄に関連して後の事柄を持ち出し、対比している種の絶滅自体は、地球上で繰り返し起こってきたことが知られています。

①の前では、生物が急速に絶滅している現代の地球の状況について述べている。それに関連して、①の後では、絶滅自体は地球上で繰り返し起こってきた現象であること、すなわち過去の絶滅についての話を持ち出し、現代の絶滅と対比している。したがって、①には対比の「一方」が入る。

②の前：種の絶滅自体は、進化の過程で繰り返し起こってきたこと
②の後：現代の絶滅には、過去の絶滅にはない問題がある
⇔ 当然のこと⇔問題ない
前て述べた内容とは
くいちがう内容を後で述べる

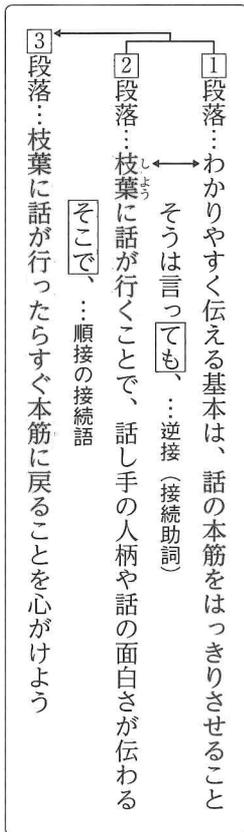
②の前では、過去繰り返し起こった絶滅は進化の過程で起こった当然の現象で、問題のないものであったことを述べている。それに対して②の後では、「いま世界各地で起こっている絶滅（＝現代の絶滅）が問題なのは、……」というように、現代の絶滅について問題点を挙げているので、②には前後の内容が対立することを示す逆接の「しかし」が当てはまる。

(2) 現代の絶滅の問題点について述べた第三段落の「いま世界各地で起こっている絶滅が問題なのは、……」という一文から、「原因を人がつくっている

こと(＝エ)」「短い時間スケールで起こっていること(＝オ)」を捉える。

- ②
- (1) ②段落＝ウ ③段落＝オ
- (2) ア

解説 (1) ②・③段落とその前後の内容を確認する。



①段落で「わかりやすく伝える基本は、話の本筋をはっきりさせること」と述べた後で、②段落では、本筋から離れて「枝葉に話が行くこと」の効用を述べている。そうした①・②段落を受けて、③段落では「時折枝葉に……ことを心がけましょう」と筆者の主張を述べている。以上のことから、②段落には前の部分とはくいちがう内容を述べる働き(＝ウ)、③段落には前の部分を理由として意見を述べる働き(＝オ)があることをつかむ。これらの働きは、各段落冒頭の「そうは言っても」「そこで」からも読み取れる。

(2) 各選択肢の内容を確認してから、文章に戻って筆者の主張と照らし合わせる。ア：枝葉の話をする→全体像が面白く見えて(10行目) くるとはあるが、「わかりやすい話になる」とは述べていないので、筆者の主張とは合わない。イ・ウ：筆者は「時折枝葉に話が行くことはあるけれど、少し行ったらすぐ戻る」という……ことを心がけましょう(5～6行目)、「常に「枝に行ったら次は幹に戻ろう」と心にとめて、話せばいいのです(18～19行目)という主張を繰り返し述べている。エ：「枝葉に話が行くことで、かえって話し手の人柄を感じさせたり、ディテールの面白さを伝えたりすることもできる(2～3行目)」とある。以上のことから、イ・エは適切。

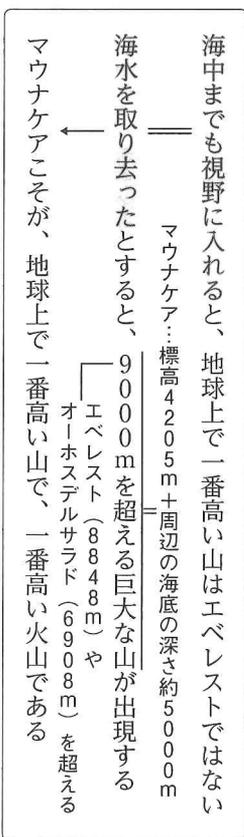
- ③
- (1) 海山
- (2) 海水を取り去った(場合。)

解説 (1) 線①の一文と、その前後の内容を確認する。



順に読んでいくと、直後の一文で「海の中は目で見えにくいこともあって、まさに数えきれないほどの山があります」と説明した後で、「これらは『海山』と呼ばれています」と述べている。「これら」は複数のものを指す指示語であり、前の文の「(海の中にある)数えきれないほどの山」を指している。したがって、「海底にある山」を一語で表したものは「海山」となる。

(2) 「マウナケア」について述べた第三段落に着目する。



海中までも視野に入れると、地球上で一番高い山はエベレストではない。マウナケアは「標高4205mと陸上の山としてはとるに足らない高さ」であるが、「海の底から聳えてい」る。そのため、「海水を取り去った(海中までも視野に入れる)」場合には、「9000mを超える巨大な山」となり、「地球上で一番高い山であり、一番高い火山」だといえるということになる。八字という指定字数があるので、「海中までも視野に入れる」でなく、「海水を取り去った」と答えること。

4

- (1) 子どもを大事に育てるとは、育てられる子どもには何もさせずに、親や周りにいる大人たちが何もかもしてあげること(た)
- (2) A年齢 Bやれること C体験させる

解説

- (1) 線①を含む一文と、その前後の内容を確認する。

―例示の内容

宝物のように大事に育てるとか、床の間に飾っておくように育てるとか、

例示の助動詞

「カゴのトリ」のように育てるといった言い方があるように、子どもを大事に育てるとは、育てられる子どもには何もさせずに、親や周りにいる大人たちが何もかもしてあげることだと考えているということである。

―「考え」の内容

このような考えは外国でも一般的かというところ、そうではない。

まず、――線①と同じ文に含まれる「そうではない」の「そう」が直前の「一般的」を指すことをつかむ。次に、どのような考えが外国では一般的なのかと考えると、「このような」の指示内容を前の部分から探す。直前の一文に「……と考えている」という言葉があることに着目して、「このような考え」の内容がその前に書かれていることを捉える。ただし、前半の「宝物のように大事に……といった言い方があるように」は、子育てについての考え方が表れた言葉の例を挙げた部分であり、「考え」の内容には含まれないことに注意する。

- (2) 与えられた設問文の内容を確認してから、文章に戻って解答を読み取る。

――線②の前後を確認して、「欧米先進国のことであるが」と述べた直後で

「子どもを大事にするとは、……ことなのである」と欧米先進国での考え方について述べていることをつかむ。子どもの何にに応じてどのようになることが、子どもを大事にすることなのかと考えると、A・Bに当てはまる言葉を捉える。

5

- (1) 例金魚鉢や水槽の水には、成長するための養分が少ないから。
(27字)
- (2) 別解 ホテイアオイの成長のための養分が金魚鉢や水槽には少ないから。
(30字)

- (2) 例水質の富栄養化

解説

- (1) 線①を含む一文と、その前後の内容を確認する。

しかし、「ホテイアオイを金魚鉢や水槽で長い間栽培していても、そんなに大きくなならないし、増えることもない」と不思議に思われるかもしれません。その理由は、金魚鉢や水槽には、ホテイアオイが成長するための養分が少ないからです。理由が書かれていることを示す

直後の「その理由は、……からです」という表現に着目して、ホテイアオイが金魚鉢や水槽の中では増えない理由をここで述べていることをつかむ。

記述ポイント 理由を答える設問なので、文末は「……から。」などで結ぶ。

誤答例 金魚鉢や水槽の水の中では、旺盛な繁殖力を発揮できないから。
(成長するための養分が少ない)ことが書かれていない。

(2) 線②の一文と、その前後の内容を確認する。

池や沼、湖…生活排水や工場の排水が流れ込む

排水に含まれる養分によって、水質が富栄養化される

そんな水の中では、……ホテイアオイは旺盛に繁殖する

ホテイアオイはどのような水の中だと旺盛に繁殖するのかと考えると、前段落から池や沼、湖などの水質の富栄養化が旺盛な繁殖につながる原因であることを読み取る。「水質が富栄養化」と抜き出さないように注意する。

◆ 確認問題 ◆

- ⑥ (1) 例人が発想したものを実現するために努力すること。
 (2) 例自分が思いついた細かいアイデアを交えて作業をし、結果に対する楽しみが生じたとき。(40字)

解説

(1) 「後者」は二つ挙げたものの後のものを指す指示語なので、前にさかのぼって二つのものとは何かを読み取る。文章の冒頭で、努力には「楽しい努力」と「あまり楽しくない努力」の二種類あると述べた後で、楽しい努力として「自分が発想したものを実現する努力」、あまり楽しくない努力として「人が発想したものを実現するための努力」を挙げている。「後者」は、二つ目の努力を指している。

記述ポイント

「……すること。」とまとめる。
 —— 線②を含む段落を確認する。

- (2)

人が発想したものを実現するために努力すること
 多くの仕事というのは、全体としては後者だ。……あまり楽しめない。
 ……こういった仕事の中にあっても、細かいアイデアを自分が思いつき、それらを交えてする作業もあつて、この場合は、結果に対する楽しみが生じる。……
 ↓
 ↓

「……」とまとめる。
 —— 線②を含む段落を確認する。
 ……こういった仕事の中にあっても、細かいアイデアを自分が思いつき、それらを交えてする作業もあつて、この場合は、結果に対する楽しみが生じる。……
 ↓
 ↓

記述ポイント

設問で指示された「自分」という言葉を必ず使用して答える。「細かい……生じる」の部分で指定字数に収まるように要約し、文末は「……とき」と結ぶ。

- (1) 例該当する作品が、見あたらないから。
 (2) ウ
 (3) 「おばあち

解説

(1) まず、どのような場面で——線①の発言が出てきたのかを押さえる。

場面	
時(いつ)	「次の日」 (祖母に本を探すように頼まれた次の日)
場所(どこ)	「大型書店」
登場人物(誰)	「私」「店員」
出来事(どうした)	祖母に頼まれた本を探しに行った

次に場面を踏まえて、店員の言葉に着目する。

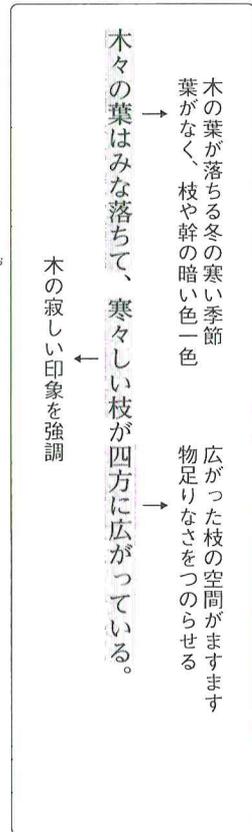
「これ、書名正しいですか?」「私」のメモの書名、著者名が間違つて
 「著者名も?」
 ↓
 「私」のメモに示されている本が見あたらないので、店員は、書名や著者名が正しいのかを確認したのである。
 ↓
 「該当する作品が、見あたらないんですよね」
 ↓
 「該当する作品が、見あたらない」という状況を捉え、「なぜ」という問いに対応するように、理由を表す「……から」「……ため」などの文末でまとめる。

「私」のメモに示されている本が見あたらないので、店員は、書名や著者名が正しいのかを確認したのである。

記述ポイント

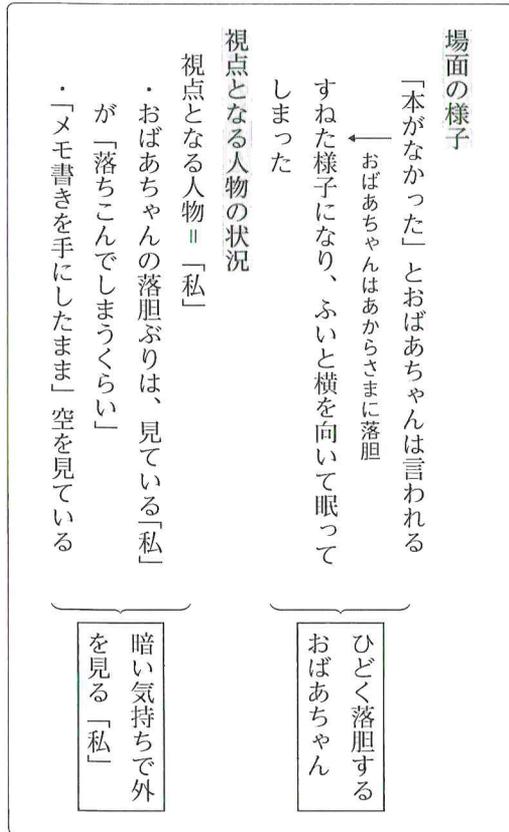
「該当する作品が、見あたらない」という状況を捉え、「なぜ」という問いに対応するように、理由を表す「……から」「……ため」などの文末でまとめる。

(2) 情景描写を通じた心情を読み取るには、まず、情景描写のイメージを捉える。



ここから、少し前まで生い茂っていた葉が落ちてしまつて、寒々しく物寂しいイメージを読み取る。

次に、場面の様子や、視点となる人物の心情を踏まえる必要がある。



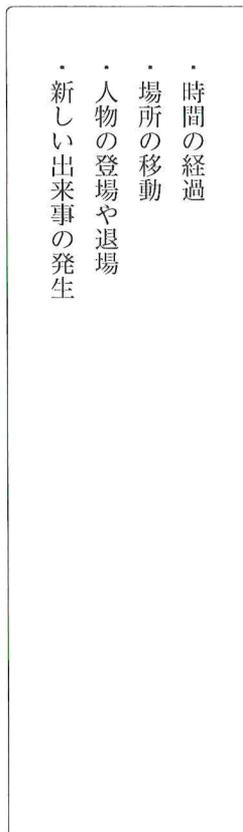
以上のことから、おばあちゃんを落胆させてしまった「私」の暗く落ち込んだ気持ちだが、葉の落ちた木々の寒々とした情景に重ね合わされていることが読み取れる。したがって、正解はウ。

外を見ているのは「私」であることから、この描写はおばあちゃんではなく、「私」の心情を反映していると考えられるので、アは不適切。「寒々しい」

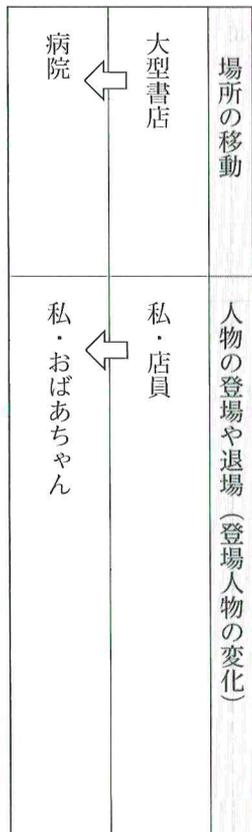
街路樹からは、「激しい怒り」を捉えることができないので、イは誤り。「私」がメモ書きを手に行っていることから、このとき「私」の心にあるのは頼まれた本のことだと類推できる。また、この後、「おばあちゃんに視線を移」してからおばあちゃんの死について考えているが、「不思議と私はこわくなかった」とあるので、恐れ悲しんでいるとするエも当てはまらない。

(3) 物語の文章を内容のまとまりで大きく分けるときには、場面の变化している部分に着目する。

場面の变化を捉えるには、



などに注目する。そこで、この文章で、これらに該当する変化を探す。



文章の途中で、「私」が大型書店から病院に移動しており、そのために、登場人物も変化している。したがって、「……私は大型書店を去った。」までが前半で、「おばあちゃん、なかったよ」と病室でおばあちゃんに話しかけているところから後半になる。

なお、場面分けの設問では、答え方が「初めの○字」の場合と「最後の○字」の場合があるので、どの部分を答えるのか毎回確かめる。

◆ 演習問題 ◆

36 ~ 37 ページ

- (1) (2) (3) (4) (5)
- 例 何もない田舎で子守に耐えられなくなったから。(22字)
- この先もうくればしない
- エ 八日目に私
- イ

【解説】 線①の前後から、マリさんのおかれている状況を読み取る。

「夏休みの宿題が間に合わない」＝口実 ↑ 本当は別に理由がある。

「四日目に、マリさんはお先にとこの家を出ていった。」

「電車で帰ると四回も乗換えがいるらしい」↑ひとりで帰るのは大変なのに、それでも帰った。

「高校生になったマリさんが、この何もない田舎で子守に耐えられたのはたった三日。」

「何もない田舎での子守は苦痛」

「二歳年下の妹チエミ」

「小学一年生のセン」＝私

マリさんは、「何もない田舎」で「子守に耐え」ていたのだが、四日目にはそれに耐えられなくなって、無理をおして家に帰ったのである。「高校生になったマリさん」は、小さなセンやチエミと同じレベルで田舎の生活を楽しむことはもうできなくなっていたのである。「夏休みの宿題が間に合わない」は、「口実」に過ぎず、本当の理由ではない。

【記述ポイント】 設問文に「文章中の言葉を使って」とあるので、「何もない田舎で子守に耐え」の部分を使ってまとめる。「なぜ」と理由が問われているので、「……から」「……ので」など、理由を表す文末でまとめる。

(2) 線②の洗兄の様子がどのようなことを表しているのかを読み取り、それを見ているセンの気持ちを捉える。

・洗兄の様子

「相変わらず面倒見のいい洗兄」↑センたちに優しい。

「どこか心ここにあらず」↑ぼうとする

↑センたちと遊ぶのを心から楽しんでるわけではない。

← センの気持ち

「マリさんはきつと二度とここに来ない。」

↑ 何もない田舎での子守に耐えられないから。

「洗兄も、この先もう何度もここに来て遊んでくれないのだ」

↑ 洗兄もマリさんと同じになるだろうという思い。

(3) センは、面倒見のいい洗兄が、実はセンたちと過ごす時間を心から楽しんでいるわけではないということを感じ取っている。そしていつか洗兄も、マリさんのように、田舎でのセンたちの「子守」に耐えられなくなり、遊びに来ることもなくなってしまうだろうと感じたのである。

まず、線③の情景描写のイメージを捉える。

センの動作

夏の終わり。短い命の終わり。はかないイメージ

うつつむいたら足元で、蟬の死骸に蟻がたかっていた。

蟬は、夏の陽に焼かれきってしまったかのように乾いていた。

蟬の死骸の哀れな姿を強調。

夏が終わり、生命力にあふれていた夏の強烈な陽が、かえって蟬の哀れで物悲しい姿を強調しているイメージが読み取れる。次に、視点の人物に注目する。この蟬の姿はセンがうつつむいたときに見えたもので、ここで視点となる人物はセンである。センは、このとき、マリさんがもう来ず、洗兄も間もなく来なくなることに気づきながら、イチノセキ一家を見送っており、チ

エミの涙につられて泣きそうになるのをこらえている。

以上のことから、マリさんや洗兄たちとの楽しい時間が間もなく失われることへの、センの寂しく悲しい気持ち、哀れな蟬の死骸の姿と重ね合わされていることがわかる。したがって、正解はエ。蟬の乾いた死骸は「激しい鳴き声」とは結びつかないのでアは不適切。この情景は「蟬の死骸」が中心なので、「夏の陽」を中心に捉えているイも当てはまらない。この情景の視点はセンなので、「洗兄の気持ち」としているウも誤り。

(4) 小説を内容のまとまりで分けるときには、時間の経過、場所の移動、人物の登場や退場、新しい出来事の発生などに注目して、場面の变化を捉える。

時間の経過	人物の登場や退場/新しい出来事
四日目	マリさんが帰る
八日目	イチノセキ一家が帰る

まず、四日目にマリさんが帰ってしまったからの様子が描かれており、その後、八日目に、洗兄たちイチノセキ一家が帰っていく場面が描かれている。時間の経過があり、そこで、新しい出来事が起こって人物が退場していることがわかる。したがって、「……折られることはないだろう。」までが前半で、「八日目に私たち……」以降が後半ということになる。

(5) マリさんや洗兄の変化に気づいたセンとチエミの気持ちを捉える。

「今年を入れて数えても、五本の指が洗兄のために折られることはないだろう。」
「マリちゃん、もう来ないよね。」

←

チエミがぼろんと大粒の涙をこぼして、
「今年を入れて数えても、五本の指が洗兄のために折られることはないだろう。」
「マリちゃん、もう来ないよね。」

マリさんと洗兄の変化を察した
センとチエミの悲しみ・切なさ

マリさんや洗兄との楽しい時間が失われていくことを予感し、センとチエミは幼いながらもその切なさをかみしめている。したがって、イが正解。

◆実戦問題◆

38 ~ 39 ページ

- (1) エ (2) イ
- (3) A 例娘がサッカーを続けてくれることがうれしい(20字)
B 例娘の決心が変わることはないかと不安な(18字)
- (4) エ

解説

(1) 線①の前後の会話を整理して、母親の様子を読み取る。

私 「せっかく来てくれたのにお寒い内容の試合見せちゃったね。あいつも全然ダメだったし」

孫たちの頑張りを評価
娘への否定的な評価

母親 「みんな最後まで一生懸命戦っていたじゃない！」

息子(「私」への反論)

「あんたね、一番大切なことは勝つことじゃないでしょう。最後まであきらめずに戦うことでしょう。スマイルズの子たちは三点取られたって必死にボールを追いかけていたじゃない」

孫たちの頑張りを評価

「私」は、試合に負けたため、選手である娘を否定的に評価している。母親は、そうした「私」の捉え方をとがめ、最後まであきらめずに戦った頑張りや評価したのである。したがって、エが正解。母親は、「一番大切なことは勝つことじゃない」と言っているのでア「試合の結果を素直に受け入れられない」「励まし声」をかけるかどうかは問題になっていないのでイも不適切。母親は、「最後まであきらめずに戦うこと」の大切さを伝えているので、ウ「懸命に応援することの大切さ」も誤り。

(2) まず、——線②の情景のイメージを捉える。冷たい風に吹かれて立ち尽く

◆ 確認問題 ◆

40～41ページ

- (1) ウ
(2) 例断らなくてはいけない 別解断ろう
(3) エ

解説

(1) 琴穂が突然、マチを書記に推薦したときの言葉である。マチの心情が読み取れる描写に注意しながら、この場面を整理すると次のようになる。

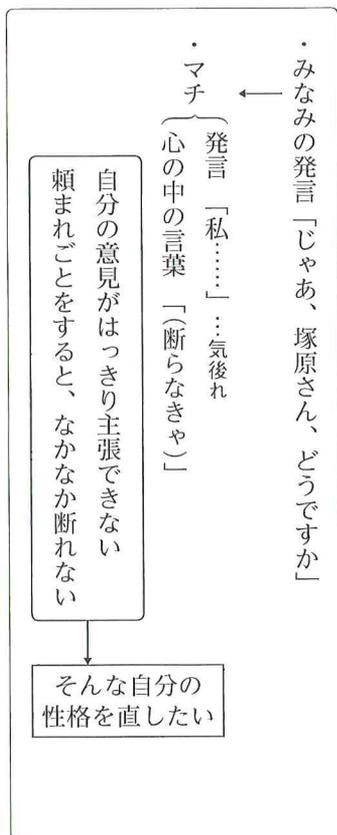
琴穂「書記に塚原マチさんを推薦します」
← 光田琴穂の口からその声が出た瞬間
・背筋に冷たいものがすべりおちた気がした …不安・緊張
・あわてて琴穂の顔を見つめる …戸惑い・焦り

「背筋に冷たいものがすべりおちた」は、背中がすつと寒くなったような感覚のこと。「背筋が寒くなる」「背筋が凍る」などと同じで、不安や緊張を感じている様子を表す。したがって、ウが正解。

ア「琴穂の本心がわからず……迷っている」という内容は文章中にない。イ「あきれている」は、「背筋に冷たいものがすべりおちた」という感覚に合わない。また、マチは推薦されて全く照れていないので、エ「琴穂から信頼されて照れている」も誤り。

(2) 委員長のみなみから「塚原さん、どうですか」と意見を求められて、立ち上がっている。「気後れ」とは、問題が重大だったり、相手の積極的な態度などに圧倒されたりして、弱気になること。ここでは、活発ではきはきしたみなみにマチは気後れし、また、クラスの人たちが見守る中で、一人で立ち上がって意見を述べなければならないという重大な局面に、弱気になってい

ることを表している。この場面での、マチの心の中の言葉に注目する。



気後れしながらも、自分を変えるために、心の中で書記を断らなくてはいけないと考えていることがわかる。

誤答例 嫌だ

(30行目に「仕事が嫌なのではなくて」とある。マチは書記の仕事が嫌なのではなく、流されて引き受けてしまうことが嫌で断ろうとしたのである。) (3) この場面で起きた出来事に対して、マチがどのように対応しているのかを整理して、人物像を捉える。

琴穂に書記に推薦されたとき
・背筋に冷たいものがすべりおちた気がした
・あわてて琴穂の顔を見つめる

琴穂に小学校の頃から何回か書記をやっていたことを指摘されたとき
・誰かから推薦されたからやっただけ

↔
・顎だけゆっくり引いて頷いた(肯定)
・顎だけゆっくり引いて頷いた(肯定)

みなみに意見を求められたとき
・マチの胸中「断らなきゃ」
↓断ることで、自分の性格を直したい。

先生に「書記の仕事、嫌？」と聞かれたとき

・仕事が嫌なのではなく、流されてしまうのが嫌。

⇔
・どう言えばいいのかわからなくなる → マチ「やります」

変わりたいという思いとはうらはらに、マチは相手の言葉に対してはつきりと自分の考えを伝えられないでいる。どう言えばいいのかわからなくなってしまうと、結局、書記を引き受けてしまっているのが、エが正解。

ア「いったん決めたことについては自分の考えを貫くことができる」や、イ「自分の得意なことを生かして人の役に立ちたい」という思いは、文章中に描かれていない。また、小学校で書記の仕事を引き受けたとあり、それはやり通しただろうが、「根気よく最後までやり通す」という具体的な様子までは描かれていないので、ウも適切とはいえない。

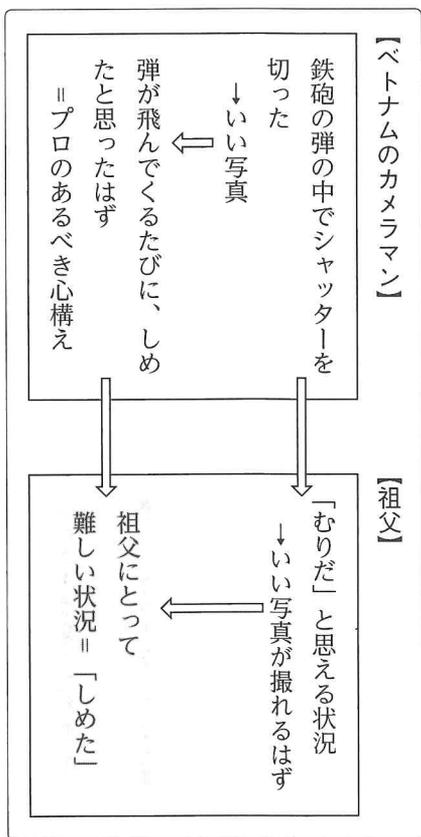
◆ 演習問題 ◆

42～43ページ

(1) イ
 (2) 例 無残な結果に終わることを惧れる気持ち
 腰も背もしゃんと伸びていた
 (3) ウ
 (4) 祖父＝オ
 (5) 父＝ア
 (6) ウ

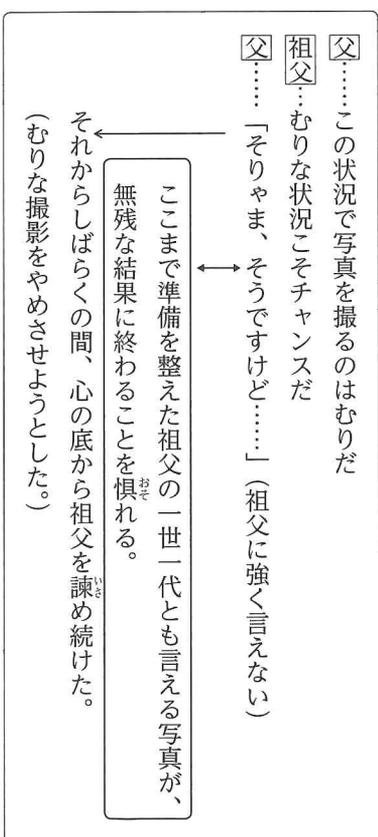
【解説】(1) 父の言葉に対する、「けっこうじゃあねえかい」という満足げな祖父の返答に注目する。ここで、祖父はベトナムのカメラマンを例に出し、プロとしてあるべき心構えを述べている。これが、現在の祖父の状況とどのよう

に対応しているかを捉える。



戦場のまっただ中にいれば、真に迫ったいい写真を撮ることが出来る。そう考えると、プロのカメラマンならば、危険な状況こそ「しめた」と思うはずだ。同様に、祖父も、「むりだ」と思われる難しい状況こそ、いい写真が撮れるチャンスだと考えているのである。したがって、イが正解。ア、ウ、エの内容は、いずれも文章中から読み取れない。

(2) 線②までの流れを整理する。



厳しい条件での撮影になるので、父は、祖父が失敗することを心配して、無理な撮影をやめさせようとして説得を続けたのである。

【記述ポイント】与えられた書き出しから、「祖父の写真」がどうなるのかに注目して、「無残な結果に終わることを惧れた」という点を押さえる。「どのような気持ち」と問われているので、文末は「……気持ち」という形でまとめる。句点は書かないように注意する。

(3) まず、このときの祖父の様子を捉える。

祖父

・両肘をぐいと締め、何度もファインダーを覗きながら足場を定める。

・腰も背もしゃんと伸びていた。

ふだんの老耄した姿など嘘のよう

このうち、祖父の「いつもと違う様子」が表れているのは「ふだんの老耄した姿など嘘のように、腰も背もしゃんと伸びていた」という様子。年老いて衰えた姿ではなくなり、現役の写真師として撮影の準備に取り組んでいるのである。

(4) この場面では、祖父と父が撮影する様子を、母と「僕」が見守っている。

このときの母の様子に着目して、母の心情を捉える。

・「おじいちゃん、写せるかなあ」という「僕」の言葉に答えない…集中
・じっと夫と父の仕事を見つめる…不安・信じたい気持ち など
・背中から「僕」を抱きすくめる…心が落ち着かない様子
・「僕」の鼓動と同じくらい高鳴る、母の胸…期待・不安など

母の様子から、「緊張」の中で「期待」と「不安」がせめぎあっていると考えられる。ここでは、母は、撮影が成功してほしいと見守っているのであり、うらやましく思う、という意のウ「羨望」にあたる気持ちは見られない。

(5) 一度きりのチャンスしかない写真撮影という緊迫した状況で、祖父と父がどのように対応しているのかを整理して、そこから人物像を捉える。

【祖父】

・ベトナムのカメラマン(↓むりな状況こそチャンス)…高いプロ意識
・父が諫めても「頑として譲らなかつた」…頑固
・「フラッシュをセットしたペンタックス」を拒否。

…自分の腕を信じている(職人氣質)

・ふだんの老耄した姿など嘘のように、腰も背もしゃんと伸びていた。

…職人らしい態度

・花電車との間合いを計って、合図で撮影…職人らしい見事な仕事ぶり

祖父は、難しい状況をあえて選び、自分の腕を信じて、最上の仕事をしようとしている。職人としての高いプロ意識が読み取れるので、オが適切。

【父】

・「そりゃま、そうですけど……」(師に強く言えない)…師への敬意

・「心のやさしい父」

・真摯なやりとり⇨忠告(祖父の失敗を心配)…師への敬愛とやさしさ

・フラッシュをセットしたペンタックスを提案…やさしさ

・祖父の指示通りに準備して、スタンバイ…師への敬意

父は、頑固な祖父を師として立てながら、祖父のことを思って行動しているの、アのような人物だといえる。

(6) 選択肢のそれぞれの内容を文章中の内容と照らし合わせる。この文章では、祖父と父が花電車を撮影する場面が描かれているが、ウの「古きよき時代への愛着」については触れられていない。したがって、ウが適切でない。

アは、花電車の撮影に対する祖父や父の真剣な仕事ぶりから読み取れる。

イは、父の祖父への思いやりのほか、父と祖父の仕事を見守る母や「僕」の気持ちからも読み取れる。エは、「むり」と言われる状況で、あえて撮影をしようとする祖父の姿勢から、そして最終的には祖父を助けようと真剣に撮影に向き合う父の姿からも読み取れる。

- (1) ウ
 (2) 例明や肥前のまねではない九谷の色絵磁器。() (18 (19) 字)
 (3) A おまえたちの手で B ア
 (4) 例利治の夢を共に追い求める覚悟が決まった。(20 字)
 (5) イ

【解説】 (1) 沈黙が続いたのは、直前の「ばかを申せ。……わしはそう信じておる。」という利治の言葉に、定次たちが答えられなかったからである。その理由を、線①の前後から読み取る。

- ・「……まったくどうしてよいか、めども立ちませぬ。」
- 定次は、不安をすなおにいった。
- ・定次は、あの陶石で、このような色絵磁器が焼けるかどうか、まったく見当がつかなかった。
- ・「信じているだけでは、やきものは焼かせぬ。」

【定次たちの思い】
 現実の磁器とは思えない
 色絵が焼けない

(2) 色絵磁器を自分たちで焼けるとは思えない定次たちは、可能性を信じている利治に反論したい。しかし、主君の考えを簡単に批判できないため、黙っていたのである。したがってウが正解。ア「面倒なことが多すぎて」、イ「利治のあまりの勝手さに怒りを感じ」は読み取れない。また、定次たちは否定的な見解をもっているのです。エ「答えようにも答え方がわからず」も不適切。

——線②より後に、利治が定次たちに言った言葉に注目する。

「同じものを焼けというのではない。めざすのは、九谷の色絵磁器だ。」
 「明や肥前のまねではない、それをのり越えて、おまえたちの手で見つけた美しさを……」

利治は、他のまねではなく、自分たちだけのものを作るように繰り返し述べている。

【記述ポイント】 同じ内容が言葉を変えて繰り返し選んでまとめる。

(3) 設問の文から、Aには利治が定次たちに言った言葉が、BにはAの言葉に込められた心情が入ると考えられる。そこで、利治の言葉に注目する。

・「定次、権左衛門、やきものの美しさを、おまえたちの手で見つけるのだ。……おまえたちの手で見つけた美しさを、……見せてほしい。」

↓納得できる仕事をしてほしいという思い

期待と信頼
 いたわり

「定次、権左衛門」と呼びかけ、二人の手で新しい美しさを見つけてほしいと繰り返し伝えている。そのために、きちんと時間をかけて納得のできる仕事をしてほしいという思いから、利治は「あわてぬぞ」と言っているのである。二人に対する期待と信頼の大きさが表れている。よって、Bにはアが当てはまる。また、二人に対する大きな期待と信頼が込められている言葉を、利治の言葉から探すと、「おまえたちの手で」という言葉が見つかる。他の誰でもない、定次と権左衛門に全てを託そうとする思いが伝わってくる言葉である。

(4) 「心が決まった」とは、決心したということ。このとき定次がどのような決心をしたのかを、ここに至るまでの利治との会話から捉える。

利治「わしは、色絵やきものの夢を死ぬまで捨てぬ……、
 が、あわてぬぞ、よいか。」

「色絵やきもの」への利治の強い熱意
 利治の夢を受け止める

定次「ははっ、かならず焼き上げますまでは……。」(決心)

定次は、利治の言葉聞いて、利治の「色絵やきもの」への夢を感じ取り、利治の夢を受け止めよう、つまり、実現させようと考えたのである。

【記述ポイント】指定語句の「夢」とは、利治の夢のこと。「覚悟」とは、定次の決心のこと。与えられた書き出しに続けて、定次は「利治の夢」に対してどうする「覚悟」を決めた、という形でまとめる。

(5) 利治が、目の前の状況にどのように対応しているのかに注目し、そこから人物像を捉える。

<ul style="list-style-type: none"> ・「ばかを申せ。……わしはそう信じておる。」 ・「焼けると信じるから、できるのだ。……焼きもしないで、焼けぬといえるか。」 	弱気な定次たちに 対する厳しい言葉
<ul style="list-style-type: none"> ・定次たちに研究させるため、せっかく手に入れた「明の赤絵南京皿」「柿右衛門赤絵皿」を刀のつかで割る。 	かたい決意 鋭い気迫
<ul style="list-style-type: none"> ・「定次、権左衛門、やきものの美しさを、おまえたちの手で見つけるのだ。」 ・「わしは、色絵やきものの夢を死ぬまで捨てぬ……、が、あわてぬぞ、よいか。」 	定次たちへの期待・ 信頼・いたわり

利治の発言や態度からは、家臣への厳しい態度、目的遂行への固い決意、家臣への信頼といたわりなどが読み取れる。したがって、イが正解。ア「藩民一人ひとりの希望を実現する」という内容は、文章中に描かれていない。「短気で怒りっぱく」「力ずくでことを進めようと無理ばかりを押しつける」「家臣からあきれられて信用されない」は、いずれも利治の言動から読み取れない。また、定次や権左衛門に意見を求めていることから、エ「目的実現のためなら人の意見を聞かない」も不適切である。

6 主題

◆ 確認問題 ◆

- (1) A 梅干しを夜に食べるな B ばあちゃん
(2) イ
(3) ウ

解説

(1) 「えっ、と声をあげる」というときの「えっ」は驚きの声。どのようなことに驚いたのかを、——線の前後から読み取る。

榎人「梅干しを夜に食べるなって、小さいときから言われてたの？」
ばあちゃん「おじいちゃんと結婚するまで聞いたこともなかった」
→ えっ、と声をあげる
いつだって梅干しについて言うのはばあちゃんなのだ。

質問の内容からわかるように、榎人は「梅干しを夜に食べるな」という言い伝えは、ばあちゃんが小さいときから言われていたのかもしれないと考えていた。しかし、ばあちゃんは「おじいちゃんと結婚するまで聞いたこともなかった」と言う。つまり、「梅干しを夜に食べるな」という言い伝えは、おじいちゃんが育った家のもので、ばあちゃんは、結婚して初めて知ったことになる。自分の予想もしない答えだったので、榎人は驚いたのである。

(2) 文章全体の表現の特徴について答える問題。それぞれの選択肢に示された表現の特徴と内容を、文章と照らし合わせて適切か確認する。

イは、この文章が、全体的に榎人が話すような口調で書かれているので、「口語的な言葉遣い」は当てはまる。また、語り手は榎人で、榎人の家の食卓でのやりとりが描かれていることから「榎人の目を通した何気ない日常」も合っている。したがって、イが正解。

アは、「会話文をふんだんに使って」は、表現の特徴として合っているが、

この物語は槇人の視点で語られているので、「第三者の立場」とはいえない。ウは、「比喩」は文章中で使われていないので不適切。エは、外来語はほとんど出てこない。「外来語を駆使して」が誤り。また、家族とはどのようなものかについて、「変わりゆく家族のあり方」は描かれていない。

(3) まず、食事の言い伝えについて、主人公である槇人の考え方が、この場面でどのように変化し、どのように感じたのかを押さえる。

- ・父さんと母さんが、最初は別々の家庭で育っていたのだと思うと、とても不思議な気がした。
- ・じいちゃんとはあちゃんも、最初は違うところから来て、違う言い伝えを持ち寄って、それらを混ぜていったんだ。

家族

それぞれの言い伝えが、集まって、また別の形になっていく

←

槇人の思い

- ・本当はものすごいことなのかもしれない。
- ・つまらないものだと感じていた、いつもの食卓の風景が、いきなり別ものみたいに見える。(＝当たり前じゃない)

それぞれの言い伝えが集まって新しい家族になり、新しい言い伝えができる。その言い伝えがまた持ち寄られて別の家族ができる。そのような積み重ねの中に自分があるのだと気づき、槇人は家族のかけがえのなさを「本当はものすごいことなのかもしれない」と思ったのである。したがって、ウが正解。アは「毎日の食事の楽しさと喜び」が、イは「日本の伝統的な家族像への興味と関心」が、エは「自分の家族の特殊性を知り」「家族へのいたわりと愛情」がそれぞれ誤り。

◆ 演習問題 ◆

(1)		だれにもなくいうこと。
(2)	1	例 おどろき、取り乱し、狂ったように泣きだす(20字)
(3)	2	イ
(4)	エ	

解説 (1) 指示語の前を見ても、「話」の具体的な内容が書かれていないので、指示語より後の部分から、文也が「きのうから、いおういおうとしていた」ことを読み取る。

きのうから、いおういおうとしていた**あの話**

- ・だれにもないしよで、二月に奨学生試験を受けていたこと
- ・それにパスして、きのう、イギリスでのホームステイ先が決まったこと
- ・出発はこの秋だということ

←

目をそらし、いっきにまくしたてた

文也は、だれにもないしよで留学の準備を進めていた。奨学生試験にパスし、ホームステイ先が決まったので、あとは保護者のハンコ(承諾)だけが必要な状態になっている。母に知らせなければいけないので、ようやく留学の話切り出している。それを「あの話」と表現したのである。

(2) 1 文也が、ないしよにしていた留学の計画を伝えた場面である。文也の話に対して、母がどのような反応をしているか、また、文也自身は母がどのような反応を示すと予想しているのかを、——線②の前後から読み取る。

母の反応

- ・ 鍵がポロリと落ちた

↓ 鍵を落としたことにも気がつかないほど、おどろいている

- ・ うすく口をあけたまま、声をださない

予想どおりの反応 (——線②)

← 文也が予想した、この後の母の反応

- ・ 取り乱さなはずはない
- ・ 狂ったように泣きだすだろう

文也は、母がおどろく姿を見て「予想どおりの反応」だと思い、そのあと「取り乱して、狂ったように泣きだす」と想像している。

【記述ポイント】 予想どおりの母の「おどろいている」様子と、「取り乱さなはずはない」「狂ったように泣きだすだろう」というさらなる文也の予想を全て押さえて、文章をまとめる。

【誤答例】 うすく口をあけたまま、声を出さない

(母の大変なおどろきを表す反応だが、文也は、母が「口をうすくあけるだろう」と具体的な姿を予想したわけではない。どんな形であれ、ひどいおどろき方をするだろうと予想していたのである。)

2 文也の話を聞いた母の様子に注目する。最初はひどくおどろき、「フミくん……」と言うだけで、言葉もなかったが、そのあと文也にどのような言葉かけたのかを整理する。

・ 「文也、あなたも大人になったのね。」

(静かな声／とてもすがすがしく、ニッコリして) ≡ 本心

・ 「いってきなさい。いろんな勉強をして、もっと大きくなってらっしゃい。」

・ 「あなたの人生だもの、思ったとおりに進んでみなさい。」

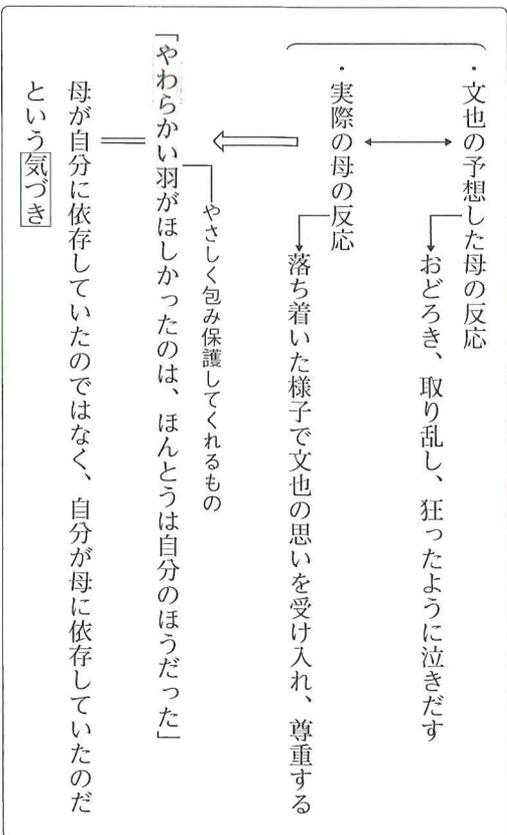
・ 「母さんは、いつでも応援してるわ。」

取り乱した様子はなく、文也の決心を前向きに受け止め、応援しようとしている姿が読み取れる。したがって、イが正解。ア「本当の気持ちを隠して」、ウ「文也に裏切られたと感じ、そっけない態度をとった」、エ「文也を思いとどまらせるために、静かに説得を始めた」が、それぞれ不適切。

(3) 表現の特徴についての問題。それぞれの選択肢に示された表現の特徴と内容を、文章と照らし合わせて正誤を確認する。

アは、「擬人法」は使われていないし、この文章は文也の視点から描かれているので「母の立場から」も合わない。イは、「ぼくは、ぼくは……」と言葉に詰まっているのは、文也が母の深い愛情を知って安堵と感謝の気持ちを感じているためで、「深い失望」ではない。ウは、「文也の視点」は正しい。また、文也と母の関係を「親鳥」と「ヒナ鳥」にたとえているが、このとき直喩は用いていないので「隠喩」も正しい。エは、□の範囲で文也は戸惑っていないし、「倒置」も用いていない。

(4) ここでは、文也が意を決して留学について母に打ち明けたことが、中心的な出来事である。これによって文也の気持ちにどのような変化が生じたのかを押さえる。



文也は、予想外の母の反応から、母は息子が自立することへの心の準備ができていたことを知った。それと同時に、母が取り乱すと考えていた自分のほうが、むしろ、母の愛情を当たり前のもののように思っ、甘えていたのではないかと気づいたのである。その気づきが、文也の自立への一歩になっていると考えられるので、エが最も適切。アは「本心をさらけ出せない」「親子のすれ違い」が、イは「過保護な親の危険性」「外の世界へ飛び立たせることの大切さ」が、ウは「子離れができない母の葛藤」がそれぞれ不適切。

◆実戦問題◆

50～51ページ

- (1) エ
 (2) 例美咲の怒りを受け止める覚悟。
 (3) 安易な同情
 (4) イ

【解説】(1) まず、——線①の表現に注目すると「指先だけが、シーツを握りこんでいた。」とある。手を握りしめたり、何かをぐっと握ったりするのは、何かの感情をこらえている動作である。ここから、このときの美咲は、何かをこらえていると予測できる。そこで、この後の、友迫さんたちが帰った後場面から、美咲が何に耐えていたのかを読み取る。

- ・「よくも、こんな恥ずかしいこと、してくれだね」
 ——友迫さんの涙
- ・これは屈辱だ。美咲にとって、安易な同情ほど屈辱的なものはない。
- ・自分が、かわいそうな少女にされてしまったことに、美咲は蒼白になって怒っている。怒りながら、耐えていた。
- ・「何よ、なんで、あたしが泣かれなくちゃいけないのよ。」
- ・悔しい、悔しい、ちくしょう。

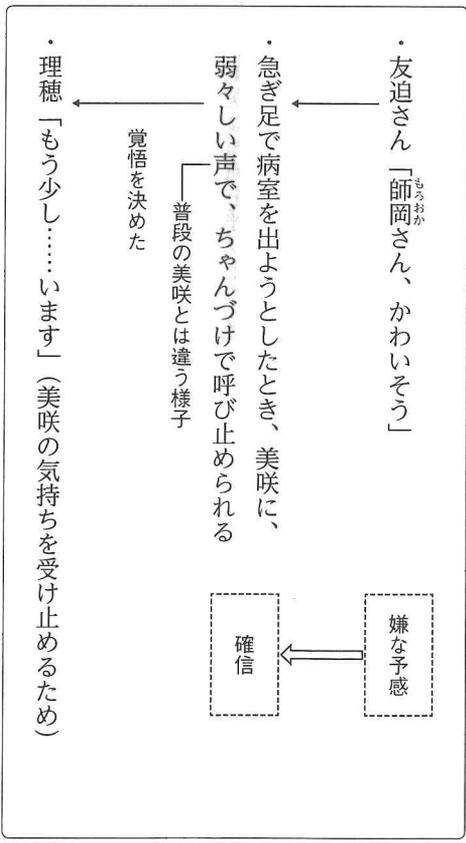
美咲が、友迫さんに泣かれ、「かわいそう」と同情されたことに対して、激しく怒り、悔しがっていることがわかる。——線①の美咲は、シーツを握りながら、この悔しさに耐えていたのである。したがって、エが正解。

アの「お見舞いに来て優しい言葉一つ掛けない理穂に怒りを覚えている」という内容は、文章中のどこからも読み取れない。

イは、「友迫さんの態度は自分への侮辱である」という部分は合っているが、美咲の怒りの対象は、安易な同情をした友迫さんと、「優しい親友の役を拒否できなくて、のこのこついてきた」(60～61行目)ことで、そのような屈辱的な状況を作り出す一部に加わっていた理穂である。したがって「それ」＝美咲への侮辱)に気づかない周囲の大人への怒り」が誤り。

ウは、「お見舞いに来てくれたことを申し訳なく思う」という気持ちは、美咲の様子からは読み取れない。また、「弱々しい姿を見られるのを恥ずかしく思っている」も不適切。

(2) ——線②の直後に、理穂は「もう少し……います」と病室にとどまることを表明している。つまり、「覚悟」とは、みんなが帰ったあとで、二人きりで美咲と向かい合う覚悟ということである。なぜ「覚悟」が必要なのか、それまでの出来事と理穂の気持ちの変化を整理する。

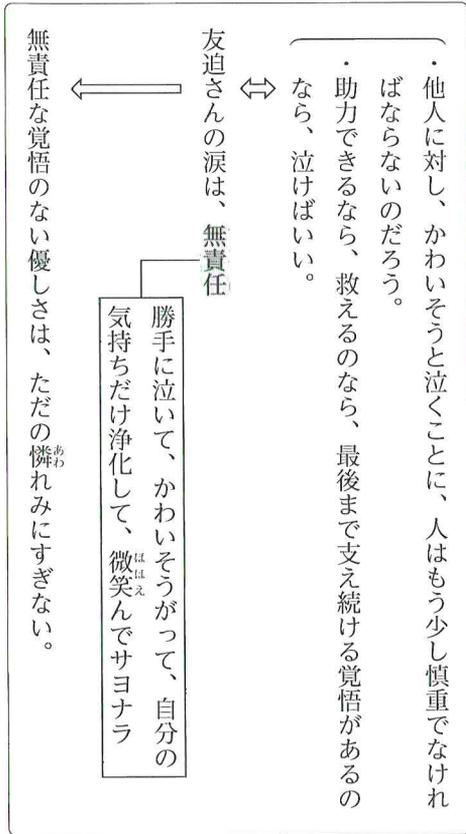


理穂は、友迫さんの安易な同情が美咲の気持ちを損ねたのではないかと予感していた。しかも、帰りがけに、美咲から不自然な呼び止められ方をしたことで、美咲の怒りを確信し、相手をするしかないという覚悟を決めたのである。実際、二人きりになった直後に美咲はいきなり理穂の頬をたたいており、激しい怒りを感じていたことがわかる。以上のことから、「覚悟」とは「美咲の怒りを受け止める」覚悟だと考えられる。

誤答例 もう少し残って美咲と話をする覚悟。

(美咲と話をするだけなら、「覚悟」は足りない。理穂の想定している、「覚悟」が必要なほどの状況とは何かを具体的に説明する。)

(3) まず、「友迫さんの涙」がなぜ「まずかった」のか、これより後の文章から読み取る必要がある。



理穂は、友迫さんの涙を、無責任な覚悟のない優しさで、ただの憐れみにすぎないかと考えていることがわかる。これと同じ内容を表す五字の言葉を、線③より前の部分から探すと、前の段落に「安易な同情」とある。

(4) この場面の出来事と、登場人物である美咲と理穂の心情の変化を整理すると次のようになる。

出来事	美咲の気持ち	理穂の気持ち
<ul style="list-style-type: none"> 友迫さんが、「師岡さん、かわいそう」と泣く (＝安易な同情) 理穂たちが辞する ↓美咲は理穂を呼び止める 	<ul style="list-style-type: none"> 怒りと悔しさに耐える 	<ul style="list-style-type: none"> 嫌な予感 落ち着かない気分
<ul style="list-style-type: none"> 美咲が理穂の頬を打つ 美咲の母が帰ってくる 美咲の顔をタオルで拭く 	<ul style="list-style-type: none"> 怒りと悔しさを爆発させて、涙を流す 	<ul style="list-style-type: none"> 嫌な予感が確信に変わる↓覚悟する 美咲が屈辱を感じていると、わかっている 美咲の泣き顔を誰にも見せたくない

美咲は、人前では感情を抑えていたが、理穂と二人きりになると悔しさと怒りを爆発させ、涙を流している。一方、理穂は、友迫さんの涙を見たときから、美咲の気持ちを感じ取っており、二人きりになると美咲の怒りを理解して受け止めている。また、美咲の顔を拭いて泣き顔を見せないようにすることからも、美咲の勝ち気な性格をよく理解していることがわかる。ここから、内容的にはイ「人前では簡単に涙を見せない……理穂の心の動き」が当てはまる。また、この文章は会話が中心で、目の前で人物のやり取りを見ているような感覚を生み出している。「会話を中心とした臨場感ある表現」も当てはまる。したがって、イが正解。ア「死を覚悟した」「大人びた考え」は描かれていない。また、理穂は美咲のことをよくわかっているのに、「必死に理解しようとする理穂」も誤り。「色を多用した表現」は冒頭の病室での美咲の様子を絵画的に評したもので、「心の交流」とは関係ない。ウ「傷つきやすい性格の美咲」「あえて厳しく接する理穂」は文章中の内容と異なる。「比喩を多用」もしていない。美咲は人前では感情を抑えていたので、エ「何気ない一言にも感情をあらわにする」は不適切。また、理穂が美咲を「立ち直らせようとする」様子は読み取れない。さらに、物語は理穂の視点で描かれているので「複数の視点から多面的」も合わない。

ること。ここでは、厳しい暑さや寒さを、多少我慢しつつ、うまい具合にやり過ぎすことを表していると考えられる。

(4) スイカとアイスクリームなどのお菓子類の対比から、相違点を押さえることで、スイカの特徴を捉えることができる。

アイスクリームなどのお菓子類：買うのは簡単で、始末も手軽

← スイカ： →

（かつては夏の日につき物のお八つ
冷やして切り分けなくては口に入らない
切り売りしてあるものは涼味が失せている
（＝自分で切り分ける必要がある）

- ・切り分けるときの冷氣↓一瞬、夏の昼下がりから刺々しさが消える
- ・手間はかかるが、それだけの価値がある

スイカは、食べるために手間がかかるが、それに値するような、涼味を感じることができるので、ウが適切。アはお菓子類の説明。イの「体によい」かどうかの観点では語られていない。エ「お八つの主役に戻る」かどうかは、問題にしない。

(5) 最後の一文が「そう私は思っている。」と、筆者の考えを示す表現になっているので、「そう」の指す内容を捉える。

心も体も動かさず、依頼ばかりするのに慣れきった己を戒め、たまには手の届くものでやりくりしてみても如何だろう。

工夫することによって得られる満足感は、流通に乗って手元に届けられるものとは一味違う。

← そう ← 私 ← 思 ← っ ← て ← いる。

つまり、手の届くもので「工夫」すれば、流通に乗ってきた便利なものを買っ

たりするのは一味違う「満足感」が得られると、筆者は考えているのである。

◆ 演習問題 ◆

(1) 1 正しいけれど味わいが乏しいのではないか（という思い）（19字）
2 例時間を合理的に使っているという、したり顔が気に入らない。
(28字)

(2) 例一度ぐらい負けたことのある方が、思いやりがあるから。

(3) イ

(4) エ

(1) 1 「もめごとを起している夫婦」の例などを交えながら、筆者と「時間の使い方が実にうまい人」（知人）の考えの違いが示されている。

知人：別れるべきよ。別れて新しい人生を踏み出さない

ハッキリしない

筆者：人間は、理屈だけで簡単に割り切れるものではない
のたうち廻りながらも、もうすこし考えてみたら

正しいけれど味わいが乏しいのではないか

お互いの考え方の違いから、知人は筆者のことを「ハッキリしない」と感じ、筆者は知人のことを「正しいけれど味わいが乏しいのではないか」と思っている（13～15行目）。

2 「もめごとを起している夫婦」への対応の違いを示した後で、筆者は、自分の言葉でこの知人に対する感想を述べている。設問で指定されている「合理的」という言葉を手がかりに、筆者の感じ方を捉える。

・お茶を二時間習い、時計が三時になったから、すぐシヨパンが弾けるものでしょうか。…疑問

← 私は非能率的といわれても、お茶を習った日はお茶だけにして、夜までその気分を大切にしたいと思う…筆者の考え方

・それよりも、「私は時間を合理的に使っているでしょ?」という、したり顔が口惜しい…知人に対する感じ方

時間と区切って次々に物事をこなす行為そのものは是非以前に、その「したり顔」の態度が「口惜しい」、つまり腹立たしくて気に入らない、と述べている。「したり顔」とは、「うまくやったと得意そうな顔」をすること。
【記述ポイント】合理的な彼女の考え方や態度を「したり顔」と受け止め、「気に入らない」と感じているということが書けていればよい。

【誤答例】合理的ではなくても、夜までその日の気分を大切にしたい。

(2) 「負け犬」とは、けんかに負けてしっぽを巻いて逃げる犬の様子から、「勝負に負けてみじめに引き下がる者」を意味する。一般的によくない意味で用いられるが、筆者は「負け犬が好き」と明言している。また、その理由について、直後に「人も犬も、一度ぐらい相手に食いつかれ、負けたことのある方が、思いやりがあつて好き」と述べている。

【記述ポイント】「なぜ」と理由を問われているので、文末は「……から」「……ため。」などとする。

(3) — 線③のそれぞれの言葉の意味を確認する。

時を刻むもの

「時計の奴隷」

落ちぶれる

「なり下がつた」

あるものに心を奪われて、それに従う行動しができなくなった人

つまり、「時計の奴隷」とは、時計が刻む時間の流れに無批判に従っている人のこと。「なり下がる」という表現を用いていることから、筆者がこのことをよくない傾向だと感じていることがわかる。イ「制御」とは、「おさえつけて、自分の思いのままにすること」を意味するので、「奴隷」とほぼ同じ内容を表している。

(4) 「……と思う(思います)」という表現や、表現が工夫されている部分に注目すると、最終段落に筆者の思いがまとめられていることがわかる。

・どんな毎日にも、生きている限り「無駄」はないと思います。【後悔】も、人間の貴重な栄養です。(筆者の考え方)

【後悔】も、人間の貴重な栄養です。(筆者の考え方)

・いつの日かそれが、「無駄」にならず「こやし」になる日が、「あか」にならず「こく」になる日が、必ずあると思います。(筆者の考え方)

人間としての味わいや深み、を表す

・真剣に暮らしてさえいれば——です。(補足条件)

筆者は、人生に「無駄」はないと考えている。そして、無駄だと感じたときの「焦り」や「後悔」は、いつか成長を支える要素となり、結果的に人間として味わいや深みが増すことになると考えている。このような思いを「栄養」「こやし」「こく」などの比喻表現によって、印象的に伝えているのである。したがって、エが正解。アは、「無駄」は必要だと考える筆者の考え方と反対の内容になっている。筆者は、イの「無駄のない生き方」には否定的だが、「過信しすぎると、思わぬ失敗をする」とは述べていない。ウは、文章中の「栄養」は比喻表現であつて、「栄養をとって健康に暮らすことが大切だ」ということを述べているわけではない。

◆ 実戦問題 ◆

56 ~ 57 ページ

(1) エ

- (2) と同時に (3) イ
自分の作品

【解説】(1) — 線①は、試作品の台車のこと。「ぶざま」「かれん」が、具体的に台車のどのような様子を表しているのかを、②段落の、完成した台車の描写から捉える。

②段落に描かれている台車の様子

- ・リヤカーとも大型の乳母車ともつかぬ、義理にも格好が良いなどとはいえぬ台車
- ・エンジンの甲高い音を放って懸命に塗装工場の前を走って行くそれ（＝台車）を見ると、なんともいえぬ気持ちに襲われた

ぶざま（格好が悪い様子）

かれん（いじらしくいたわりたくなる様子）

試作品の台車は、外見は不格好ではあるが、懸命に走る姿はいじらしくて、筆者がいたわりたくなるような気持ちになっていることがわかる。これは製作に関わった者の、台車に対する愛着が関係していると考えられる。したがって、エ「親しみ」が正解。アは、「かれん」の要素しか表していない。イ「謙そん」は「かれん」の要素に当てはまらない。ウ「落胆」はこの場面とは逆の感情である。オは「ぶざま」の要素に当てはまらない。

(2) — 線②「その動き」という指示語の指す内容を整理する。

ぼくが感動をさそわれたのは、あぶざままでかれんな車の走る姿であるというより、むしろそれを追って一斉に駆け出した人々の大きな動き

あるいは、車を追って駆け出す人々と、ぼくがその動きを共有することができたため

したがって、— 線②は、ぶざままでかれんな車（＝試作品の台車）を追って一斉に駆け出した人々の大きな動きを、筆者が共有できた」という意味になる。

そこで、台車を追って人々が一斉に駆け出した場面に注目し、筆者がその動きを共有できたことが描写されている部分を探す。

・走った、走った、と声をあげ、その場にいた作業服の人々が一斉に車の後を追って駆け出した。

←

・車を追って思わずどっと駆け出した人々の動きが、まるで自分の血のように身体の中に脈打っているのを感じてもいた。

＝

・それまでに経験したことのない、なにか大きな分厚いものに背後から押し込まれるのに似た感動をぼくは味わっていた。

— 一体感

筆者の、周りの人々との一体感を表す文は二つあるが、設問に「直喩を用いて表した」とあるので、「まるで自分の血のように」を含む一文を答える。

(3) — 線③にある指示語「それ」が指す内容を確認する。

・多数の人々が集ってなにか一つのことを成し遂げた時、そこに感動の生まれるのはよくあること

【例】優勝したスポーツチームの選手が泣く

力に合わせて準備した催し物が成功した時に胸が熱くなる

⇔ けれど

・労働の場における始走式や進水式の感動には、なにかそれ以上の重みがあるように思えてならない。

「それ」とは、スポーツや催し物など、多数の人々が集ってなにか一つのことを成し遂げたときの感動を指している。筆者は、「労働の場における始

走式や進水式の感動」には、そのようなスポーツや催し物の場での感動以上の重みがあると感じているのである。その理由を「重み」という言葉を手かりに探す。

・この重みは、感動の中心にあるのが労働であつたからに違いない。

・日常作業の目には見えぬ無限の積み上げが到達した成果には、日々の生活自身の重みがゆつたりと詰め込まれていたのだろう。

筆者は重みの理由を、「感動の中心にあるのが労働であつたから」と断じている。この「労働」とは、「日常作業の目には見えぬ無限の積み上げ」であり、筆者は、そうした積み上げの成果には「日々の生活自身の重み」が詰め込まれていたと考えている。したがって、「日々の労働の積み重ねによる成果だという共通の思いがある」とあるイが正解。ア「や」と単調な日常作業から解放されたという喜び」は、文章中に描かれていない。⑥段落には、労働について「特別の決意や際立った忍耐を必要とはしない」と述べられているので、ウ「労働のつらさに耐えながら日々生活を送っている」は文章の内容と合わない。喜びの表現については、⑤段落に「口に出し、身体に現さずとも、心の内にあるものは自然にわかり合っている」とある。表現する必要性がないと感じているだけで、エ「口に出したり身体に現したりしてはいけない」というわけではない。

(4) 設問の文を確認すると、「試作に関わつたすべての人たちは、それぞれが完成した一台の台車を□として捉え」となっている。試作に関わつた人たちが、完成した台車をどのよう捉えていたのかを、文章から探す。設問中の条件に合わせて、始走式について描写されている②・③段落を見ていくと、③段落に「一台だけのあの車は、試作に携わつたすべての人々にとつての自分の作品であつたのかもしれない」とある。

重点講座 2

文学的文章の形式別対策

標準問題

58 ~ 63 ページ

- ① (1) ウ (2) イ・オ [順不同]

解説 (1) 選択式の内容読解問題では、まず内容を読み取り、選択肢を精査する。ここでは、——線①に至るまでの母の言動に注目して気持ちを読み取る。

・アパートにいつて荷ほどきをすると母は言い張った……娘が心配
⇔
・「これからひとりやっていかなきゃならない」
・母は自分に言い聞かせるようにつぶやいて、幾度か
小刻みにうなずく
娘に任せようと心に決める様子

初めは、娘を心配して付き添おうとしたが、結局、娘に任せようと心に決めたので、ウが正解。アは、前後が逆。娘を信じようと決めたから、まっすぐ歩いていったのである。イ、エはこの場面からは読み取れない。

(2) 複数解答の選択問題も、一つを選ぶ場合と解き方は同じ。ここでは、——線②の前後の「私」の様子や心情を表す言葉に注目して心情を読み取る。

・遠ざかる母のうしろ姿を私はずいぶん長いあいだ眺めていた↓泣き出しそうになった
⇔
・ひとりになって泣くなんて子どもみたい
・母が向かう先とは反対に走り出す
・かんかん音をさせてアパートの階段を駆け上がり
寂しき 心細き
言葉や行動で、自分を元気づけようとしている

母を見送りながら、「私」は次第に心細くなっている。一方で、「走り出す」「かんかん音をさせて」などからは、元氣よく振る舞うことで、気持ちを切り替えようとしている様子も読み取れる。したがって、イとオが正解。

- ② (1) エ(↓)ア(↓)ウ(↓)イ (2) ウ

解説 (1) 良平の言動、様子、心情を表す言葉などに注目して考える。

・頭と足……どっちにしたらいいのか。
↓良平は一瞬迷った。逡巡した。……迷い↓エ
~~~~~  
・そろそろと欄干に足をかけた。  
~~~~~  
おすおすと欄干の上に立った。……恐怖↓ア
~~~~~  
・何かがふわりと吹っきた。……決心↓ウ  
~~~~~  
・いうにいわれぬ快感↓「やった」胸の奥で叫ぶ ……喜び↓イ

(2) 正誤問題では、選択肢の内容を一つずつ文章と照らし合わせて正誤を判断する。「適切でないもの」を選ぶ場合もあるので設問文に注意する。

アは、良平は、大倉に「足から飛びこめ、畑中」と言われて「はいっ」と答えているので、適切。

イは、良平が橋の下を覗きこむと、「渦を巻いている水が見えた」とあり、「また自分が小さく見えた」とあるので、適切。良平は、川の力強い流れを前にして、自分がちっぽけな取るに足らない存在に思えたのである。

ウは、良平は、飛びこむ直前に空を見上げ、自分のちっぽけさを思い、「悲しいくらい大きな空」だと感じている。そして、「何かがふわりと吹っきた」「悲しさがけて」「飛んだのだから、悲しみを振りはらって」「悲しいくらい大きな空」に向かって飛んだことになる。よってウは「川の水面を見つめながら」も「悲しい思いで」も不適切。

エは、文章中に「両足にどんと衝撃を受けて、良平の体は柔らかいものにつつまれた」「見上げると水の上に空があった。」とある。水面にぶつかって足に衝撃を受けた後、水中に潜っていく様子が読み取れるので、エは適切。

- ③ (1) 目的ではなくて手段(9字)

(2) 話題提供(「話題提供」)

解説

(1) 空欄補充問題では、まず、空欄の前後を確認し、空欄に入る言葉としてどのようなものを探せばよいのかを推測する。ここでは、「ぼく」が、「ロケットをつくること」をどう思っているのかが入る。他のメンバーとの違いに注意して、——線①までの内容を整理すると次のようになる。

ロケット班の連中……つくりたいからつくる(ロケットが目的)
↔
ぼく……
ロケットは目的ではなくて手段にしか思えなかった
ロケットは人間が遠い星へ到達するための乗物
—— そう信じて、こう言った。
—— いつか、火星に行けるロケットをつくらうよ。

「火星に行けるロケットをつくらう」とは、言い換えれば、火星に行くことを目標にして、その手段としてロケットをつくらうということ。そこには、ロケットは「目的ではなくて手段」だという「ぼく」の考えが表れている。

(2) 抜き出し問題では、まず答えのありそうな箇所をおおまかに押さえてから、該当する言葉を読み取る。ここでは、「ぼく」が「火星情報担当者」として、具体的に何をしているのかが書いてある、——線②の後の部分に注目する。

——線②の直後の一文に「調査結果を発表」とあるが、これは「一語で」という条件に合わない。そこで同じ内容を一語で言い換えている言葉を探すと、次の文に「話題提供」とある。これは一語の複合語なので条件に合う。

【誤答例】講義(「ぼく」は「講義」というよりはむしろ「話題提供」という方がしっくりくる)と誤っている。

- ④ (1) 図書館は好きだったけれど読書は嫌いだった(から)。
 (2) 紙に閉じこゝもつ愉快。

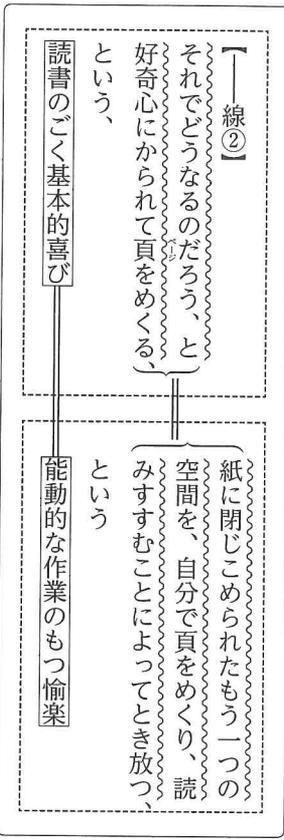
解説

(1) 指定字数のある抜き出し問題では、解答になりそうな箇所を押さえて、字数を確認する。——線①は、筆者が、本を読むふりをしていた」という内容。なぜ読まずに、読むふりだけをしていたのかを考える。

図書館は好きだったけれど読書は嫌いだったので、私にとってそれはそれは退屈な時間だった。
 ←本を読まない理由(＝読むふりをしてきた理由)

筆者は図書館が好きだからその場に留まっていたが、読書は嫌いだったので読むふりをしていたのである。設問に条件がついているので、「……から」に続くように、二十字ちょうどで抜き出す。

- (2) 同じ内容を表している箇所を読み取る場合は、——線部に含まれるキーワードやその言い換えの表現を手がかりにする。



ここでは、——線②の「読書のごく基本的喜び」と「能動的な作業のもつ愉快」(19行目)が対応している。また、具体的にどのような楽しみなのかの説明されている……線部分も、ほぼ同じ内容になっている。「初めと終わりの五字」と指示されているので、「紙に閉じこゝもつ愉快。」を解答する。

- ⑤ (1) 例 早馬がもう走らないこと。
 (別解) 自分が陸上をやめるといふこと。
 (2) 例 兄が陸上をやめることに納得できないから。
 (別解) 早馬がもう走らないのは納得できないから。
 (12字)
 (15字)
 (20字)
 (20字)

解説

(1) この後の部分から、早馬が春馬に伝えようとしている内容を捉える。

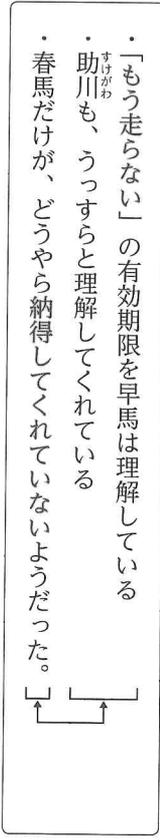
「やめる」と明言するべきだったのだ。
 ←何を?
 ・「夏が終わったら、陸上部は引退する。もう、走らない」

この「もう、走らない」の有効期限は、明言されていないが、「未練も後悔も名残惜しさも、何もかも」を捨て去らなくてはならない状況を考慮すると、もう二度と陸上競技には戻らないという意味だと読み取れる。設問では、「何」と問われているので、文末は「……こと。」など、体言でまとめる。

誤答例 「早馬が陸上部を引退すること。」「早馬が駅伝をやらないこと。」

(単なる陸上部の引退や、駅伝の不参加ではなく、走ることそのものをやるのだということを示す必要がある。)

- (2) ——線②は、不満や怒りなどを表す行動。ここまでの流れを整理する。



春馬は、早馬がもう走らない＝陸上をやめる」ということに納得できないから、——線②のような態度を取ったのである。設問では、「なぜ」と問われているので、「……から。」など理由を表す文末表現でまとめる。

誤答例 陸上をやめることに納得していないから。
 (誰が「陸上をやめる」のかが読み取れない。)

◆ 確認問題 ◆

⑥ (1) 例ライブの本番三十分前で緊張しているから。 (20字)

(2) 例普段は厳しい佐々木さんが、私をぎゅっと抱きしめて優しい言葉をかけてくれたから。 (39字)

解説

(1) 登場人物の言動の理由を説明する記述問題では、その背後にある心情が問われていることが多い。——線①の前後から、「私」の心情を捉える。

・(ライブの) 本番三十分前。

・「私」は トイレから出て、流し場で大きいため息をついている

・佐々木さん「緊張してるんですよ」

↓私は素直にうなずいた(緊張していることを認めている)

「ため息」は、心配、失望、感動など、さまざまな場面が出るものだが、ここでは、ライブの本番前で緊張したため息をついたのである。

(2) 心情の理由を答える記述問題では、そのきっかけとなる出来事が問われていることが多い。また、記述問題の指定語句は、解答のためのヒント。ここでは「普段」の様子を盛り込んで答えることが求められている。——線②までの流れから、「私」を驚かせるきっかけとなる出来事を探す。

・普段の佐々木さん：「歌いまちがえたら、許さないわよ」など

⇔ 激しい一撃が打ちこまれる

・私をぎゅっと抱きしめた。

⇔ はじめての佐々木さんの褒め言葉・はじめての優しい言葉

⇔ 驚きで、緊張がふつとんだ

記述が下 普段の佐々木さんの様子と、今回の佐々木さんの様子を、対比的に示して、「私」が驚いた理由を説明する。

- (1) 口語自由詩
- (2) 工
- (3) イ
- (4) ① すんなり ② 黄金のように光る

解説

(1) 詩の用語・形式上の分類について確認する。

現代で使われる話し言葉 ↓ 口語
古い言葉や文法 ↓ 文語
自由詩 ↑ 音数に決まりがない
× 定型詩 ↑ 一定の音数
音数がわからない場合は声に出して読む

※「口語」「文語」のどちらか ↓ 「自由詩」「定型詩」のどちらかを確認し、組み合わせで五字にする。

※一部に古い言葉を交えてあっても、現代の文法で書かれている場合は口語とみなす。

「鹿」の詩の場合は、「口語」で書かれていて、音数に決まりがない「自由詩」のため、「口語自由詩」と答える。

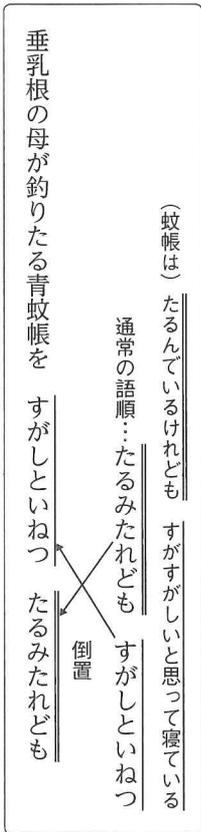
(2) 「彼は知っていた」の行には、何を「に当たる内容がない」ことに着目する。次の行の「小さい額が狙われているのを」が、何を「に当たる内容。普通の文の語順では「彼は小さい額が狙われているのを知っていた」とするところ、語順を入れ替え、二行にして強調している。したがって「倒置」を選ぶ。

彼は知っていた / 小さい額が狙われているのを …… 詩の表現

彼は 小さい額が狙われているのを知っていた …… 通常の言い方

順序を通常の言い方と変える ↓ 倒置

心情が、繰り返しの表現で強調されている。したがってエ「反復」を選ぶ。
 Bでは、(2)で捉えたように「垂乳根の」という枕詞を使い「母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつ」といった後に、最後に「たるみたれども（＝たるんでいるのだけれども）」といている。

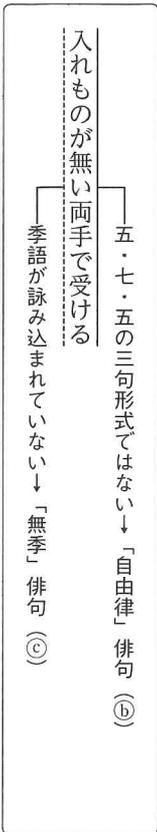


言葉の順序を通常の言い方と変えているので、ア「倒置」を選ぶ。

(4) 切れ字には「や」「かな」「けり」「よ」などがある。Dの下五(結句)には「けり」、Eの中七(第二句)には「や」があり、Dは筑波山に雲がかかっているに、Eははかない存在の露が、石の上で、壊されることのない金剛(ニダイヤモンド)の一粒になっていることに感動を表している。

(5) Fは上五(初句)に「向日葵の」とある。「向日葵」は夏の季語。向日葵が咲いて夏の空が輝いている様子を海辺の風景とともに描いている。Gの季語は下五の「花吹雪」。ここでの「花」は桜のことを指し、桜の花が散って空に舞っていく壮麗な風景が詠まれている。季節は春。

(6) 俳句の定型は、五・七・五の「三句十七音」(a)。また、必ず季語を詠み込むというルールもある。



大意

A 働いても、働いても生活が楽にはならない。私は自分の手をじっと見る。
 B 母がつり下げてくれた青蚊帳を、すがすがしく心地よいものだと思いな

がら寝ている。老いた母には力がなく、つつた蚊帳はたるんでいるのだけれども。

C まるで「お先に」とでも言うように、一本だけひとあし先に紅葉してしまったよ。池のほとりに静かに立っている桜が。

D 赤蜻蛉が飛んでいる。遠くの空に目を向けると、秋晴れの青空の中、筑波山には雲ひとつかかっている。

E はかなく取るに足らない存在である露が、石の上でなにもにも壊されない金剛の一粒となっていることだ。

F 大きな向日葵が夏の輝く空に咲いている。そこに、波が寄せる海がある。G ふと見上げると、たくさん桜の花びらがひとかたまりの群れのように

なって、空を進んでゆく。
 H 人から食べ物をもたらすのに入れ物がないので、仕方なく自分の両手でありがたく受け取る。

◆ 演習問題 ◆

(1) ア
 (2) ウ

【解説】 (1) 俳句の後の文章の最初に、「同じ『秋の蟬』を季語とする句をあげました。『蟬』は夏の季語ですが……」とあるため、夏の季語「蟬」とは別に秋の季語「秋の蟬」があることが読み取れる。選択肢の季語と季節は次のとおり。

俳句	季語	季節
ア 名月や池をめぐりて夜もすがら	名月	秋
イ 菜の花や月は東に日は西に	菜の花	春
ウ 木枯の果はありけり海の音	木枯	冬
エ 涼風の曲りくねつて来たりけり	涼風	夏

同じ秋の季語は、アの「名月」。主な季語については覚えておく。

(2) まず、俳句に続く文について、各段落の内容を確認する。

【第一段落】

夏の蟬（生命を燃焼させているような力強さ）
秋の蟬（命のはかなさ）

Aの句：「はかない生を高々と、しかも精一杯生きることの哀れ」を詠む
「詠まれているのは『秋の蟬』そのもの」

【第二段落】

Bの句：上五・中七 川越えてしまへば別れ
下五 秋の蟬

二つの内容が組み合わされている

別れの場面と別れの象徴「川」×しみじみとした寂しさの「秋の蟬」

「秋の蟬」が絶妙に働いて別れの場面を盛り上げている

【第三段落】

Aの句（季語そのものを詠む）：「一句一章」「二物俳句」
Bの句（季語と何かを組み合わせて詠む）
：「二句一章」「二物俳句」「取り合わせ」

以上を踏まえて「秋風や…」の句を見つめる。

直接関係のないもの

秋風や横様の違ふ皿二つ

↑二句一章

季語

季語「秋風」と直接関係のない「横様の違ふ皿二つ」が詠み込まれている。

大意

秋の蟬：秋、蟬が高々と精一杯の声を上げて鳴いていて、はかない命を生きた姿に愁いが感じられる。

川越えて：川を越えてしまえば、相手との別れが訪れてしまう。秋の蟬のしみじみとした声が、その場面をいっそう寂しく感じさせる。

名月や：旧暦八月十五日のすばらしい名月の夜。池に映る月を見ながら、

夜通し池の周りを歩き回ってしまったよ。

菜の花や：菜の花が咲く野に立っている。月が東から昇り、日は西に沈んでゆく、雄大な眺めである。

木枯の：厳しい木枯らしが海の辺りまで吹いてきたが、海の音に消えてしまった。木枯らしにも果てがあったのだ。

涼風の：こんな路地裏の貧しい我が家には、夏の涼しい風も道を曲がりくねりながらやっと届いてくるよ。

秋風や：しみじみとした秋風が吹いている。放浪中の身の自分の手元には、

絵柄の揃ったものではなく模様の違う皿が二枚ある。

◆実戦問題◆

71ページ

(1) (2) (3)

B E

①秋の光 ②山みな声となりて

解説

(1) 直喩は、「……ようだ」などで、たとえるものを明らかにする表現技法。

BとFの「ごとく」も直喩で使う。Bは「瀑布のごとくかがやく階段」で、八月の真昼に日に照らされた「階段」が「かがやいている」様子を、滝にたとえている。「動くはずのない物体を、音と動きがあるかのように表現」という設問文に一致している。Fは地面近くに咲いた菊に音がするかのよう

冬の日が差すという情景が、「迫るような存在感のある短歌」とは一致しない。

(2) 設問文に「目の前に大きく広がる情景」「動と静の両面をもつ壮大な自然」とあるため、ひぐらしの鳴く声を中心のA、階段を眺めているB、山で「秋の光のおと」を聴いているC、地面に咲く菊について詠んだFは当てはまらない。Dの「水甕の……」、Eの「湧き上がり……」は目の前に大きく広がる情景といえるが、Dは「動と静の両面をもつ」とはいえない。

動
E 湧き上がりあるいは沈みオーロラの
赤光緑光闇に音なし 静 壮大な自然

多彩な色を見せて広がる壮大なオーロラ、「湧き上がりあるいは沈み」という「動」と「闇に音なし」という「静」をあわせもった様子を詠んだEを選ぶ。
 (3) 設問で与えられた文章を確認する。第一段落の最初に「この短歌は、調子や意味の切れ目が、二句目と三句目の間にあり」とあることから、短歌の句切れを確認する。A・Bは意味の切れ目がないため「句切れなし」。Cは第二句が「耳は澄みけり」と言い切りになっているため「二句切れ」。Dは第三句が「夏つばめ」と体言止めでいったん意味が切れていることから、「三句切れ」。Eは第三句、第四句「オーロラの赤光緑光」でいったん意味が切れ、結句で「闇に音なし」と述べているため、「四句切れ」。Fは第三句が「菊の花」と体言止めでいったん意味が切れていることから、「三句切れ」。以上から、Cの短歌について考える。

聴覚 聴覚
旅人の耳は澄みけり山行きて秋の光のおと聴くほどに
視覚 聴覚
言い切りの形↓二句目と三句目の間に意味の切れ目あり

「旅人の耳」を通した「聴覚に関連」させた表現↓「秋の光」という「視覚で捉える言葉に転じ」↓「おと聴く」という「聴覚で捉えたように表現」という流れ。したがって④には視覚で捉えた「秋の光」が当てはまる。
 第二段落では「時間の経過とともに、次第に力強くなってゆく生き物の声」とあるため、まず「生き物」を詠んだ短歌を探す。Aが「ひぐらし」、Dが「夏つばめ」を詠んでいるため、この二首を検討する。

生き物 次第に力強くなる
A ひぐらしの一つが啼けば二つ啼き山みな声となりて明けゆく
取り囲む自然が、まるで量を増して大きくなっていくように感じられる

Aでは、ひぐらしの声が時間の経過とともにだんだん大きくなること、最後には周囲の自然までもが量を増して大きくなっていくかのような様子を「山みな声となりて」と表現している。したがって、④には「山みな声となりて」が当てはまる。
 Dは夏つばめの「こゑこゑ」とあるので、生き物の声が詠まれている点は文章と合致しているが、「時間の経過とともに、次第に力強くなってゆく」という点で合わない。「取り囲む自然が、まるで量を増して大きくなっていくように感じられる様子」とも合わない。

大意

A ひぐらしの声が、一つ鳴いたと思ったらまた一つというように次第に増えて力強くなっていき、ついには山のすべてが声となり、夜は明けていく。
 B 八月の真夏の真昼、町が静寂に包まれる中、町の大きな階段がまるで滝のように光り輝いて存在感を放っている。
 C 旅人の聴覚は何でも捉えられるほど研ぎ澄まされている。山中を歩きながら、秋の光の音までも聞こえてくるほどに。
 D 雨をため込んだ水壚のような空に、夏のつばめの声が響き合う。その声は何ものからも自由でやさしい声であるよ。
 E オーロラの赤い光や緑の光が、湧き上がった沈み込んだりと動く雄大な景色である。闇の中に、全く音はしないけれども。
 F 地面近くに咲いているのに、明るい菊の花の姿。その菊の花には、まるで音がするかのよう、さんさんと冬の雨が降り注いでいる。

◆確認問題◆

74〜75ページ

- 1 ①おどり ②みず ③まいる ④きゆう ⑤がん ⑥じょうず ⑦ちようど
- 2 ①かたわら ②かるがゆえに
- 3 ①イ ②ウ ③ア
- 4 ①ア ②ウ ③ア ④エ ⑤ウ
- 5 ①が(は) ②を・を
- 6 イ
- 7 あなり
- 8 時のほゝ参せん・飢渴にゝるらじ〔順不同〕
- 9 ①や ②なむ ③こそ

解説 ① 漢字の表記があるものは、それを現在はどう読むかを考えるとヒントになる。①助詞以外の「を」は「お」にするので「おどり」と直す。②「づ」は「ず」に直す。③「ゐ」や「ゑ」は、どちらも現代仮名遣いにはない仮名文字で、次のように直す。

ゐ↓い ゑ↓え

④「きふ」は「イ段」の音＋う(ふ)の形なので、「きゅう」と直す。⑤「ぐわ」は「が」となるので、「ぐわん」↓「がん」と直す。⑥「じやうず」は「ア段」の音＋うの形なので、「じやうず」↓「じようず」と直す。さらに、現代語では小さく「つ・ゃ・ゆ・よ」と表記する促音・拗音を、古文では「つ・ゃ・ゆ・よ」と表記するので、「じようず」↓「じよづ」とする。⑦「てう」は「エ段」の音＋うの形なので「ちよう」と直す。

② ①「かたはら」の「は」を「わ」に直す。②「かるがゆゑに」の「ゑ」を

「え」に直す。

③ ①「をかし」には「趣がある」といった意味の他に「おかしい」という意味がある。②「あやし」は、現代語では「気味が悪い」などの意味で使われるが、古文では「不思議だ」「身分が低い」などの意味で使われる。③「うつくし」には「かわいらしい」といった意味の他に「美しい」という意味もある。複数の意味をもつ言葉は、文脈に合わせて訳し分ける。

④ ①「如月」は陰暦の二月。この時期の望月＝満月は、現代では三月末の、だんだん暖かくなっていく頃に当たる。②の「つとめて」(早朝)、⑤の「あまた」(たくさん)は、現代ではあまり使われなくなった古語。③の「のしる」(大声で騒ぐ)と④の「めでたし」(すばらしい・立派である)は、現代とは違った意味で使われる古語である。現代と異なる意味をもつ古語はよく出題されるので、覚えること。

覚えておきたい古語

- 例・ありがたし…めったにない・優れている・難しい
 ・おとなし …思慮分別がある・大人びている
 ・いとほし …かわいそうだ・困る
 ・やさし …つらい・恥ずかしい・上品だ

⑤ ①「よき所」が主語、「ある」が述語なので「が(は)」を補う。②「木の実」も「鳥」も目的語なので「を」を補う。

- ① 下手にもよき所主語が(は)かならずあるものなり。述語
- ② さも知らぬ木の実目的語取り食述語ひ、知らぬ鳥目的語とらへて…述語

⑥ 出てくるのは「聖」と「獵師」と「狸」。ここでは「聖」と「獵師」が対比されているので、前の一文の主語は「聖」、後の一文の主語は「獵師」になる。聖は狸に化かされたが、獵師は化けた狸の正体をあばいたというので

ある。

現代語訳

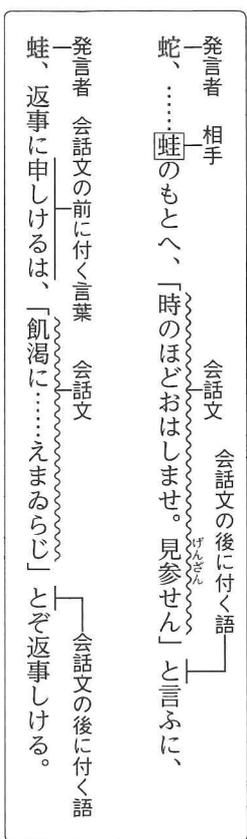
立派な僧だが、無知なので、このように（狸に）化かされたのである。狸師だが、思慮があったので、狸を射殺し、その化けた正体をあばいたのである。

7 「あなり」の後に会話文の引用を示す「とて」がある。

「この野はぬす人あなり」とて、火つけむとす。

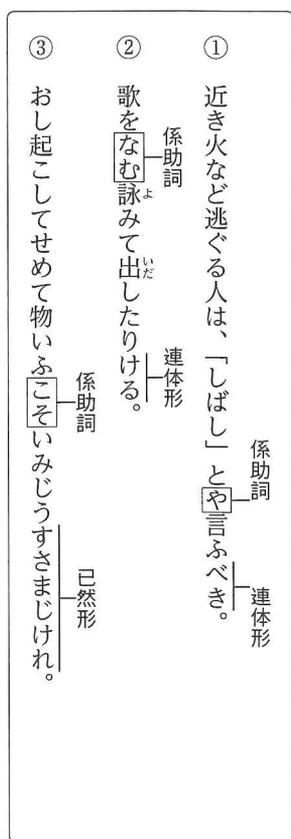
8 まず、登場しているのが「蛇」「亀」「蛙」の三者であることを押さえる。

このうち「亀」は使用者で、実際に会話をしているのは「蛇」と「蛙」。二つ目の会話文は、蛇が蛙のもとへ亀を使用者として送り、言わせている言葉である。「蛙のもとへ」の直後から会話文が始まり、会話文の後に付く「と（言ふ）」の直前が会話文の終わりととなる。二つ目は、「返事に申しけるは」に着目する。「申しけるは」は、会話文の前に付いて引用を示す言葉なので、この直後から会話文が始まる。終わりは、会話文の後に付いて引用を示す「と（ぞ返事しける）」があるので、「……えまゐらじ」までとなる。



9 ①の係助詞は「や」。文末の結びの形が「言ふべき」と連体形になっている。ここでは「……だろうか、いや、……ない」という強い否定（反語）を表している。②の係助詞は「なむ」。文末の結びの形が「出したりける」と連体

形になっている。③の係助詞は「こそ」。文末の結びの形が「すさまじけれ」と已然形になっている。



◆ 確認問題 ◆

77 ページ

- 1 万葉集
 ①工 ②イ ③ア
- 2 方丈記・徒然草〔順不同〕
 工
- 3 (1) たづねみる (2) 得給へ (3) こは人をかく見るなり。
- 4 (1) たづねみる (2) 得給へ (3) こは人をかく見るなり。
- 5 (1) たづねみる (2) 得給へ (3) こは人をかく見るなり。

◆ 解説 ◆

1 「万葉集」は、奈良時代に成立したとされ、現存する最古の歌集である。

2 ①の「枕草子」は清少納言による随筆。②の「源氏物語」は紫式部による長編物語。③の「土佐日記」は紀貫之が土佐（現在の高知県）から京へ戻る旅の様子をつづった日記。

- 3 鎌倉時代に成立した代表的な随筆は、鴨長明による「方丈記」と兼好法師による「徒然草」。平安時代の「枕草子」と並んで三大随筆とされている。
- 4 「おくのほそ道」は、江戸時代に松尾芭蕉が著した俳諧を中心とした紀行文。江戸時代は俳諧が盛んで、松尾芭蕉の他、与謝蕪村や小林一茶などの有名な俳人がいる。ア「伊勢物語」は平安時代の歌物語。イ「平家物語」は平安時代末期の源平合戦を描いた軍記物語で、鎌倉時代に成立している。ウ「古事記」は古代からの神話や伝説、史実をまとめたもので、奈良時代に成立した歴史書。エ「南総里見八犬伝」は江戸時代に人気を博した作品である。「おくのほそ道」など、主要な作品の冒頭部分は覚えておくとうい。

「竹取物語」

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。……

「源氏物語」

いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。……

「平家物語」

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。……
 つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

「おくのほそ道」

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

「方丈記」

行く河のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。……

5

- (1) 歴史的仮名遣いの「ぢ・づ」を現代仮名遣いに直すときは、「じ・ず」とする。ここでは「たづねみる」を「たずねみる」とする。
- (2) 「人を見るには……」に続く会話文は、「たづねみる」とする。
- と答える翁に、質問者が「いかなる事ぞ」（どういうことか）と尋ねたときの翁の答えである。いくつかの内容が述べられ、最後に「心得給へ」（理解なさってください）と語りかける言葉で終わっている。「と言ひし」という会話文の後に付く言葉も確認しておく。

質問者「かの人はいかなる人にか」と問へば、

ある翁「いとよき人なり」と答ふ。

質問者「かれは」と言へば、

ある翁「よき人」と言ふ。

質問者 必ずかれをば悪しきと言はんを、撰びてたづねみるに、

ある翁「よき人」と答ふ。

質問者「いかなる事ぞ」とたづねしに、

ある翁「人を見るには……悪しきと心得給へ」と言ひしとぞ。

- (3) 随筆では、題材や出来事に関する事実と、それに対する筆者の考えや感想が述べられていることが多い。筆者の考えや感想を読み取るときは、文章の初めや終わりの部分に注目する。

ある翁に、「かの人は

……悪しきと心得給へ」と言ひしとぞ。

事実（翁と質問者の会話）

こは人をかく見るなり。

↑筆者の考え

この文章では、翁と質問者のやり取りを筆者が聞いた事実として書き、最後に「こは人をかく見るなり。」と筆者の考えを述べている。人物を評価するときに、少しでもよいところがあれば「よい人」と判断する翁の姿勢に感じし、筆者は「人物を評価するときはこのように寛大な目で見るとべきだ」と考えたのである。

現代語訳

ある老人に、「あの人はどのような人であるか」と尋ねると、「たいへんよい人だ」と答える。「あの人は（どのような人であるか）」と言うと、「よい人」と言う。必ず（誰もが）その人は悪い（人だ）」と言うであろう人を、選んで（あの人はどのような人であるかと）尋ねてみるが、（翁はその人のことも）「よい人」と答える。「どういふことか」と尋ねたところ、「人物を評価するときには、まず十のうち五つ程度でもよいところがある人は、たいへんよい人と見るべきだ。十のうち一つか二つでもよいところがある人はよい人（と見るべき）だ。十のうち全て悪ければ、悪い（人）」と理解なさってください」と言ったということだ。これは人をこのように（寛大な目で）見るということである。

◆ 演習問題 ◆

78～79 ページ

- ① (1) ア (2) たえがたや
(3) 例どの人にも好むことがある
(4) おうおう (5) ア

解説

(1) アの「聞きて」の主語は、続く文章から判断する。「好む由を聞きて」は「好きだということを知って」という意味。入道が餅を好きだと聞いたので、主は家の者に餅つきをさせて、入道をもてなそうとしている。

餅を好む入道ありけり。（入道は）医師なりければ、呼びて、好む由を

「主」の動作

聞きて、主、餅をさせけるが、……

イは「春く声」を聞いて「声を揚げ」た人物なので「入道」が主語に当たる。ウは直前に「入道が」とあるので主語は「入道」。エは主語が省略されているが、直前で、「入道が聞かざる所にて春かせたまへ」と、音が聞こえないところで餅をつかせるように入道が言っていることを踏まえて考え、入道が「あの音を聞く」のは耐えがたいと訴えていることがわかる。

(2) 語頭以外の「はひふへほ」は「わいうえお」に直す。ここでは、「堪へがたや」↓「たへがたや」↓「たえがたや」となる。現代仮名遣いに直す設問では、「全て平仮名で」という指定が付くことが多いので注意する。

(3) 「人毎に」は、傍訳にあるように「どの人にも」という意味。これを踏まえて助詞を入れずに現代語に直すと、「どの人にも好むことある」となる。「好むことある」では日本語として不自然なので、間に助詞を補って「どの人にも好むことある」とする。古文では助詞が省略されていることが多いので、補いながら文章を読むようにする。

(4) 会話文の後に付いて引用を示す「と」に着目する。この文章では、「」が付いている部分の他に、「この入道、おうおうと声を揚げ」にも引用を示す「と」がある。入道の叫び声に当たる「おうおう」を抜き出して答える。
(5) 文章中に登場する「餅を好む入道」「主」「ある僧」が、どのようなことをしたのかを、順を追って見ていく。

「入道」は大の餅好きであり、主が餅をつかさせた音を聞いて、大好きな餅のことを考えて我慢できずに叫び出した。よってアは適切。イは、「入道」はこの場面では餅をつく音を聞いて苦しんでいるのであり、餅を食べすぎて

苦しんでいるのではないので、誤り。ウは、「ある僧」は「粥かむよりも、寝ているほうがはるかによい味だ」と言っている。食べ損ねたのではなく、粥より睡眠を優先しているので不適切。エは、筆者は「どの人にも好むことがある」とささやかなものを好む人にも理解を示しているので、当てはまらない。

好む例
入道が餅を好きだと聞いた主人は、餅つきをさせた。
・入道は叫びながら、畳のへりをつかんでもがき苦しんだ
――好きな餅のことを考えて我慢できなかったから

・筆者の考え〓どの人にも好むことがあるものだ。

僧の例
ある僧は朝の粥を食べずに日が高く昇るまで寝ていた。
――粥よりも寝ているほうがよい味（〓幸福）だから

現代語訳

餅を好む入道がいた。医者であったので、（入道を）呼び寄せて、（入道を餅を）好きだということ聞いて、主人が、餅つきをさせたところ、（餅をつく音を聞いて、この入道は、「おうおう」と声をあげて、叫びながら、しまいは畳のへりをつかんで、もがき苦しんで、「ああ耐えがたい。私に聞こえない所で（餅を）おつきください。あの音を聞くのは耐えがたいのです」と言ったとかいうことだが、これ程のことはめったにないことであるけれども、どの人にも好むことがある。どんなに物を好まない人も、あるいは役に立たないことを好み、あるいは昼寝を好む人がいる。ある僧は、朝の粥を忘れて食わずにいて、日が高く昇るまで起きない。「どうして粥を召しあがらないのか」と（ある）人が言うと、「粥よりも、寝ているほうがはるかによい味だ」と言った。

沙石集…鎌倉時代中期に無住によって編まれた仏教説話集。仏教の教えを説くことを目的とした説話が収められている。

② (1) イ

(2) ①ウ ②ア

(3) こころはやさ、いとおかしかりけり

(4) Aオ Bア

解説

(1) 「憎い」は、現代語では「腹立たしい」「嫌いだ」などの意味で使われるが、古語の「にくし」は、「不快だ」「みっともない」「すばらしくて憎らしいほど」感心だ」などの意味で使われる。ここでは、孝道入道が、双六を楽しんでいるところにやって来て余計な口出しをする越前房に感じていることなので、イの「不快だ」が適切。

(2) この文章では、登場人物が複数の呼び方で示されているため、登場人物の人数、その呼び方を整理して場面を捉えていくことが重要になる。登場人物を整理すると、次のようになる。

登場人物

・孝道入道〓亭主

…家の主人。双六をしている。

・或る人 〓かたき

…孝道入道の双六の相手をしている。

・越前房

〓この僧〓かの僧…双六の判定に口出しをする。

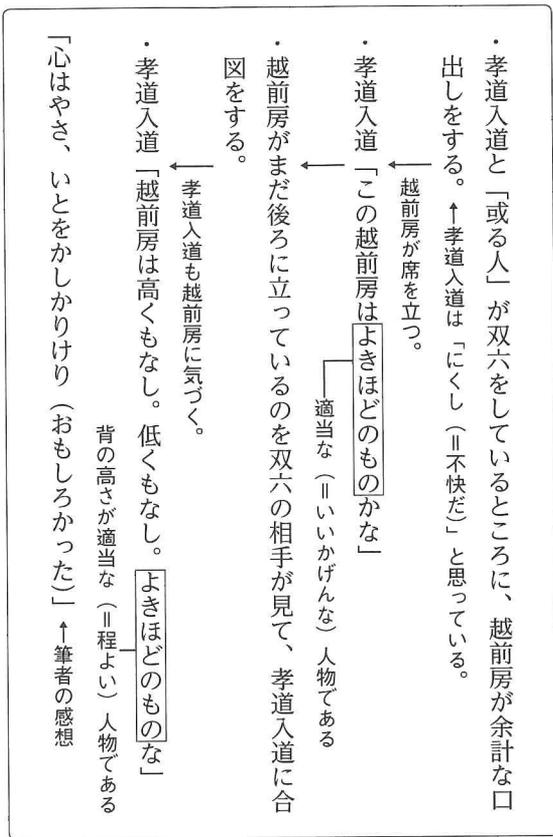
①の「かへりぬ」は「帰った」という意味。直前に「この僧…立ちぬ」とあることから、立って帰った（と思われた）のは「この僧」〓「越前房」である。②は「言い直した」という意味なので、その前の会話文「この越前房はよきほどのものかな」と発言した「亭主」が言い直したものと考えられる。「亭主」は「家の主人」という意味で、「孝道入道」のこと。

(3) 〓線のうち、歴史的仮名遣いかもされないものは、「心はやさ」の「は」と「をかしかり」の「を」。このうち「心はやさ」の「は」は助詞ではなく、「心+早さ」という複合語の一部。複合語の場合、元の語の語頭にある「はひふへほ」は仮名遣いを改めない(例「まひひめ(舞姫)」↓「まいひめ」)。し

たがって、「をかしかり」の「を」のみ「お」に直す。

(4) 文章中で、孝道入道は二度「よきほどのもの」という言葉を口にして、「よきほど」は「いいかげんである」「ちようどよい」という意味だが、この言葉の使い分けが文章のおもしろさとなっている。

孝道入道が、家である人と双六をしているときに、隣に住む越前房という僧がやって来て、二人の双六に口出しをするので、孝道入道は、越前房の口出しを「にくし」(不快だ)と思っている。越前房が立ったので帰ったと思った孝道入道は、越前房のことを「よきほどのもの」と言う。このとき孝道入道が越前房の口出しを好ましく思っていなかったことから、オ「いいかげんな人物」という意味で述べたと考えられる。続く文章では、越前房がまだ孝道入道の後ろに立っているのを見た双六の相手(かたき)がひざをついて合図をしたことで、孝道入道が越前房の存在に気づく。悪口を言っていると知られたくない孝道入道は、背が高くもなく低くもない「よきほどのもの」と素早く言い直す。つまり、アのように背の高さが「程よい人物」というよい意味の言葉に言い直したのである。



現代語訳

孝道入道が、仁和寺の住まいである人と双六をしていたところ、隣に(住んで)いる越前房という僧が来て、勝負の判定をと言って、いろいろ余計な口出しをするのを、(孝道入道は)不快だ不快だと思うけれども、ものも言わずに(双六を)続けていると、この僧(越前房)が余計な口出しをしかけて途中でやめて席を立った。(越前房が)帰ったと思って、亭主(孝道入道)は、「この越前房は適当な(いいかげんな)人物であるよ」と言ったところ、その僧(越前房)はまだ帰らずに、亭主(孝道入道)の後ろに立っていた。(双六の)相手(ある人)は、再び(孝道入道に)ものを言わすまいとして、亭主(孝道入道)のひざをついたところ、(孝道入道が)後ろを振り返って見ると、この僧(越前房)はまだ(そこに)いた。この時すぐに、「越前房は(背の高さが)高くもない。低くもない。適当な(程よい)人物であるな」と言い直したのは、気持ちの(切り返しの)早さが、たいへんおもしろかったことだ。

◆実戦問題◆

80〜81ページ

古今著聞集：鎌倉時代中期の説話集。二十卷三十編から成り、日本の説話を題材別に分類している。庶民的で活気にあふれた説話も多く収録されている。

①

(1) 母

(2) イ

(3) 拾いいたる

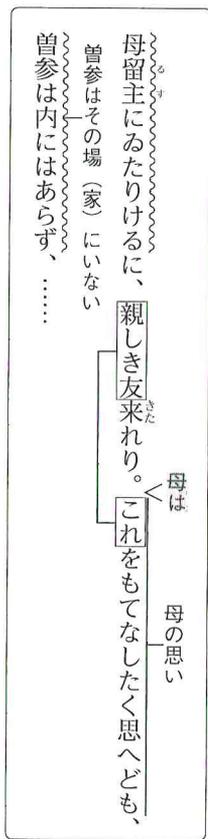
(4) エ

(5) ア

解説

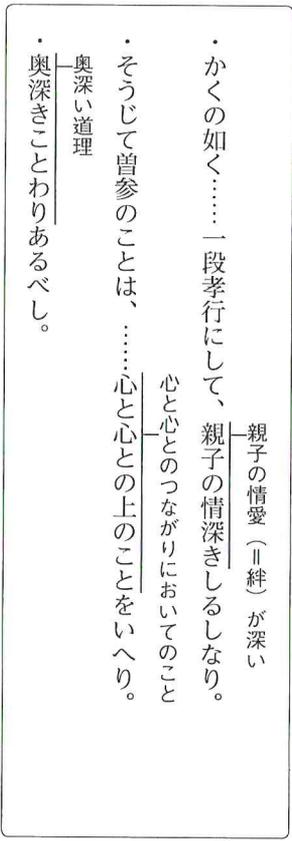
(1) — 線①より前の内容を捉える。まず、曾参は山の中へ薪を取りに行っている。母が留守番をしているところに、曾参の友人がやって来たのである。

線①中の「これ」が曾参の「親しき友」を指していることを踏まえて、「親しき友」をもてなしたいと思っっているのは実際に会っている「母」であることを捉える。



- (2) 線②までの文脈を押さえる。曾参が留守の間に曾参の親しい友人がやって来て、母は友人をもてなしたいと思っっている。「かなふ」は「願いがかなう」「思いどおりになる」という意味なので、「かなはず」は、友人をもてなしたいという母の願いがかなわない、ということになる。「もとより」は「もともと」「初めから」という意味なので、「かなはず」とあわせると「もともと家が貧しいので、もてなす(という願いをかなえる)ことができない」という意味になる。
- (3) 「ゐ」は、現代仮名遣いでは「い」と直す。
- (4) 「にはかに」は「突然」「急に」という意味。現代語の「にわか」にほぼ同じ意味で使われている。
- (5) 「かくの如く……」より後の三文は、曾参の逸話について作者が自分の考えを述べていることに着目する。

まず、曾参の母が指をかんだところ、遠くにいるはずの曾参が胸騒ぎを覚えたことに対して、作者は「一段孝行にして、親子の情深きしるしなり」ととりわけ孝行であって、親子の情愛(＝絆)が深い証拠である)と考えている。また、一般的に曾参という人物について言われることとして、「心と心との上のことをいへり」(心と心とのつながりにおいてのことをいう)とも述べられている。さらに、曾参のこの逸話について、「奥深きことわりあるべし」(奥深い道理があるに違いない)としている。



「心と心とのつながり」「奥深い道理」などの言葉に着目して選択肢を見ると、アが当てはまる。イは、「子が常に親のそばにいたことが一番の親孝行」とは述べられていない。ウは、ここでは曾参と母とのお互いの強い愛情が描かれており、「親の子供に対する強い愛情」だけを題材としているのではない。エは、「親と子の会話は少なくとも構わない」という内容は文章中から結論として読み取れないので、不適切。

現代語訳

曾参がある時山の中へ、薪を取りに行った。(曾参の)母が留守番をしていたところ、(曾参の)親しい友人がやって来た。(曾参の母は)これ(＝曾参の友人)をもてなしたいと思うけれども、曾参は家にいなくて、もともと家が貧しいので、もてなすことができず、(母は)曾参が(家に)帰ってほしいと思っ、自ら指をかんだ。曾参は山で薪を拾っていたが、突然胸騒ぎがしたので、急いで家に帰ったところ、母はありのままをくわしく語ったのだ。このように(母が)指をかんだのが、(曾参が)遠くにいて反応したのは、とりわけ孝行であって、親子の情愛(＝絆)が深い証拠である。一般に曾参のことは、他の人の孝行と違って心と心とのつながりにおいてのことをいっっている。奥深い道理があるに違いない。

御伽草子…室町時代から江戸時代初期にかけて成立したとされる短編物語集。空想的なものから教訓的なものまで、多様な説話が収録されている。

2

(1) 工

(2) 水の上に身

(3) ア

解説

(1) 「鳥、鵜にいへるは、」以降は、鳥が鵜に向かって言った会話文である。会話の終わりは「……といふ。」(9行目)。続いて「鵜答へていふ、」とあるので、ここからは鵜の会話文である。これを踏まえて考える。アの主語は「我等」(＝私たち)。話し手の「鳥」が主語である。イは、直前に「羽を息めんとして」とあることに着目する。「終日飛びあるきて」、羽を休めて木にとまる動作するのは「鳥」だとわかる。「我等は」から始まる、鳥が自分の苦勞を嘆く言葉の続きであることも、答えを導く要素になる。ウの「学びて」は「ならつて」という意味。「御身を学びて」で「あなたにならつて」という意味になる。「鳥」がいつも魚をとっている「鵜」にならつて魚をとろうとしているので、「鳥」の動作。エは、水に「浮かび」何の苦勞もなく食べ物を得ている(と、鳥に思われている)のは「鵜」。したがって、エが適切。

(2) 「鳥が羨ましいと思つている」ことなので、「鳥」の発言に注目して探す。「御身は果報なるものかな」(＝あなたは幸せ者であることだなあ)に続く、「水の上に……食し給ふものかな。」(1～3行目)という一文が、鳥が羨ましいと思つている具体的な内容に当たる。この一文は主語が省略されているが、鵜が魚をとる水鳥であること、直後に「我等は……」と鵜と自分の餌のとり方を比べている文があることなどから、「鵜」が主語に当たることがわかる。

(3) 「人の世の有様なぞらへて知るべし。」は、「人の世の中の様子も(この話に照らし合わせて理解すべきである)」という意味。つまり、この鳥と鵜の逸話も人間の世の中と同じということ。よって、この文章の趣旨が書かれた選択肢を選ばばよい。

鳥が、鵜は樂をしていると思つて羨ましがすが、鵜は、自分もたいへんな苦勞をしているのだと鳥に反論している。

・水の上に……安々と取りて食し給ふものかな。↑鳥から見た鵜の姿
 → 自分の苦勞を嘆き、羨んでいる
 ・我等は終日……食つねに不足して苦し。↑鳥自身の苦勞話
 ・水の中にて足を働かす……取り得る事かたし。↑鵜の陰での苦勞

鳥は自分の苦勞ばかりに目がいつて、他人が苦勞していることに気づいていなかったの、アが正解。

現代語訳

鳥が、鵜に言うことには、「なんとまあ鵜殿、あなたは幸せ者だなあ。水の上に体を浮かべて休みながら、何の苦勞もなく、腹の下にいる魚を簡単に取つて食べていらつしやいますね。私たちは一日中飛び回つても食べ物に取つことは少なく、偶然干している魚や木の実などを見つけても、全て持ち主がいて監視が厳しいので、ひやひやして、簡単に取ることができません。はめつたにない。このような理由で食べ物がいづも不足して苦しい。疲れて(飛ぶのをやめて)羽を休めようとして木にとまると、やはり足(が疲れるという)こと)の苦勞がある。あなたにならつて水に入って魚をとろうとすると、すぐさま水を飲んでしまふ。ああ羨ましい鵜殿であることよ。飽き飽きするほど満ち足りていらつしやる食べ物も少しこちらへも与えてくださいよ。けちな考えだなあ」と言う。鵜が答えて言うことには、「鳥殿鳥殿、そのように思つてはいけません。そちらからご覧になると、水に浮かんで何の苦勞もなく食べ物を得ておりますようにお思いでしょうが、水の中で足を(かいて)働かせることに少しの絶え間もない。その苦勞は通りいっぺんのことではない。その上魚も命があるものであるの、なかなか氣樂に取れることはめつたにない」と言う。

◆ 確認問題 ◆

83 ページ

- ① ア ② ウ ③ イ
 ② ① 3 1 2 ② 1 3 2 4
 ③ 4 1 2 3 ④ 2 1 5 3 4
 ③ ① 彼悪んぞ之を知らん。
 ② 伯樂は常には有らず。
 ④ ウ
 ⑤ 五言絶句

解説

① 漢文は漢字のみで書かれている。これを白文というので、①はア。
 漢文を訓読し、漢字仮名交じりの文の形にしたものを書き下し文というので、②はウが適切。

白文に訓点(送り仮名・返り点・句読点などの符号)を付けて、日本語の文章として読めるようにした文のことを訓読文という。したがって③はイ。
 訓読には歴史的仮名遣いと古典の文法を用いる。

- ② ① 一・二点は、二字以上隔てて上に返って読むので、3マス目から1マス目に返る。② レ点の付いた字はすぐ下の一字から返って読むので、3マス目を先に読んでから2マス目を読む。③ 三字以上隔たつていても、一・二点を見逃さずに読むこと。この場合は、2マス目から読み始め、4マス目を読んだから1マス目に返る。④ レ点と一・二点が混在している場合は、まずレ点に着目する。ここでは、1・2マス目と、3・5マス目に分けて考える。それぞれレ点、一・二点のルールにのっとった順で読む。

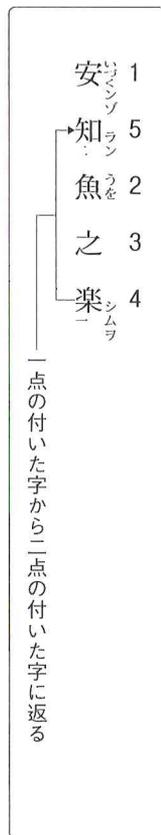
- ③ ① は、レ点の付いた「知」は、すぐ下の「之」の後で読む。

② は、「不」は二点が付くので、初めは読み飛ばし、一点の付いた「有」の後で読む。「不」は日本語に直すと助動詞に当たるので、平仮名で書く。

現代語訳

- ① 彼はどうしてこのことを知っているだろうか、いや、知らない。
 ② 伯樂(名馬を見分ける能力のある人)はいつもいるわけではない。

- ④ 書き下し文と選択肢の訓読文を比べて考える。書き下し文では、「安」の後に「魚」↓「之」↓「樂」と続いているので、「知」は後から読むことがわかる。「魚之樂」から「知」へは二字以上返って読むので、一・二点を使う。



この文では「之」は「の」という助詞になるので、書き下し文では平仮名になっている。「之」は漢字で書き下す場合(例:③①)「これ」と平仮名で書き下す場合(例:④)「の」があるので、注意する。

現代語訳

どうして魚が楽しんでいるのがわかるだろうか。いや、わからない。

- ⑤ 一句(一行)が五字から成るので、五言(詩)。また、全体が四句(四行)から成るので絶句。したがって「五言絶句」。

書き下し文

秋風引

何れの処より秋風至る／蕭蕭として雁群を送る

朝来庭樹に入り／孤客最も先に聞く

現代語訳

秋風の歌(「引」とは、漢詩の形式の一つ)

どこからこの秋風はやって来たのだろうか

もの寂しく雁の群れを送っている

朝から庭の樹木に(秋風が)吹き入ってきて

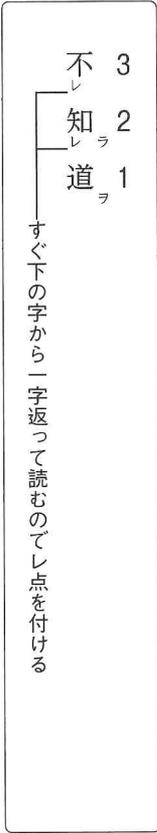
孤独な旅人(である私)は最も早くその音を聞いたのだ

◆ 確認問題 ◆

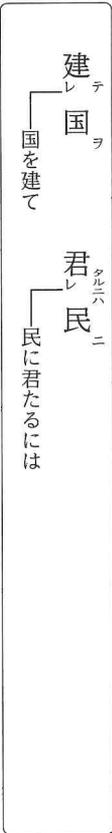
84 ~ 85 ページ

- ① 不_レ知_レ道
- ② 国を建て民に君たるには
- ③ ①方_レ徑 ②人_レ蹤滅

解説 ① 線①の書き下し文を見ると「道を知らず」となっている。漢字を見ると、まず「道」を読み、直後にすぐ上にある「知」を読んでいる。一字返って読むので、「知」にレ点を付ける。「ず」は日本語の助動詞（打ち消し）で、「不」に当たる。つまり、「知」の後に一字返って「不」を読んでいることになるので、「不」にもレ点を付ける。

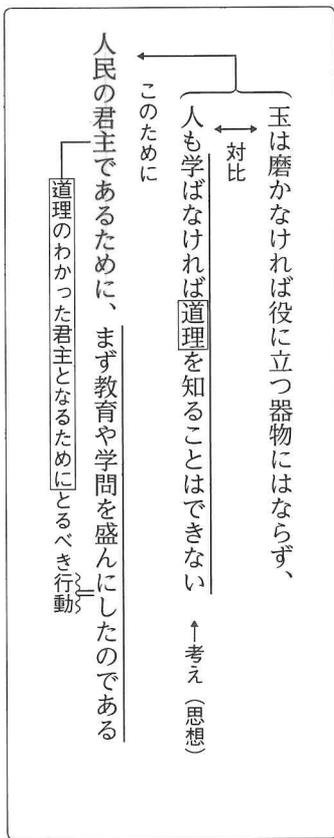


② 書き下し文に直すときは、送り仮名と返り点を順序よく追っていく。線②では、まず「建」にレ点が付いているので、すぐ下の「国」を先に読んでから一字返って「建」を読む。すると前半は「国を建て」となる。次に「君」にもレ点が付いているので、すぐ下の「民」を先に読んでから一字返って「君」を読む。よって後半は「民に君たるには」となる。合わせて「国を建て民に君たるには」となる。



送り仮名も間違えないように、正しく書く。

- ③ この文章は、前半で考え（思想）を示していて、「是の故に」以降の後半で昔の王の行動を手本として、君主となる者がとるべき行動を示している。現代語訳を見て、「玉は磨かなければ役に立たない」↓「人も学ばなければ道理を知ることとはできない。」だから、↓「昔の（賢明な）王は、（道理のわかった君主となるために）まず教育や学問を盛んにした」という、文章の流れを正しく捉えることが重要である。



設問文に「現代語で書きなさい」とあるので、書き下し文の中にある古語や歴史的仮名遣いは用いない。

- ② この漢詩は、第一句と第二句が対句になっている。第一句の「千山」は「多くの山々」、第二句の「万徑」は「多くの小道」という意味で、対になった表現である。また、第一句の「鳥飛絶」は「鳥が飛ぶ姿もなくなり」という意味で、第二句の「人蹤滅」は「人の足跡も消えてしまった」という意味なので、ここも対応した表現となっている。対句はそれぞれの句の構成や語順も同じであることが多い。

千山鳥飛絶
 ← それぞれ対応している →
 万径人踪滅

現代語訳

雪景色の川

多くの山々は（雪に覆われて）鳥が飛ぶ姿もなくなり
 多くの小道は（雪に覆われて）人の足跡も消えてしまった
 たった一つぽつんと浮かぶ舟に蓑と笠を着けた老人が乗り
 一人きり（もの寂しく）釣りをしている、雪の降る寒々とした川で

③ 一句が七字なので七言（詩）。全体が四句から成るので絶句。よって七言絶句。

七言絶句では、第一句末と偶数句末で押韻する。第二句の末尾が空欄となっているので、その他の押韻する部分 第二句末と第四句末の漢字の音を確認する。第一句末の漢字は「塵」（ジン）、第四句末の漢字は「人」（ジン・ニン）。「ジン」と選択肢の漢字の音を照らし合わせると、最も近い音の漢字は「新」。

渭城朝雨浥輕塵	客舍青青柳色新	西出陽關無故人
ウエシキウチウアメノケイジヤウジン	キヤクシャクキヤウキョウシキシン	サイシュツヤウカンムココジン
ウエシキウチウアメノケイジヤウジン	キヤクシャクキヤウキョウシキシン	サイシュツヤウカンムココジン
ウエシキウチウアメノケイジヤウジン	キヤクシャクキヤウキョウシキシン	サイシュツヤウカンムココジン

押韻

書き下し文

元二の安西へ使ひするを送る

渭城の朝雨輕塵を浥し／客舎青青柳色新たなり

君に勧め更に尽くせ一杯の酒／西のかた陽関を出づれば故人無からん

現代語訳

元二が安西へ使者として行くのを送る

渭城の町では、朝の雨が軽く舞い上がりそうな土ほこりを湿らせている
 宿の周りは青々とした柳の色が新鮮ですがすがしい
 君に勧めよう もう一杯酒を飲んでくれ
 西方へと陽関を出立したならば、古くからの親友はいなくなるだろうから

◆ 演習問題 ◆

- (1) 五言絶句
- (2) 牀前看月光
- (3) ウ
- (4) ② 低頭
- (5) ③ 故郷

解説

(1) この漢詩は、一句（二行）が五字から成るので五言詩、全体が四句（四行）から成るので絶句である。つまり、五言絶句である。

牀前看月光	疑是地上月	举头望山月	低頭思故郷
ベツゼンケンゲツカウ	ギジシチノウツキ	キョウツウボウサンツキ	テイツウシコキョウ
ベツゼンケンゲツカウ	ギジシチノウツキ	キョウツウボウサンツキ	テイツウシコキョウ
ベツゼンケンゲツカウ	ギジシチノウツキ	キョウツウボウサンツキ	テイツウシコキョウ

一句が五字
 四句から成る ↓ 五言絶句

(2) 線①の書き下し文は、「牀前月光を看る」となっている。「牀前」の直後に「月光」を読み、その後「看」を読んでいる。二字以上隔てて返るときは一・二点を使うので、「月光」の「光」に一点を付け、その後「看」に二点を付ける。

1 2 5 3 4
 牀 前 看 月 光
「月光」を隔てて返るので二点

先に読む字に一点を付ける

(3) 五言詩（一句が五字の漢詩）では、偶数句末の字が押韻するので、第二句末の空欄には、第四句末の「郷」（キョウ）と「光」（クワウ）と同じ韻の字が当てはまる。ア星（セイせい）、イ川（センせん）、ウ霜（ソウそう）、エ雨（ウレ）なので、ウが適切。この漢詩は第二句末と第四句末の他に第一句末の「光」（クワウ）も押韻している。空欄に漢字を入れると第三句は「疑（ウタガハ）ふらくは是（コレ）れ地上の霜かと」となり、月光が地上を白く照らすので、霜が降りたように感じるという描写になる。

(4) 第三句と第四句が対句になっている。「頭」という語が両方の句に共通しているので、書き下し文も参考にすると、「頭を挙げて」と「頭を低（ひ）れて」という動作が対になっていることがわかる。したがって、「挙頭」と対になっている言葉は「低頭」。また、第三句の「望」と第四句の「思」という動作に着目すると、「山月」と「故郷」が対になっていることがわかる。

挙頭望山月
 低頭思故郷

それぞれ対になっている

(5) この漢詩では、第一句と第二句で寝台から眺めた月光の美しさを、「地上に降りた霜なのではないか」と驚嘆して見つめている。第三句で山の端にある月を見上げた作者は、第四句では下を向いて故郷のことを思っている。第三句と第四句で対句を用いることによって、故郷をしみじみと思う心情の変化が強調され、作者の望郷の思いが印象深く伝わってくる詩である。したがって、アが適切。イは、自然の雄大さを感じてはいるが、「おそれる気持ち」

は描かれていない。ウは、故郷を思っとうなだれているので、「美しい月を見て、胸がいつぱいで幸せな気持ち」とはいえない。エは、周囲が山野かどうか読み取れないし、新たな故郷にしたいと望んでもいない。

現代語訳

静かな夜の思い

寝台の前には月の光が差し込んでいるのが見える

これは地上に降りた霜なのではないかと（目を）疑う

頭を上げて山の端にある月を眺め

頭を垂れて（はるか）故郷のことを思う

◆実戦問題◆

(1) 問 詹 何 曰
 (2) ウ
 (3) イ
 (4) エ
 (5) ア

87 ページ

解説 (1) 「詹何に問ひて曰はく」から漢字を読む順番を見ると、「詹何」を読んだから「問」を読んでいる。二字以上隔てて返るときは一・二点をを用いるので、先に読む「何」に一点を付け、その後読む「問」に二点を付ける。

問 詹 何 曰
二字隔てて返るので二点
先に読む字に一点を付ける

(2) 「奈何」は古文でも漢文でもよく使われる言い回しで、「ここでは、「どうすればよいか」という疑問の意味を表す。楚の荘王は、国を治める方法を問うたのである。

(3) 直前の詹何の言葉を押さえる。詹何は楚王の問いに対して「君主の身が治まって行いが立派であるのに国が乱れている」という話を聞いたことがない

「君主の身が乱れているのに国が治まっているという話を聞いたことがない」と答えている。つまり、国が治まるかどうかは君主の身の持ち方次第であると言いたいのである。空欄を含む一文にある「本」は、「根本」「本質」という意味。国を治めることの根本は（君主の）「身」にあると言っている。したがって、イの「身」が当てはまる。

(4) 「末」は「末節のこと」という意味で、直前の文の「本」（＝根本）と対照的な言葉である。「末」のことには「お答えしかねます」とある。楚王は詹何に「国を治めるにはどうすればよいか。」と国を治める方法について尋ねている。よって、詹何が楚王に答えなかったことは、エの「国を守り治めていくための手だて（＝方法）」。

楚王「国を治むること奈何。」 ↑ 国を治める方法（＝手だて）

国を治める根本

詹何「本は身に在り。敢へて对ふるに末を以てせず。」

↓ 答えることはできない

(5) (4)でみたように、詹何は「国を守り治めていくための手だて」について答えなかったが、「本は身に在り」と国を治めることの「根本（＝本質）」については伝えている。よって、アが適切。イは「一つも教えようとしなかった」が誤り。ウは「王自らが国民の模範となつて行動することを信条としていた」とは書かれていない。エは「わからないふりをして」「自分で考えるように論された」が誤り。

現代語訳

楚の荘王が、詹何に尋ねて言うことには、「国を治めるにはどうすればよいか。」と。（詹何が）答えて言うことには、「何（＝私）は身の治め方はよく知っているが、国の治め方はよく知りません。」と。楚王が言うことには、「私は、国を打ち立てることができた。どうか、これ（＝国）を守る方法を教えてください。」と。詹何が答えて言うことには、「私は、君主の身が治

まっていが立派であるのに国が乱れているという話を聞いたことがありません。（また）君主の身が乱れているのに国が治まっているという話を聞いたことがありません。よって根本は（君主の）身（が治まっていが立派であるか）にあります。そこで末節のこと（＝国を守り治めていくための手だて）はお答えしかねます。」と。楚王が言うことには、「なるほどともだ。」と。

◆ 確認問題 ◆

88～89ページ

- 1 ①エ ②ア ③イ ④ウ
 2 ①部首Ⅱイ 意味Ⅱカ ②部首Ⅱオ 意味Ⅱク
 ③部首Ⅱア 意味Ⅱコ ④部首Ⅱウ 意味Ⅱキ
 ⑤部首Ⅱエ 意味Ⅱケ
 3 ①9 ②4 ③9 ④7 ⑤7 ⑥8
 4 6(画)
 5 ①ア ②イ
 6 イ
 7 イ

解説

1 ①「弾」は意味を表す「弓」と音を表す「单」からできている。④「明」は「日」と「月」が合わさって明るいという意味を表している。

2 ①「そうしよう」の意味は「走る」という字からできていることから考える。②「窓」の部首はうかんむりと間違えやすい。

3 ①の「么」、「己」の部分はそれぞれ三画。②の「亠」の部分は一画。③の「乚」の部分は三画。④の「丨」の部分は二画。⑤の「尸」の部分は二画。

⑥の「ㄣ」の部分は三画。

4 「ㄣ」の部分は一画で書く。

5 ①「出」は真ん中の縦画を先に書く。②「卵」は右半分の筆順に注意。縦画は最後に書く。

6 A「拓」、B「雲」、C「樹」、D「草」、E「者」。Bのあめかんむりの「𠂔」とCの「木」の三・四画目に省略がある。

7 A「笑」はたけかんむり。B「閉」はもんがまえ。C「績」はいとへん。D「詞」はごんべん。点画を省略しない形で画数を数える。

◆ 確認問題 ◆

90～91ページ

- 1 ①イ ②ア ③ア ④イ ⑤ア ⑥ア ⑦ア ⑧イ ⑨イ ⑩ア
 2 ①預ける ②率いる ③借りる ④耕す ⑤授かる ⑥自ら
 ⑦確かめる
 3 ①(温)かい ②(誤)り
 4 ①イ ②ア ③ア ④イ ⑤イ ⑥ア
 5 ①やおや ②めがね ③はたち ④しらが ⑤たび ⑥あずき
 ⑦ゆくえ ⑧さみだれ
 6 しぐれ

解説

1 ①②③は活用語尾から送る。⑦「偽り」は名詞だが、動詞と同様に送る。④⑩は「らか」「やか」で終わる形容動詞。⑤は「しい」で終わる形容詞。

⑥⑧の活用語尾は「す」、⑨は「える」だが、⑥「冷やす」は「冷える」、⑧「費やす」は「費える」、⑨「捕らえる」は「捕る」を含むため、もとの語の送り仮名にならって送る。

2 ①「預ける」は下一段活用動詞。活用語尾は「ける」。②「率いる」、③「借りる」は上一段活用動詞で、活用語尾は②「いる」、③「りる」。⑤「授かる」の活用語尾は「る」だが、「授ける」を含むため、「かる」と送る。⑥「自ら」は副詞で、最後の一字を送る。⑦「確かめる」の活用語尾は「める」だが、形容動詞「確かだ」と同様に「か」から送る。

3 ①「温かい」は形容動詞「温かだ」と同様に「か」から送る。②「誤り」は、動詞「誤る」が活用語尾「る」を送ると同様に送る。

4 ①アは「良縁」の「エン」。②イは「貪欲」の「ドン」。③イは「遺産」の「イ」。④アは「減少」の「ゲン」。⑤アは「逐次」の「チク」。⑥イは「哀惜」の「セキ」。⑤ ⑧熟字訓以外の読みに、「さつきあめ」がある。

◆ 確認問題 ◆

92 ～ 93 ページ

- 1 ①イ ②エ
 2 ①ケ・シ ②ア・オ ③イ・カ ④ウ・サ [各順不同]
 3 ①ア ②エ ③イ ④ ①有名無実 ②用意周到 ⑤エ
 6 ①一・千(三) ②右・左 ③前・後 ④体・命
 7 エ

解説 ① アは「故郷に帰ること」という意味。イは「地面が震える」という意味。ウは「進むことと退くこと」で反対の意味の漢字の組み合わせ。エは「道も「路」も「みち」の意味。

- 2 ①「送迎」は反対の意味の漢字の組み合わせ。ケは「難しい↑易しい」、シは「新しい↓古い」となる。②は「無」という打ち消しの接頭語が付いたもの。ア「不便」、オ「非凡」も同様。③は上の字が下の字を修飾するもの。イは「英国の言語」、カは「激しい流れ」。④は下の字が上の字の目的を示すもの。ウは「店を開けること」、サは「顔を洗うこと」。エは疊語。キは似た意味の漢字の組み合わせ。クは「国際連合」の略。コは「市が営む」。

3 アは「美術+館」、イは「無+条件」、ウは「松+竹+梅」、エは「大+自然」に分けられる。イは上の一字が打ち消しの接頭語。

4 ①反対の意味の熟語は「有名」と「無実」。②「用意が周到である」という意味。残りの「完全」と「無欠」は似た意味の熟語。

5 「潜水」は「水に潜ること」。エが「職に就くこと」という意味で正解。アは「欠=損」、イは「国が立てる」、ウは「巧みだ=拙い」。

6 ①×「絶対」 ○「絶体」

7 ア「清廉潔白」は部屋などの清潔さを表さない。イ「我田引水」は自分で都合のよいように計らうこと。ウは宇宙に存在する全ての事物。

◆ 確認問題 ◆

94 ～ 95 ページ

- 1 ①A則 B測 C側 ②A解 B壊 C介 ③A脳 B悩 C濃
 ④A敵 B適 C摘
 2 ①エ ②イ ③ア ④エ
 3 ①A温 B暖 ②A遭 B合 C会 ③A著 B現 C表
 ④A收拾 B収集 ②A普及 B不朽 ③A講演 B後援
 ④A換気 B喚起 ⑤A干涉 B鑑賞 C觀賞 D感傷
 5 ①ウ ②イ ③エ

解説 ① A「規則」の「則」は「きまり、法則」という意味。② A「解雇」の「解」は「解き放つ」という意味。④ B「適切」の「適」は「ちょうどよい」という意味。C「指摘」の「摘」は「つまみ上げる」という意味。

2 ①「際限」、ア「細心」、イ「無病息災」、ウ「採算」、エ「交際」。

②「投票」、ア「単刀直入」、イ「意気投合」、ウ「検討」、エ「登録」。

③「有益」、ア「実益」、イ「液晶」、ウ「不易」、エ「軼伝」。

④「階層」、ア「奔走」、イ「創意工夫」、ウ「輸送」、エ「深層心理」。

3 ①「温」はものの温度や気持ち、「暖」は気温のあたたかさ。「温かい料理」⇄「冷たい料理」、「暖かい部屋」⇄「寒い部屋」。② A「遭う」：よくない事態に見舞われること。③ A「著す」：書物を書いて発表すること。B「現す」：形のあるものとして出現させること。C「表す」：態度や言葉などで表現すること。

4 ① A「收拾」：混乱をおさめること。② B「不朽」：後世まで長く残ること。④ A「換気」：空気を入れ換えること。B「喚起」：呼び起こすこと。

5 ①イ「簡要」は、手短で要領よくまとまっていること。②エ「口承」は、口伝で伝えること。③イ「異才」、ウ「偉才」は、すぐれた才能のこと。エ「異彩」は、普通と違って目立っている様子。

◆ 確認問題 ◆

96～97ページ

- | | | | |
|---|---------------------------------|---|-----------------|
| 1 | ①補 ②価 ③善 ④序 | 2 | ①用意 ②理由 ③原料 ④儉約 |
| 3 | ①容 ②好 ③濃 ④拡 | | |
| 4 | ①収入 ②増加 ③解散 ④整然 ⑤安全 ⑥守備 ⑦否定 ⑧理想 | | |
| 5 | 過失 | 6 | 単純(簡単) |
| 7 | ①積極 ②消極 | | |

解説 ①「追加」も「補足」も「付け足すこと」という意味。④は一字が共通する類義語。

②「準備」の類義語として、「用意」の他に「支度」などもある。③「原因」の類義語として、「理由」の他に「わけ」や「要因」などもある。「原因」の対義語は「結果」。④「節約」の類義語として、「儉約」の他に、「節減」などもある。対義語は「浪費」。

③「好転」は、よくなること。③「淡泊」の「淡」と反対の意味の漢字が当てはまる。④「縮」は「ちぢめる」、「拡」は「ひろげる」という意味。

④「雑然」は「入り乱れてまとまりのない様子」、「整然」は「整っている様子」。「雑」と「整」が対義になっている。⑦「肯」が「同意する、よしとする」、「否」が「認めない」の意味で、対義になっている。

⑤「偶然」など、「よくない結果をまねく」という意味を含まないものは誤り。「単純」の他に「簡単」も対義語と言える。

⑦①だけで考えると「試験的に認める」「好意的に認める」など、複数の解答が考えられるので、②から考える。「慎重で」と「②的」が並んでいることから、②は進んで採用しようとする意味を表す「消極的」がふさわしい。①には「積極」の対義語「積極」が当てはまる。

◆ 確認問題 ◆

98～99ページ

- | | | | | | |
|---|----------------------------------|---|---|---|---|
| 1 | ①足 ②口 ③鼻 ④首 ⑤手 ⑥耳 ⑦舌 ⑧腰(頭) ⑨肩 ⑩胸 | | | | |
| 2 | ①力 ②イ ③エ ④ア ⑤ウ ⑥オ | | | | |
| 3 | エ | 4 | エ | 5 | 油 |
| 6 | ア | 7 | ア | | |

解説 ①「行く」という動作に関連する「足」が、②は「言う」に関連する「口」が、⑥は「聞く」に関連する「耳」が当てはまる。

②「の根」は「根拠」の意味。③「我を忘れる」は自分が誰であるかも意識しなくなるほど夢中になること。④の「腰」は物事の途中の肝腎なところという意味。⑤「後の祭り」は、祭りの後の山車のように時機を逸して役に立たないこと。⑥「水の泡」は、水泡がすぐに消えてしまうように無駄になること。

③「アは「相手を立てて功を譲る」という意味。イは「無理を通す」という意味。ウは、その人が得意なことを別の人がうまくやってくれること。

④「アは「怖い目にあってひやりとする」という意味。イは「相手の能力に対して負けを認める」という意味。ウ「二の足を踏む」の「二の足」は「二歩目」という意味。二歩目は前に進まず足踏みをすることから、「ためらう」という意味。

⑤ 火に油を注ぐとますますよく燃えることからできた慣用句。

⑥ イは②⑥の「水の泡」と同じ意味。ウは、一步も引けない切羽詰まった状況で全力を尽くすこと。エは「こぼれた水がもとの器に戻らないように、一度してしまったことは取り返しがつかない」という意味。

⑦ イは、何かと気にさわってじゃまになるもの。ウは、勢いが激しくとめられそうにないこと。エは、今にも消えたり滅びたりしそうな様子。

◆ 確認問題 ◆

100～101 ページ

- 1 ①エ ②ア ③オ ④イ ⑤ウ
 2 エ
 3 ア
 4 エ
 5 ①エ ②ウ ③ア ④イ
 6 エ

解説

1 ①は「仏教を開いた釈迦に仏法を説く様子」というように、ことわざの具体的な様子から考えられる意味を選ぶ。

2 「虻蜂取らず」は、虻も蜂も両方捕らえようとしてどちらにも逃げられることからできたことわざ。

3 アは、(本物ではないから)役に立たないこと。イは、すらすらと話す様子。ウは、上等なものは落ちぶれてもその品格を失わないこと。エは、性格が正反対で調和しないこと。

4 「井の中の蛙」は、狭い知識にとらわれて広い世界の存在を知らないこと。
 5 ①は、「青は藍より出でて藍より青し」ともいう。藍の草で染めた青色はもとの藍よりも青いことからできた言葉。②の「温故知新」は「温古知新」と書かないように注意する。③は、中国古代の杞の国の人が、天が落ちてきたらどうしようかと心配したという故事からできた言葉。④は、鴨と蛤が争っている間に、両方とも漁師につかまったという故事からできた言葉。

6 ア「五十歩百歩」は、たいした違いはないこと。イ「以心伝心」は、何も言わなくても心が通じ合うこと。ウ「背水の陣」は、一歩も引けない切羽詰まった状況で全力を尽くすこと。

◆ 確認問題 ◆

102～103 ページ

- 1 段落Ⅱ 文Ⅴ 2 イ
 3 ①昨日の／夕食は／カレーライスだった。
 ②修学旅行で／農家の／生活を／体験する。
 ③雨が／降って／いたので／バスで／出かけた。
 ④私は／漢字を／覚える／ために／何度も／書いた。
 ⑤今日は／二月に／しては／寒く／ない。
 4 ウ
 5 ①あなたは「泳ぐこと」が「好き」です「か」。
 ②週末「に」は「二時間」ほど「勉強」する。
 ③姉は「ニューヨーク」に「住ん」で「います」。
 ④第一「に」手伝わ「せ」て「料理」を「した」。
 6 9
 7 ①主語Ⅱ満月が 述語Ⅱ浮かぶ ②主語Ⅱいとも 述語Ⅱ話さない

解説

2 「こわれてしまうのだ」は、「て」の後で区切る。

3 ②「体験する」は複合語で「単語」。③「降っていたので」は「て」の後で区切る。④「ため」の前で区切る。⑤「寒くない」は、「寒くはない」という意味で、「寒く」と「ない」は別の文節。

4 文節分け：「本は／あまり／読みません。」↓ア・イは誤り。「本は」は「本」と「は」で二単語、「読みません」は「読み(読む)」と「ませ(ます)」、「ん」の三単語。したがって、ウが正解。

5 ②「勉強する」は複合語で「単語」。③「います」は「い(いる)」と「ます」の二単語。④「した」は「し(する)」と「た」の二単語。

6 単語に分けると「石けん」を「作る」こと「になっ」て「いた」となる。

◆ 確認問題 ◆

104～105 ページ

- ① Aア Bイ ② Aウ Bエ
 ② ①エ ②オ ③ウ ④イ
 ③ ①イ ②ウ ③ア ④エ ④ エ
 ⑤ ①ケ ②ク ③オ ④ウ ⑤コ ⑥エ ⑦カ ⑧キ

解説

① 「白い」は「子猫が」を修飾する連体修飾語。② 「たくさん」は「釣ったね」を修飾する連用修飾語。

② 「暗ければ」は条件を示す接続語。② 「いいえ」は応答の独立語。③ 「切手を」は何を、「集めている」のか詳しく説明している連用修飾語。④ 「休日だ」は「何だ」に当たる文節なので述語。「休日だ」の主語は「明日は」。

③ ① 「参加した」は述語で、主語は「部長が」。「競技会に」と「特別に」は、何に、どのように、「参加した」か詳しく説明している連用修飾語。② 二つの文節を入れ替えても文意が変わらない場合は、並立の関係。③ 「妹も」は「いきました」に対応する主語に当たり、主語・述語の関係になっている。

④ 「一で／いる」「一で／くれる」「一で／ほしい」などは補助の関係になる。

⑤ ① 「今年は／暑いので」は、後の部分の理由を示す接続語。② 「規則正しく／絶え間なく」は並立の関係で、どのように、「聞こえてくる」か詳しく説明している修飾部。③ 「パリ」は事柄を提示している独立語で一文節。④ 「穏やかに」はどのように、「ほほえんでいる」か詳しく説明している修飾語。⑤ 「新入生の／皆さん」は呼びかけの独立部。⑥ 「抗議したが」は逆接の関係を示す接続語。⑦ 「激しい／雨が」は「何が」に当たる主部。⑧ 「開いて／くれた」は補助の關係の連文節。「どうする」に当たる述部。

◆ 確認問題 ◆

106～107 ページ

- ① 私・初めて・スキー・し・七歳・とき
 ② 雑誌・載っ・いる・服・買っ・ほしい
 ③ 長い・する・禁じ・いる
 ④ 体言||浴衣・花火大会 用言||新しく・買っ・着・行っ
 ⑤ ア A動詞 B名詞
 ⑥ ①ア ②オ ③イ ④コ ⑤ク ⑥ケ ⑦カ ⑧キ ⑨ウ ⑩エ
 ⑦ ⑧エ

解説

① 文を文節(／)・単語(一)に分けると、①「私」が初めて／スキー一を／したの／は、／七歳の／とき／だった。②「雑誌」に／載つて／いる／ような／服を／買つて／ほしい。となる。助詞・助動詞でないものを抜き出す。

② 文を文節・単語に分けると、「ディベート」に／参加して、／クラス運営の／問題点を／考え／させ／られた。となる。助詞・助動詞だけを抜き出す。

③ 「長い」「する」「禁じ(禁じる)」「いる」は用言で活用する。

④ 文を文節・単語に分けると「新しく／買った／浴衣(ゆかた)を／着て、／花火大会に／行つた。」となる。体言も用言も自立語なので、文節の初めにある。⑤ ①「走り」の言い切りの形は「走る」。ウ段の音で終わるので動詞。Bは「体言」では品詞名を答えるという条件に合わないので注意する。

⑦ 活用する語の言い切りの形は、①「折る」③「寒い」⑥「られる」⑨「きれいだ」。

⑧ 文節・単語に分けると「最適な／もの」に／変わって／いった。となる。「最適な」は言い切りの形が「最適だ」なので形容動詞。「た」は活用するの助動詞。

◆ 確認問題 ◆

108 ~ 109 ページ

- ① ア ② ウ ③ オ ④ エ ⑤ イ
 ② ① ゆらゆら ② とても ③ たぶん
 ③ ① 前の ② ゆっくり ④ ウ
 ⑤ イ・ウ〔順不同〕 ⑥ ① イ ② ア ③ ウ ④ エ
 ⑦ ① 感動詞⇨ああ 意味⇨ア ② 感動詞⇨おはよう 意味⇨エ

解説

① ①の「もの」は「物体・物品」という具体的な意味を表すので、普通名詞。④の「もの」は「気持ちのよい」という連体修飾語とともに用いられ、「物体」などの具体的な意味を表さないで、形式名詞。③「ここ」は場所を指し示す指示代名詞。

- ② ①「ゆらゆら」は状態の副詞。②「とても」は程度の副詞。③「たぶん」は「……(だろ)う」という推量の表現と呼応する呼応の副詞。

- ③ ②「もっと」は程度の副詞で、副詞「ゆっくり」を修飾している。

- ④ 「よもや」は否定の推量の表現を伴う文節を修飾する呼応の副詞。「(ある)まい」は「……ないだろう」という否定の推量を表している。

- ⑤ ア「さまざま」は言い切りの形が「さまざま」となる形容動詞。イは「いろんなだ」とはならない。ウ・エ「ある」は、どちらも同じように体言を修飾しているように見えるが、エ「ある」は「存在する」という意味の動詞。

- ⑥ ①「全力で走った」結果として「追いつけた」のではなく、「追いつけなかった」という内容が続くので、逆接の接続詞が当てはまる。②「眠れなかった」を原因・理由として「眠い」という結果が続くので、順接の接続詞が当てはまる。③空欄の前後で話題が変わっているため、転換の接続詞が当てはまる。④「のどが痛い」ことに加えて「熱も出てきた」のだから、累加の接続詞が当てはまる。

◆ 確認問題 ◆

110 ~ 111 ページ

- ① 入れ
 ② ① A イ B カ ② A ウ B ク ③ A エ B サ
 ④ A オ B コ ⑤ A ア B ケ ⑥ A ウ B キ
 ③ ① 形容詞⇨おいしかつ 活用形⇨連用形
 ② 形容詞⇨早けれ 活用形⇨仮定形
 ④ 寒から ⑤ イ
 ⑥ 形容動詞⇨きれいな 活用形⇨連体形

解説

① 述語の文節は「入れ」た(助動詞)「ん(助詞)の(音便)「だ(助動詞)」となり、文節の初めにある自立語の「入れ」が動詞。言い切りの形は「入れる」。② ①「ない」が続くのは未然形。④「ば」が続くのは仮定形。⑤「こと」が続くのは連体形。⑥「て」が続くのは連用形。

〔活用の種類の見分け方〕

五段活用…^{ア段}笑わない 上二段活用…^{イ段}伸びない 下二段活用…^{エ段}覚えない
 ※下に「ない」を付けて、「ない」の直前の音で見分ける。

- ③ ①「おいしかつ」は「おいしい」の連用形。②「早けれ」は「早い」の仮定形。

- ④ 「寒い」は形容詞。「う」に続くのは、未然形。

- ⑤ アは形容詞「ない」。イは「速くはない」といえるので補助形容詞。ウは形容詞「もつたない」の一部。エは「わからぬ」と言い換えられるので否定(打ち消し)の助動詞。

- ⑥ 性質や状態を表しているのは「きれいな」と「明るく」で、言い切りの形が「だ」となるのは「きれいな」。体言「青空」が続いているので連体形。

◆ 確認問題 ◆

112 ~ 113 ページ

- ① まて・て・けれど・が・よ
② カ ③ キ ④ イ ⑤ ウ ⑥ ケ ⑦ エ ⑧ コ ⑨ ア ⑩ オ
① ア ② ウ ④ エ ⑤ イ
- 〔順不同〕

解説

① 文を文節(／)・単語(二)に分けると、「今日まで／必死に／努力して／きた」けれど、／やと／その／成果が／現れ「たよ」となる。文節の初め以外にあり、活用しないものを選ぶ。「必死に」の「に」は形容動詞の活用語尾。また、「その」は一語の連体詞。「まで」は副助詞、「て・けれど」は接続助詞、「が」は格助詞、「よ」は終助詞。

- ② 「テレビでも」は、「例えばテレビでも」という意味。⑤ 「行ったり」と「来たり」が対等の関係で並んでいる。⑦ 「親友にさえ話せない」は「他の人にはもちろん話せない」ということを類推させている。⑨ 「もしあなたさえよければ」という意味なので、仮定を表している。
- ③ ①の「で」は格助詞で、手段を表している。アも同様。イ・ウも格助詞だが、イは「病気のために」の意味で原因。ウは場所。エは確定の順接の接続助詞。②の「と」は「すると」の意味で、確定の順接を表す接続助詞。ウも同様。ア・イ・エは格助詞で、アは相手、イは引用、エは比較の基準を表している。
- ④ 文中の「の」は連体修飾語を示す格助詞。エも「北国の冬」と体言を修飾している。アは連体詞「その」の一部。イは主語を示す格助詞。ウは「学ぶことは」と言い換えられるので、体言の代用の格助詞。
- ⑤ 「ながら」は、主に確定の逆接と同時の意味・用法がある。文中の「かきながら」は「ながら」の前後の動作が同時に行われている。イも同様。アは「気を付けていたのに」、「ウは「ささやかではあるが」、エは「狭いけれど」と言い換えられるので、確定の逆接。

◆ 確認問題 ◆

114 ~ 115 ページ

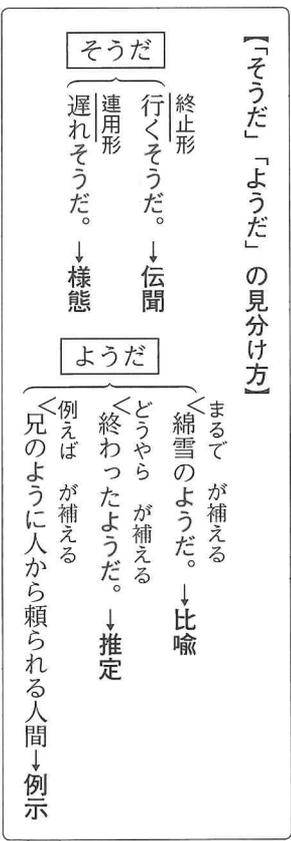
- ① ①ない・れ・た・らしい ②う・たがる・せ・た
② ①ク ②ウ ③オ ④コ ⑤ア ⑥エ ⑦ケ ⑧イ ⑨カ ⑩キ
③ ①イ ②エ ④ウ ⑤ア
- 〔各順不同〕

解説

① ①「頼まれたらしい」の「れ」は受け身の助動詞「れる」。②「手伝わせて」の「せ」は使役の助動詞「せる」。

② ⑤「祭りが地域の人々に受け継がれた」という意味なので、受け身。⑦「だろ」は断定の助動詞「だ」+推量の助動詞「ろ」。⑨誰かを誘っている文脈。⑩「壁に掛かっている絵」と言い換えられる。

- ③ ①とイは伝聞。ア・ウ・エは様態。②とエは比喩。ア・ウは推定。イは例示。
- ④ 「動物に食べられる」は、上に「……に」があるので受け身。
- ⑤ 「ぬ」と言い換えられるのはア。イは補助形容詞。ウ・エは形容詞の一部。



- ア 校長先生が、……来られる。 目上の人が主語 ↓ 尊敬
イ 五冊まで借りられる。 「借りることができる」 ↓ 可能
ウ 若者たちによく用いられる。 上に「……に」がある ↓ 受け身
エ 優しさが(自然に)感じられる。 「自然に」が補える ↓ 自発

◆ 確認問題 ◆

117 ページ

- 1 ①ア ②イ ③ウ ④イ ⑤ア ⑥ウ ⑦ア
- 2 ①いらっしゃる(おいてになる) ②お読みになる(読まれる)
- 3 ③くださった ④お渡しになる(渡される)
- 4 ①いただく ②参る(伺う) ③差しあげる ④お貸しする
- 5 ①ご覧になった(見られた) ②召しあがって
- 6 ③お持ちします ④おっしゃった(言われた・話された)
- 7 ⑤お掛けになって ⑥参ります(伺います)

解説

- 1 ①「おっしゃる」は「言う」の尊敬語。「おっしゃる」という動作をする「校長先生」への敬意を示す。②「する」の謙讓語。「私」の動作をへりくだって言い、「保護者の方」への敬意を示す。③・⑥文末の「……です」「……ます」は丁寧語の表現。④「ご……する」は謙讓語。「お客様」への敬意を示す。⑤「お……になる」は尊敬語。「先生」への敬意を示す。⑦尊敬の助動詞「れる」を使う表現。「いろいろな方」への敬意を示す。
- 2 ③「くれる」の尊敬語は「くださる」。「もらう」の謙讓語「いただく」と間違えやすいので注意する。
- 3 ④謙讓語に直すので、「お(ご)……する」という形にする。
- 4 ①「拝見する」は「見る」の謙讓語。相手(「先生」)の動作なので、尊敬語に直す。②「いただく」は「食べる」の謙讓語。「食べる」のは相手の動作なので、尊敬語に直す。③「持つ」のは「私」の動作なので、謙讓語に直す。④「申す」は「言う・話す」の謙讓語。謙讓語に尊敬の助動詞「れる」を付けても尊敬語にはならない。⑤尊敬語の表現を二つ以上同時に使うのは誤った使い方。「お……になる」と、尊敬の助動詞「れる」が同時に使われている。⑥「父」は自分側の人なので、尊敬語を使わない。

◆ 確認問題 ◆

118 ~ 119 ページ

- 1 (1) ウ
- (2) 例 私たちの職場体験のためにお時間をいただき、ありがとうございました。
- (3) 敬具 (4) イ

解説

(1) 手紙の基本的な形式は、下の図のとおりである。自分の署名は下方に書く。設問の手紙文では、頭語の「拝啓」、(ウ)の時候の挨拶、「フレンドストアの皆様には、いかがお過ごしでしょうか。」という安否を尋ねる文までが「前文」に当たる。

前文(頭語・時候の挨拶など) 主文(手紙の用件) 末文(結びの挨拶など・結語)	日付 宛名 署名
---	----------------

- (2) スーパーマーケットの人に対する敬意を示す敬語表現を用いて書き直す。「もらう」は自分の動作なので、謙讓語の「いただく」に直す。また、相手の「時間」なので、「お」を付けて尊敬語の「お時間」とする。「お時間をいただく」の部分は、他にも謙讓語を使って「お時間を割いていただき」という表現をすることも多い。また、「もらう」を相手の動作である「くれる」と置き換えて、「お時間をくださり」(尊敬語)と表現することもできる。「お礼を述べる内容に直し」という条件が付いているので、「……ありがとうございます。」「……感謝しております。」などの言葉を加えてまとめる。
- (3) 「拝啓」に組み合わせる結語は、「敬具」。よく問われる組み合わせである。

- (4) 相手が団体の場合は「御中」を使う。ア「様」、ウ「殿」は個人宛てで使う。ただし「殿」は目上の人には使わない。エ「各位」は、相手が複数の場合に使う。「〇〇委員各位」など。

2 (1) 例週に一度、全校生徒で校内のごみを拾う(18字)

- (2) ウ
(3) 花を植えて育てる活動

解説

(1) まず、話し合いの課題をpushさえる。初めに司会が、「今学期の目標」を紹介して、「この目標を実現するための、具体的な活動を考えたいと思います」と発言している。これが話し合いの課題である。これを踏まえて「」を見ると、司会は、「Aさんの提案は、」という活動ですね。」と言っていることから、「」を含む文は、直前のAさんの提案の内容をまとめ、確認している文だとわかる。したがって、「」にはAさんの提案の要点をまとめた言葉を入れる。Aさんは「校内のごみをみんなで拾う」という活動はどうでしょうか。週に一度、……ごみ拾いをするのです。」と提案しているので、この部分をまとめる。

記述ポイント

「週に一度」「全校生徒で」「校内のごみを拾う」という三点をpushさえる。「全校生徒で」は「みんなで」、「校内の」は「学校の」、「ごみを拾う」は「ごみ拾いをする」などでもよい。

- (2) Bさんは、まず、「Aさんの提案は具体的で、確かに、美しい学校を実現することができるかもしれません。」と、Aさんの提案のよい点を認めている。そのうえで、「でも、私は、この提案には反対します。」と、Aさんの提案に対する自分の立場を明らかにしている。そして、その理由を「そういうことは、普段の掃除の時間にきちんとやるべきだから」と述べている。

- (3) Bさんは、Aさんの提案に対する立場とその理由を述べた後、「私は、花を植えて育てる活動を提案します」と、自らの提案を述べている。

◆ 演習問題 ◆

1 (1) イ

- (2) 例約四十パーセントが食べ残しである
(3) 資料1リーイ 資料2リーウ
(4) 例買った食品を使いきるようにする
例解食べ物を買いすぎないようにする

解説

(1) 高橋さんは、テーマである「現代社会の課題」の一つとして「ごみを減らすこと」を挙げ、「特に、食べ残しを減らすことが、私たちの取り組むべき課題だ」と、最初にテーマに対する主張をはっきり述べている。したがって、答えはイ。

- (2) 「家庭から出る生ごみ」について示しているのは資料2である。したがって、①には、資料2から読み取れることが入る。高橋さんは「特に、食べ残しを減らすことが、私たちの取り組むべき課題だ」と主張しているので、こは「調理くず」ではなく「食べ残し」の割合に注目するべきである。

記述ポイント

「食べ残し」が多いことをpushさえる。そのとき、資料通りに「三十九パーセント」と書いてもよいが、発表という場面では、「約四十パーセント」「約四割」など、おおよその数で表すと聞き手が理解しやすい。

- (3) 資料1からは、「一年間に出るごみの量」のうち、約三分の一が「食べ物のごみ」だとわかるので、続く部分でそのことを説明している「イ」で見せるのが適切である。資料2は、「家庭から出る生ごみの内訳」について示しているので、続く部分でそのことを説明している「ウ」で見せるのが適切である。
- (4) 高橋さんが「料理を残さないようにすることを心がけたい」と考えたのは、(3)で見たように、「ごみのうち、約三分の一は、食べ物のごみ」であり、また家庭から出る生ごみの約四十パーセントが食べ残しで、その中の「半分以上が、手をつけなまま捨てられた食品」とあるということが問題だと考え

たからである。したがって、「手をつけなまま捨てられた食品」をなくすための対策を考えて書く。

記述ポイント 不要な食品は買わないようにすることや、買った食品は使いきるようにすることなど、食品を使わずに捨てることをなくす手立てが書いてあればよい。

② (1) 例伺いたい(お聞きしたい)

(2) ②エ ③ウ ④ア ⑤イ

(3) 例1〜4時

解説

(1) 電話で話している図書館の職員への敬意を表す敬語にする。「聞く」は植田^{うえだ}さんの動作なので、謙譲語に直す。「聞く」の謙譲語には、「伺う」という特別な動詞を使う表現や、「お……する」を使う表現がある。他に、「お尋ねしたい」「ご質問したい」などでも可。

(2) 線②は、植田さんが、これから質問したいのだが、それに答えてもらう時間を相手をとれるかを確かめている。——線③は、職員が言った「目的」について、何を話せばよいのかわからなかったため、それを尋ねている。

——線④は、自分の名前の「うえだ」が、同じ読みで別の漢字を書く「上田」などと間違えられないように、どの漢字を使うのか一字ずつ説明している。電話などの口頭でのやりとりには、このような工夫が必要な場合もある。

——線⑤は、当日の持ち物は大事なことで、間違いないか復唱して確認している。

(3) このメモの「時間」とは、学習室が空いている時間のことである。職員は、「日曜日は、午後1時から4時までが空いています。」と言っている。

◆ 実戦問題 ◆

① (1) エ

(2) 例気軽に図書館に来る生徒が増え、本の紹介をきっかけに気に入った本を借りてくれる(38字)

解説

(1) 「それ」とは、——線①の直前でBさんが「読書離れの表れ」の根拠として発言していた、「夏休みで図書館が閉まっていた八月の後は、六月以前なみに戻っています」という内容を指している。Bさんは、学校図書館の貸し出し冊数だけをもとに「読書離れ」と断定しているが、読書は、学校図書館の本を読むことだけではない。自分で本を買って読んだり、学校以外の図書館で本を借りて読んだりすることもあるはずである。そのような「学校図書館を利用する以外の読書状況」がわからないのに、「読書離れ」と断定するのは無理があると、Cさんは指摘しているのである。

(2) 「飾りつけ」は、Aさんの提案である。Aさんは「気軽に図書館に来てほしい」と思い、そのための工夫として「飾りつけ」を挙げている。また、「アンケート」はCさんの提案である。Cさんは「その(アンケートの結果)をもとに、みんなが読みたいと思う本を紹介すれば、気に入った本を手にとりて借りてくれる」と考えている。——線②のBさんの発言は、二人のこのような発言の流れを受けていることを押さえる。

記述ポイント 「気軽に図書館に来る生徒が増える」とこと、「本の紹介をきっかけに気に入った本を借りてくれる」という二つの要素をまとめる。

誤答例 みんなが気軽に図書館に来て本を借りてくれれば、本の貸し出し冊数が増える(Cさんの提案を踏まえた内容がはっきり書かれていない。)

② 例「いただく」(4字)

(2) 例「何」という名前でしたか

(3) 工

【解説】

(1) 「食べる」の謙譲語は、特別な動詞「いただく」を使う。インタビュー中に出てくる尊敬語の「召し上がる」も、特別な動詞を使う敬語表現である。

(2) ②の前後を確認する。直前では、メイ先生が「この前、すてきな名前の付いている和菓子を食べました。」と言い、②の後では、メイ先生が「『時雨』です。」と答えている。この流れから、あやさんが、メイ先生が食べた和菓子の「すてきな名前」がどういふものだったのかを尋ねたことを読み取る。そして、この後、「時雨」という名前から、日本のさまざまな雨呼び名について、会話を膨らませている。

【記述ポイント】「何」という名前のお菓子を食べた(召し上がった)のですか」など、和菓子の名前を尋ねる言葉であればよい。また、他の部分でメイ先生に対して敬語を使っていることを踏まえ、丁寧語を使った表現で書くこと。

【誤答例】どんな和菓子を食べたのですか(名前を尋ねていない。)

(3) わたるさんの発言とメイ先生の発言のつながりを捉えていく。わたるさんの発言を見ていくと、メイ先生が「日本語は難しい」と言ったときは、「どういふところが難しいですか。」と尋ねている。また、メイ先生が敬語について話したときは「英語には敬語はないのですか。」と尋ね、文化について触れたときは「他に興味がある日本の文化があれば教えてください」と尋ねている。このように、わたるさんはメイ先生の発言から次の話題を引き出し、話が膨らむような受け答えをしているといえる。

30 作文

◆ 確認問題 ◆

私は、吹奏楽部に入っています。
担当はパーカッションです。最近、
父に「がんばっているね。」とほめ
られました。

①

② ①落とした ②就くことだ ③させた ④あきらめないことだ

③ 例

私は、アの方法がよいと思いま
す。なぜなら、部員一人一人が平
等の立場でキャプテンを選ぶこと
ができるからです。

〈54字〉

【例解】

私は、イの方法がよいと思う。
二年生の中から選ぶため、お互い
のことをよく知っている人どうし
で決められると思うからだ。

〈58字〉

【解説】

① 書き出しは一字下げる。句読点は原則として一マスに一つ入れるので、「私は、」の読点(、)は一マスに入れる。一文目の句点(。)は行頭ではなく、前行の最後のマス目に、「す」ともに入れる。「最近、」の読点も同様に、「近」と同じマス目に入れる。どちらも、マス目の欄外へ出してもよい。「」が閉まっているね。」のように、句点に閉じるかぎが続く場合は、句点と閉じるかぎを同じマス目に入れる。

② ①「落ちた」は、自動詞「落ちる」に過去の助動詞「た」がついた形。この文は「兄が」が主語で「ボールを」という動作の対象があるので、他動詞

「落とす」を用いて「ボールを……落とす」とする。②この文の主語は「夢は」なので、述語は「どうする」という形にはならない。主語と述語の関係が「何は―何だ」という形になるように、形式名詞を補って「就くことだ」と直す。なお、「私は」が主語であれば、「私は……世界平和に貢献する仕事に就く。」「私は……世界平和に貢献する仕事に就きたい。」などとなる。③この文の主語は「母は」だが、「弟に命じて」とあることに注意する。「部屋の片づけ」をするのは「母」ではなく「弟」なので、「母は、……部屋の片づけをさせた。」と、使役の表現に直す。④この文の主語は「大切なこと」とある。「の」は格助詞で体言の代用の働きをしており、「大切なこと」と言い換えられる。この文も②と同様に主語と述語の関係が「何は―何だ」となるのが正しい。よって、形式名詞を補って「あきらめないことだ」と直す。③ 選ぶのはどちらの方法でもよい。ポイントは、選んだ方法がよいと思う理由を明確に書くことである。この問題のように、二つの考えから一つを選ぶ場合、まず両者の相違点を確認し、それぞれの方法にどんな長所（あるいは短所）があるのかを考えるとよい。

ア 選ぶ人：「部員全員」 選び方：「投票」
 〈長所〉 一年生も二年生も平等、全員の意見が反映される、など。
 イ 選ぶ人：「二年生」 選び方：「話し合い」
 〈長所〉 二年生どうしの方がお互いのことをよく知っている、二年生にチームを引っ張る立場としての自覚が生まれる、など。

次に、考えた長所（あるいは短所）を理由として文章をまとめる。指定字数がある場合は、その八割以上の字数を目安に書く。

【誤答例】まず、イの方法でキャプテン候補を三人くらいにしばってから、アの方法で、部員全員で投票して決めるのがよいと思います。

（ア・イのどちらかの方法を選ぶという設問の条件に合っていない。）

【誤答例】イの方法だと時間がかかるので、アの方法がよいです。

（指定字数より大幅に少ない。）

◆ 演習問題 ◆

① 例

私	は、	「全席優先席」	に	す	と									
い	う	筆者の提案	に	反	対	で	す。							
な	ら、	「全席優先席」	だ	と、	他	の								
誰	か	が	譲	ら	う	と	い	う、	他	人	任			
せ	の	気	持	ち	に	な	る	と	思	う	か	ら	で	す。

別解

筆	者	の	提	案	に	賛	成	で	す。	私	も	優		
先	席	に	座	る	と	き	は、	お	年	寄	り	な		
が	乗	っ	て	こ	な	い	か	気	を	配	り	ま	す	が、
普	通	の	席	に	座	る	と	忘	れ	が	ち	で	す。	
全	て	優	先	席	な	ら	忘	れ	な	い	と	思	い	ま

（77字）

解説

「課題文読み取り型」の問題では、まず、課題文から作文に必要な内容を読み取ることが大切である。この問題では、文章から「筆者が提案していること」を読み取る。この文章では、電車に乗ったときに、乗客が誰もお年寄りに席を譲らないという場面に出会った、筆者の体験が書かれている。筆者はこの体験から、「電車やバスの座席を、『全て』優先席にしてはどうだろう。」と提案していることを押さえる。次に、この提案について、賛成か反対か、立場を明らかにする。賛成ならば、その理由として「全席優先席」にした場合の長所を書く。ただし、文章中に書かれていることを要約して書くだけでは、自分の考えにならないので注意する。反対ならば、その理由として「全席優先席」にした場合の短所や、文章中の筆者の考えに対する反論を書く。

【記述ポイント】「賛成か反対か、あなたの立場を明らかにすること」という条件

の場合、「どちらがよいともいえない」「別の案を提案する」などは、条件に合わないので注意する。文体の指定はないので、常体で書いてもよい。

誤答例 困っている人が座席に座れるように、全席優先席にするのがよいと思います。座席を必要としている人に、譲らなければならないという意識が芽生えるはずです。(筆者の提案に対して、賛成か反対かの立場をはっきり書いていない。理由や根拠に自分の考えが書かれていない。)

2		例	
この	よ	う	な
図	記	号	に
は	、	日	本
語	を	理	を
理	味	を	理
を	読	め	な
い	な	い	外
国	人	で	も
、	意	味	を
理	解	で	き
る	と	い	う
利	点	が	あ
り	ま	す	。
複	雑	な	情
報	を	伝	え
る	こ	と	は
難	し	い	の
で	、	文	字
表	記	を	す
る	こ	と	も
必	要	で	す
。			

(6行)

解説

図やポスターなどを見て、それに対する考えを書く問題では、その図やポスターの工夫されている点、特徴などに目を向ける。この問題の場合、図記号は言葉を使わずイメージによって伝えるため、言葉が理解できない人にも言いたいことが伝わるという利点が考えられる。ただし、あくまでイメージに頼っているので、誤解されるおそれはある。例えば、「エレベーター」の四角を、エレベーターだと思わない人がいるかもしれないし、「階段」で人の下にあるぎざぎざが、何だかわからない人もいるかもしれない。また、「エレベーター」の図記号だけでは、何階まで通じているのかということや、現在稼働中かどうかなどの詳しいことはわからない。こうした点に着目して、自分の考えを書く。

記述ポイント

「図記号を使うことの利点」と「使うときに留意する点」のどちらかだけでなく、両方を書くこと。「図記号を使用することについて賛成か、反対か」を問われているわけではないので注意する。

◆実戦問題◆

1		例	
文	字	を	手
書	き	す	る
例	に	、	年
賀	状	が	挙
げ	ら	れ	る
。	主	な	文
面	は	印	刷
し	て	も	、
手	書	き	で
一	言	そ	え
た	り	、	あ
て	名	は	手
書	き	と	い
う	人	も	い
る	。		
そ	の	理	由
は	、	多	く
の	人	が	、
手	書		
き	の	文	字
に	は	そ	の
人	ら	し	さ
が	表	れ	
と	考	え	て
い	る	か	ら
だ	と	思	う
。	印		
刷	だ	け	の
年	賀	状	で
は	誰	が	出
し	て	も	
同	じ	だ	が
、	筆	跡	に
は	、	話	し
方	や	表	
情	と	同	じ
よ	う	に	そ
の	人	の	個
性	が	出	
る	。	人	と
人	と	人	と
が	生	き	と
つ	な	が	
り	合	う	た
め	に	、	手
書	き	を	大
切	に	す	
べ	き	だ	。

(184字)

解説

意見文の題が「手書きの習慣をこれからの時代も大切にすべき理由」である。だから「具体例」と「自分の意見」は、「手書きの習慣」はよいもので大切にすべきだと考える立場で書くこと。「自分の意見を書く」という条件だからといって、「パソコンが普及したので、手書きは不要だ」「手書きは読みにくい」といった、手書きについて否定的な意見を書かないように注意する。

記述ポイント

〈手書きの具体例に挙げられるもの〉

- ・ 手紙、店頭のPOP広告、書道、応援の横断幕など
- ・ 手書きの特長に挙げられるもの
- ・ 個性、あたたかみ、親しみ、芸術性、気持ちを込められる、など

2 例

私	は	、	自	然	科	学	の	図	書	を	購	入	す	る	の	が	よ	い	
と	思	う	。																
な	ぜ	な	ら	、	自	然	科	学	の	図	書	は	、	貸	出	冊	数	が	
多	い	わ	り	に	、	蔵	書	冊	数	が	少	な	い	か	ら	だ	。	貸	出
冊	数	は	二	百	冊	で	、	文	学	の	三	百	冊	に	次	い	て	多	い
と	こ	ろ	が	、	蔵	書	冊	数	は	四	百	冊	で	三	番	目	で	あ	り
文	学	の	千	冊	の	四	割	し	か	な	い	の	て	、	自	然	科	学	の
図	書	を	増	や	す	の	が	よ	い	と	思	う	。						

（8行）

解説

どの分類の図書を購入するのがよいかを、蔵書冊数と貸出冊数のグラフをもとに考える問題である。下のグラフで貸出冊数の多い分類の図書に着目すると、文学が最も多く、次に自然科学が多いことがわかる。貸出冊数だけを見ると、最も人気のある文学の図書を購入することがよいように見える。しかし、（注意）には「二つのグラフを根拠に書きなさい」とあるので、必ずもう一つのグラフも見る。上のグラフの「蔵書冊数」を見ると、文学の蔵書冊数はいちばん多いが、二番目に人気のある自然科学の蔵書冊数が、文学の蔵書冊数の半分以下であることがわかる。二つのグラフから読み取ったこの二点をまとめると、自然科学の図書を購入するのがよいと考えられる。

また、蔵書冊数に対して貸出冊数の割合が高いという理由から、芸術・美術の図書を購入するとよいとする解答も考えられる。どちらの意見を選んで解答してもよいが、第一段落で考えを述べ、第二段落でその理由を示すという設問文中の条件に従って書くことに注意する。

記述ポイント

資料から読み取れることは一つとは限らない。設問文や（注意）を照らし合わせて、最もふさわしいものを選んで意見を書くことが大切である。

標準問題

31

テーマ別

日本文化と生き方

130～132 ページ

- (1) ある物事のくられていない（ことの例）。
A オ B ア
- (2) ①多くを語らずに意思の疎通ができる ②厳密な論理性
- (3) 例日本人自身が、他国には見られない、日本の文化の価値に気づくこと。
- (4) ア
- (5) 例日本人自身が、他国には見られない、日本の文化の価値に気づくこと。
- (6) ウ

（32字）

解説

(1) この文章の冒頭の一文は、「奥入瀬溪流」を取り上げ、「日本国内でも有数の景勝地があります」と紹介している。この一文はこの後の展開とどのように関わっていくのか、何のために奥入瀬溪流を取り上げたのかを、段落の関係を捉えて考える。

① 奥入瀬溪流という日本国内でも有数の景勝地がある。

ある景勝地（奥入瀬溪流）の紹介

② 明治時代に発見されるまで、地元の人々には嫌がられていた。

大町桂月が美しさを伝え、多くの人々が足を運ぶようになった。

景勝地になるまでのいきさつ

③ このように、ある物事の価値がその当事者に理解されていないケ-

スバは珍しくない。

「価値が当事者に理解されていない」例のまとめ

③段落でまとめている内容に注目すると、奥入瀬溪流は「ある物事の価値がその当事者に理解されていない」ことの例であることがわかる。

(2) 空欄の前後の内容を確認し、文章がどのように展開しているかをつかむ。

A の前：日本語の曖昧さが欧米人を困惑させることは間違いない。
A の後：……
← 具体例を挙げている

・一六世紀にキリスト教を布教するためにやってきたカトリックの宣教師も言葉の問題でさんざん苦労した。
・ローマ法王に「日本語は悪魔の言葉である」と報告。
← 苦労が大変なものであったことを表している

A の前までは、日本語の曖昧さが「欧米人に理解されない」「欧米人を困惑させる」ということを述べ、A の後では、それについての具体例を挙げているので、説明・補足の接続語のオ「たとえば」が適切。

B の前：日本語への批判を聞いて、「たしかにそうだ」と納得してしまう人が多い。
← 食い違う内容（＝逆接）

B の後：欧米とは異なる伝統を持つ他国の言語を悪魔呼ばわりするのは問題だ。

B の前までは、欧米人の批判を聞いて「納得してしまう人」の多いことを述べたが、B の後では、批判することに対して「問題」だと、食い違う内容を述べているので、逆接の接続語のア「しかし」が当てはまる。

(3) 線②の理由について、筆者は、曖昧な表現が成立するための一般的な背景を9段落で述べ、続く10段落で、日本の社会的背景を説明している。この構成をつかみ、二つの段落から当てはまる言葉を探す。

②は、「密閉された社会」である日本では、「人々の同質性が高まり、コミュニケーションが洗練される」(37～38行目)―その結果―「多くを語らずに意思の疎通ができる」ようになったのである。

①は、「大陸諸国」と比べて、「重要視されない」ものを捉える。

・大陸諸国：厳密な論理性が求められる、いちいち事細かく説明する。
・日本：以心伝心でわかり合えるから、あまり事細かな表現は嫌われる。
＝厳密な論理性は重要視されない。

(4) 「奥入瀬溪流」「浮世絵」の二つについて述べている12段落に注目する。また、「奥入瀬溪流」について考えた(1)も参考にする。

「浮世絵」は、陶器を輸出するときに「つめもの」として「紙くず同然に扱われて」いたが、フランス人によって、その価値を発見された。他者から評価されて、初めて価値が認められるといういきさつが「奥入瀬溪流」と共通している。この二つと似ているものは、「さびれた古民家」が、「新聞の特集記事」で取り上げられて「観光場所となった」というアである。エの「再利用(加工)したことで価値が認められた」「校舎」は、同様の例とはいえない。

(5) 線③の「堂々と発信し」と同じことを述べている、15段落の「自信をもって発信する」に注目する。この言葉が含まれる一文で、筆者が「気づかなければいけません」と論じている内容を、「その価値」が指し示しているものを明らかにしてまとめる。

記述ポイント ⑦：日本人(自身)が ①：他国には見られない、日本の文化の価値に気づく の二点をまとめ、㊦「……こと。」の形で文末を結ぶ。
誤答例 日本人自身が、日本文化の価値に気づくこと。

④「他国には見られない」という内容がないし、字数も足りない。

(6) ア～エの内容を検討していく。アについて、4段落は3段落の内容を受け、日本の特質へと話を発展させているので、3段落は「筆者の主張の理由」ではない。イについて、12段落以降を全て「筆者の意見」とまとめるのは、適切ではない。エについては、14・15段落は、12・13段落の内容も認めながら、これからのあり方について筆者の意見を述べているので、「全てを否定し」は不適切。

(1) ④ (2) イ

(3) A 耳で聴き、体で感じ、目で読んで
B 例考えたあとでも覚えていなければならぬ (18字)
[別解] 考え終わったあとでも忘れてはならない (19字)
[例] 人が蓄積だけをつけて、創造することもないまま年を重ね、生涯を終えてしまうこと。(39字)

(4) 例人

(5) ア (6) A 妨害条件 B 蓄積

(7) ウ

解説

(1) 段落の初めの接続語や、問題を提起している段落などに注目して、話の内容が大きく変わっているところをつかむ。

④ 段落は、「それにしても、そもそも創造を生み出す力はどこからやってくるのか。創造性の背景にある重要な条件とは何なのか。」と話題を変えて問題提起をしているので、ここから新しい内容が始まっている。

話題

・ ① ～ ③ 段落：学問をすることの喜びについて。
・ ④ ～ ④ 段落：創造性の背景にある重要な条件について。

(2) 線①の直後を押さえて、どのように思えば、「知識を集めることも案外楽しいこと」で「読書も苦にならない」のかを考える。指示語はそれより前の内容を指し示すことが多いので、①・②段落の内容に着目する。

「学問の世界」

学ぶこと、創造することの喜び Ⅱ 考えることの喜び

②段落の最後の一文に「さまざまな知識は考えるための資料であり、読書は考えるためのきっかけを提供してくれるもの」ともある。これらの内容をまとめているイが適切。

(3) 線②の直前に、「……と思うと、学問する前に疲れてしまい」とあるので、どう思うことによって疲れてしまうのかを読み取る。

耳で聴き、体で感じ、
目で読んで得たこと

↓

考えたあとまで、覚えてなければならぬ、忘れてはならない。

A

B ……こう思うと学問をする前に疲れてしまう。

Aは抜き出し、Bは文章中の言葉を使って記述することに注意する。

(4) 線③の「老化して死んでしまう」とは、枯死すること。文章中の「枯死」という言葉に注目して、人について述べている段落を探すと、⑩段落が見つかる。この段落から、線③と対応している表現を捉える。

根だけが発達して キノコをつくらずに老化して死んでしまう

蓄積だけをつけている 創造することなく、生涯の幕を閉じなければならぬ

この、対応している言葉を使ってまとめる。

記述ポイント ⑦：蓄積だけをつけて ⑧：創造することのないまま生涯を終えてしまう の二点をまとめ、㉞「……こと。」の形で文末を結ぶ。

(5) 空欄の前後の内容に注目して、文章の展開を捉える。

の前の：根だけが発達してキノコをつくらずに、ついには老化して死んでしまうことがある。

死んでしまうことがある。

← 話題を転換

の後：どうするか。

(問題となる事実)

(問題解決の方法)

(6) まず図中に出てくる言葉を押さえて、「因」「縁」「逆縁」「表出」などの言

葉が使われている[1]段落以降に注目する。

Aは、(逆縁)とイコールで結ばれている。[3]段落に「逆縁」は「逆境」に置きかえられるとあるので、松茸の「逆縁」に当たるものを探すと、[2]段落に「松茸に与えられる妨害条件に相当するものが……」とある。

Bと結ばれた「因」について、筆者は[1]段落で「地表下で発達をとげた松茸の根のように、……自分の中に蓄積していったもの」と述べている。

学問の世界では、「蓄積」したもの(因)が「縁(逆縁=妨害条件)」によって「表出」し、「創造」につながると、筆者は考えているのである。

(7) 全ての選択肢で「逆境」という言葉が使われているので、同じ意味の「逆縁」も含めて、[1]~[4]段落を中心にみていく。

Aについては、「多くの人の協力を得ながら」「逆境を克服していく」という内容は文章中に書かれていない。

イについては、「恵まれた環境に満足せず」や「あえて逆境を求めて学び続ける」ということは書かれていない。

ウは、前半の内容は[2]段落と、後半の内容は[12]段落と一致している。

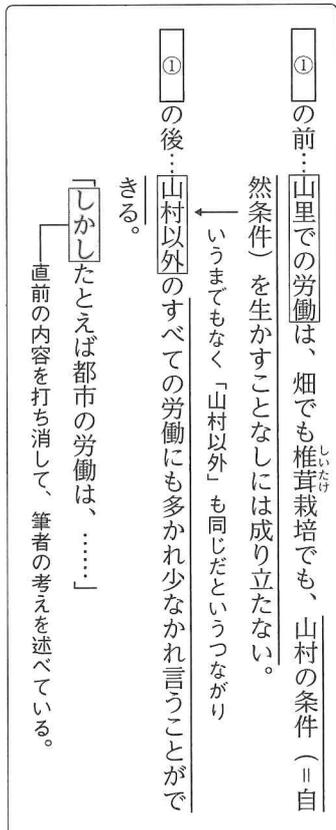
エは、「多くの知識を集め、読書に励む」とあるので、[2]段落の内容にも注目する。知識の収集や読書は考えるための資料やきっかけであり、直接「発見と創造の喜び」をもたらしてくれるものではない。

◆標準問題◆

- (1) エ
- (2) 1 イ 2 自然を克服すること
- (3) 1 エ 2 生活様式
- (4) 例労働時間と労働密度を自分で決められるということ。(24字)
- (5) 例山村での労働は生活と密接に結びつき、そのあり方は、季節とともに自然条件に合わせて変化していくから。(49字)
- (6) イ

解説

(1) [1]の前後のつながり方を考える。



[1] (もちろん) ……しかし…という言い方に注意する。一般的とされる事柄を述べた後で、筆者の見解を示している。

(2) 1 「季節に合わせた一年のリズム」は「そこ」にあるので、「そこ」が指している直前の段落に着目する。木や草、山女や岩魚、熊やりすを挙げて季節によって、その生活が変わることを述べているので、イが適切。

2 人間と季節に合わせた一年のリズムとの関係については、——線②の直後と、それに続く段落に注目する。

季節による変化がない

人間：一年中同じように働き、同じように生活する

その理由

自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさづけられた宿命であるかみえる

人間は、生きるために「自然を克服」しようとすることによって、季節に合わせた生活のリズムをなくしてしまったように、筆者は感じているのである。

(3) 「都市の労働と生活」の関係については、——線③の直後の段落に説明されている。

- ・一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつづけられる
- ・一年中変わらない生産活動に人々の生活も合わせられる(1)

←その結果

人間の生活様式も一年中変わることにはなくなる(2)

(4) 「いそがしさ」が「自分の能動的判断にもとづいて実現する」とはどういうことかを押さえる。——線④の前で「なめ、この出荷」という具体例を挙げ、線④の後でまとめる文脈になっている。

具体例

なめ、この出荷…

いそいで出荷するかどうかは個人の判断。自分の労働量を自分で決められる。

自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする

能動的に判断する

記述ポイント ⑦…労働時間と労働密度 ④…自分で決められるの二点を捉え、

⑤「……こと。」という文末でまとめる。④は「自分でコントロールできる(する)」でもよい。

(5) ——線⑤の「一年の生活と労働の四季」が「山村(山里)」での労働と生活について述べていることを押さえ、「そこ」が直前の一文を指していることを捉える。

山村での労働と生活

労働は直接自分の生活の創造にはねかえる。

密接な結びつき

季節という自然条件との関係のなかで変化する。

山村では「労働」と「生活」が密接に結びつき、それは自然条件との関係によって変化するため、筆者は——線⑤のように考えたのである。

記述ポイント ⑦…山村(山里)での労働は生活と密接に結びつき ④…季節とともに自然条件に合わせて変化するの二点を押さえ、⑤「……から。」など、理由を示す文末でまとめる。⑦は「密接に」という言葉を使っていなくても、結びつきの強さがわかる内容になっていればよい。④は「自然条件の変化で労働も生活も変化する」という内容が書かれていればよい。

誤答例 山村の労働は、出荷の時期などは、生活もそれに合わせることで、季節によって労働量が変わるから。

(季節によって変化するものを、「労働(量)」に限定している。)

(6) アは、都市型の生活形態について、「ますます広がると予想される」とは述べていない。イは、山村での労働は自然を利用して「四季」があらわれるという文章の内容と一致している。ウの「山村の過疎化」には文章中で触れていないし、「山村の生活のすばらしさが見直されようとしている」という内容も見当たらない。エの「近代以降の都市型の労働形態が人間にとつて最も適している」ということを、筆者は述べていない。

- (1) エ
(2) ア
(3) ウ
(4) 現在のくしまう
(5) 1 A 再現性に関する検証 (9字) (再現性の検証 (6字))
2 B 顧客観性にもとづき、自由に批判や反論が可能である。(24字)
B 例情報をオープンにし、真摯に批判を受け、間違いが分かれば修正するという態度。(37字)

解説

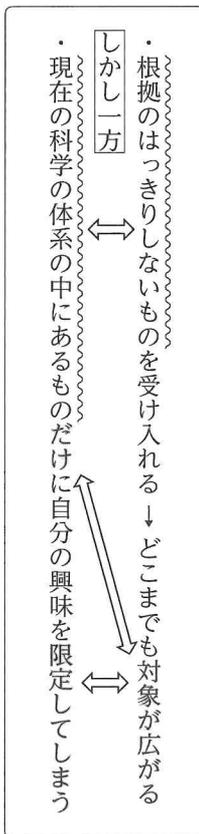
(1) 「存在しないことを意味しない」は、二重の否定となっているので「存在する」ということになる。したがって——線①は、「現状の科学で認識できないこと」も存在する」という意味である。これに合うのはエ。アは、存在しないものは現状の科学では認識できないとしている点が誤り。イは、存在しないものを「現状の科学によって認識できる」としている点が誤り。ウは、存在するものについてしか述べられていないので誤り。

(2) 「この領域」は、12行目の「現在、科学の支配が及んでいない未知な領域」を指している。したがって、アの「科学の支配が及んでいる領域」が当てはまらない。また、「現在、科学の支配が及んでいない未知な領域」にも、「この世の真実」は存在している」と述べられており、その例として挙げられている、「科学の最先端で試されている仮説の数々」はエ、「西洋科学の体系には必ずしも収まっていない東洋医学」はウ、「似非科学」と非難めいた名称で呼ばれている分野」はイに当たる。

(3) ——線③「石鹸の香り漂うような、清涼感溢れる考え方」とは、直前の「そういうた」が指す、「とても科学的な人たち」の「科学的に実証されたものだけを信用すべき」という考え方。についての筆者の評価である。この考え

方は、物事を白か黒かで判断するような、曖昧な物事を切り捨てる、ある意味合理的ともいえる考え方なので、アの「探究的な考え方」やイの「情緒的な考え方」は誤り。また、——線③は、清くさわやかな印象を与える表現だが、筆者はこの考え方に「違和感を持ってしまう」と述べているので、心からよいと思っているわけではないと考えられる。したがって、アの「称賛」やエの「敬意」は誤り。

(4) 「根拠のはっきりしないものを受け入れる」と相反するのは、根拠のはっきりしているものを受け入れる、または、根拠のはっきりしないものを受け入れない」ということである。このような内容が書かれている部分を文章中から探す。その際、——線④を含む段落と次の段落が「しかし一方」という言葉によって対比されていることに注目するとよい。



(5) 1 表の上段の「科学的な態度」については、50行目「科学的な姿勢とは」から始まる一文に、「①根拠となる事象の情報がオープンにされており、

②誰もが再現性に関する検証ができること、また、③自由に批判・反論が可能である」という三つの特徴が述べられている。また、下段の「非科学的な態度」については、続く「一方」で始まる一文に、「①根拠となる現象が神秘性をまもって秘匿されていたり、一部の人間しか確認できないなど、②再現性の検証ができない、……③批判に対して答えないあるいは批判自体を許さない」と述べられている。これらを表に照らし合わせると、
[A] ができる」と [A] ができない」は②の「再現性に関する検証」ができるかどうかだとわかる。また、[B] は、下段に55〜57行目の「客観性ではなく……批判自体を許さない」という内容が書かれているため、それとは対照的な「自由に批判・反論が可能である」という内容が入るこ

とがわかる。ただし、この内容をそのまま書くのでは「二十字以上二十五字以内」という条件に合わないので、55行目にある「客観性」という言葉を用い、批判や反論が客観性のあるものであることを加えて書く。

2 線⑤の後の文章を整理すると次のようになる。

物事が発展・展開するために必要な資質を備えた人間の態度とは？

科学的、非科学的 ↓ どちらにしても不完全
 間違っていること自体は大した問題ではない

←

間違いが分かれば修正すれば良い || 修正による発展

→ そのためには

・情報をオープンにする || この修正による発展を繰り返す
 ・真摯に批判を受ける || ことが科学の最大の特徴

以上より、「物事が発展・展開するために必要な資質」とは、間違いが分かれば修正する態度といえる。間違いが分かるためには、情報をオープンにし、他人からの批判に晒すことが必要である。また、間違いを修正するためには、他人からの批判を真摯に受けることが必要である。これらの内容をまとめる。

記述ポイント ⑦…情報をオープンにする ⑧…批判を真摯に受ける ⑨間違いが分かれば修正する 以上の三点をまとめる。設問に合わせて文末を「…：態度。」とするとよい。

誤答例 情報をオープンにして、他人からの批判に晒されてもその批判を真摯に受ける態度。(38字)

(ウ)の「間違いを修正する」という要素がない。

33 テーマ別

部活動

標準問題

(1) 夏
 (2) 音階が不確かで不完全燃焼な気持ち
 (3) 例自分の句で瑞穂と茜の表情が一変した。(18字)
 (4) エ
 (5) A 例緊張
 B 例遠慮せずに意見を言う一年生(13字)
 (6) エ
 (7) ウ

解説

(1) 「草笛」とは、草の葉や麦などの茎を口にあてて、笛のように吹いて鳴らすものこと。俳句の季語が表す季節は、現代の季節感と合わないものもある。知識として覚えておく。「草笛」は夏の季語。

(2) 「草笛や十二音階定まらず」は、三田村理香が披講した俳句。この句について、理香自身が44〜47行目で語っている。「私の草笛も音階が不確かで不完全燃焼な気持ちについての句」を捉え、適切な部分を抜き出す。

(3) 線②「魔法のようだ。」は、東子が「草笛や言葉にまとめられぬもの」の句を披講したときの瑞穂と茜の反応が想像以上であったことを表している。東子の目に映った二人の様子を「句」「二変」という言葉を使ってまとめることから、東子の句によって一変した二人の様子を捉える。

瑞穂…はっとしたように顔を上げた
 茜…「瞬ばかんとしてから、徐々に表情をほころばせる

したがって、「二変」したのは二人の表情である。

記述ポイント ⑦…自分(東子)の句で ⑧…瑞穂と茜の ⑨…表情(顔つき)

が一変した。以上の三点をまとめる。設問に合わせて文末を「……様子。」としてもよい。

【誤答例】自分の句を聞いて二人の表情が一変した。

(①を「二人」とすると、誰と誰の表情が一変したのが具体的にわからない。)

【誤答例】自分の句で茜と瑞穂の態度が一変した。

(⑦について、「はっとした」「ぼかんとして」は「態度」とはいえない。文中で「表情」という言葉を使っていることをヒントにする。)

(4) ③を含む発言は、理香が「草笛に対して結構みんなネガティブ(＝消極的・否定的)だなあ」という草笛の句に対する感想を語ったものである。

瑞穂の俳句で草笛についてネガティブなことを表す言葉は、「空耳」。「空耳」とは、実際には音はしないのに聞こえたように思うことなので、この意味に合う解釈になっている工が適切。アの「夢の中でしか聞くことができない」ものは「空耳」ではない。イの「うるさい」では「空耳」の意味と合わない。ウの「友に語りかけるようにやわらかい」は、茜の句「友呼ぶ草笛は耳にやはらかし」の草笛の印象なので、当てはまらない。

(5) 線④「小さく笑ってみる。」の直前(51～52行目)に注目して、小さく笑ってみた理由を捉え、東子の気持ちを読み取る。

・この一年生トリオは強い。さっきの負けも引きずらない。

・東子はやっとなが肩の力が抜けるのを感じた。

Aは、後に「和らぐのを感じる」と続いていることから、「肩の力が抜けるのを感じた」ときと同じ気持ちだと見当がつく。「肩の力が抜ける」とは、緊張が解ける、気持ちが安らぐ、気持ちがゆるむ、リラクセスするという意味。

Bは、このとき東子が見ているのは「一年生トリオ(真名、理香、夏樹)なので、ほほえましい対象は彼女たちであることを押さえる。次に、具体的にどのようなどころをほほえましく思っているかを考える。一年生トリオは、みんなが詠んだ句に対して率直な考えを話している。この遠慮のない態度を、東子は「一年生トリオは強い」とほほえましく感じている。

【記述ポイント】ア：遠慮せずに ①：意見を言う ⑦：一年生(トリオ)以上の三点をまとめる。アは「率直に」「堂々と」「ものおじせず」でもよい。

【誤答例】一年生の言う遠慮のない意見

(要素は全て満たしているが、東子がほほえましく感じているのは、話し合う「一年生」であって、彼女たちの「意見」ではない。)

(6) 線⑤にある「この言葉」は、59～61行目の茜の発言を指している。茜は自分の詠んだ「友呼ぶ草笛は耳にやはらかし」について話していた。この話の中の「友」についての部分に注目する。

「いろんなことを話してきた」「たくさん話してもらってきた」という部分を「東子に向けられている」と感じたのは、東子の詠んだ句の「言葉にまとめられぬもの」と重ねているように思えたからである。つまり、二人が草笛の句に託した思いは同じもののように感じているのである。この内容に合うものは工。

(7) 東子の気持ちや、気持ちが表れている事柄を捉えていく。

自分に作句の才能がないと思いき知らされた東子は、作句に参加してこなかった。今回は、六番目に披露した。(遠慮)

真名にトコ先輩の句が一番気になったと評価された。瑞穂、茜も東子の句を評価してくれているとわかった。

東子は何も言えずに、「うなずいた」だけが、仲間を受け入れられていることを実感している。(喜び・心強さ)

この流れに合うのはウ。アの「満足する句が詠めた」、イの「不安定だった仲間同士の関係」、エの「作句においてこそ存在感を示せる」は不適切。

- (1) イ
A 格好つける
- (2) B 情でおれを最終走者にしよう (13字)
A (みんなて) 県大会に行く (10字) (6字)
B 勝てる力がない (7字)
- (4) エ (5) イ (6) ウ

【解説】 (1) 直前で顧問の上原先生が言い出した、「エントリー変更」をして、柗井を「6区」を走る最終走者にするという決定に対する柗井本人の反応に注目する。

柗井の反応：「どうして」と尋ねる。
「衝撃を受けているのはおれだけのよう」である。
非常に驚き、動揺している。

この気持ちに当てはまるものは、イ「目を丸くする」。なお、ア「舌をまく」は、ひどく感心して驚くという気持ちを表すときに使う慣用句である。ここでは感心しているわけではないので、不適切。
(2) まず、——線②の「そういう」が指している内容を直前の部分から捉える。



次に、Aに当てはまる言葉を考える。自分が最終走者になることを、柗井

自身がどう考えているかが読み取れる言葉に注目する。柗井は上原先生に「最後に力が出ない」(23行目)、「おれが格好つけるためにすべてを台無しにするわけにはいかない」(30~31行目)と述べている。勝つためにはチームのことを最優先にするべきであり、自分が「格好つける」場面ではない、自分の見せ場は不要だというのである。

(3) 「それ(＝自分の深さ三センチ)だけしか開放しないで」(36行目)に注目し、柗井は「自分の深さ三センチ」しか開放しないから「さわやかに見える」と上原先生が捉えていることをつかむ。エントリーの変更に対して、柗井は上原先生には「貧血」で「最後に力が出ない」ことを打ち明けたが、みんなには言っていない(＝深さ三センチ以上は開放しない)。このことを押さえたうえで、まとめた文を読んで考えていく。

A：言いたくなかった貧血という事実と、それを打ち明けた目的
「二番大事な最後がどうしようもないんだ」
「おれには6区を務める力がない」
「チームのこと考えてよ」
「みんなで県大会に行くことが大事なんだ」
↓この目標を達成するため
B：最後の競り合いについての柗井の予想
「そこ(＝最後)で勝てる力がない」
↓負けたくないから、自分は6区を譲るべきだ

上原先生は、みんなに貧血の事実を伝えず、最後の競り合いで負けてしまうことをおそれて6区を走らないと主張する柗井を、さわやかでかっこいい自分を「演じてしまっている」と指摘しているのである。
(4) ——線④の直前で、上原先生が、柗井と部員たちとの関係について話している内容に注目する。

榊井君は誰のことかわかってない

- ・ 誰も榊井君に伝えられない
- ・ みんな一目置いてる

↓
榊井が5区を走ると提案しても、
みんな遠慮して何も言わなかった

このように指摘されたことに、榊井は驚き戸惑ったのである。

(5) 上原先生の言動を捉えたうえで、選択肢の内容と照らし合わせていく。

6区を走れないと訴える榊井に、上原先生は「自分の深さ三センチしか開放しないで、生きていけるわけではない」と榊井の考え方を見直すように促し、榊井君はみんなに一目置かれていたから、自分を5区にエントリーしても誰からも意見を言われないことを伝えていく。さらに、「走れなくてもいい」、みんなが望むのは、榊井が6区を走ることだと話している。榊井が自分の深さ三センチ以上を開放し、自分自身をさらけ出して生きていくように論じているので、この内容に合うものはイである。

アは、榊井の言葉に上原先生は「動揺」していないし、主将の責任を求めでもない。ウの「とりとめのめない……緊張を和らげ」は当てはまらない。エの「榊井に冷静さを取り戻させ」、「これまでの努力をたたえ」は不適切。

(6) 榊井が走りながら思っていることがよく表れている部分に注目する。

- ・ おれを進ませているのは、おれだけじゃない。
- （最後までジローみたいに楽しむんだ。頭の中では渡部が吹くカヴァレリア何とかが響いている。／設楽しんたからみたいに死にも狂いで走った。大田のようにすべてをむき出しにしてくらいついた。／俊介しんすけがずっと見ていてくれた勢いのあるおれの走り。その走りをするんだ。）
- ・ ちぎれそうな身体からだだって、おれの走りをするんだ。
- ・ 絶対に繋つないでみせる。おれをみんなを次の場所へと。

仲間の存在を感じながら、「絶対に繋いでみせる。」という思いで走っている。

アの「さらに慕したわれる存在になりたい」、イの「さらに技術面を磨いていこう」、エの「落ち着いた走りができている」は当てはまらない。

34 テーマ別

家族と社会

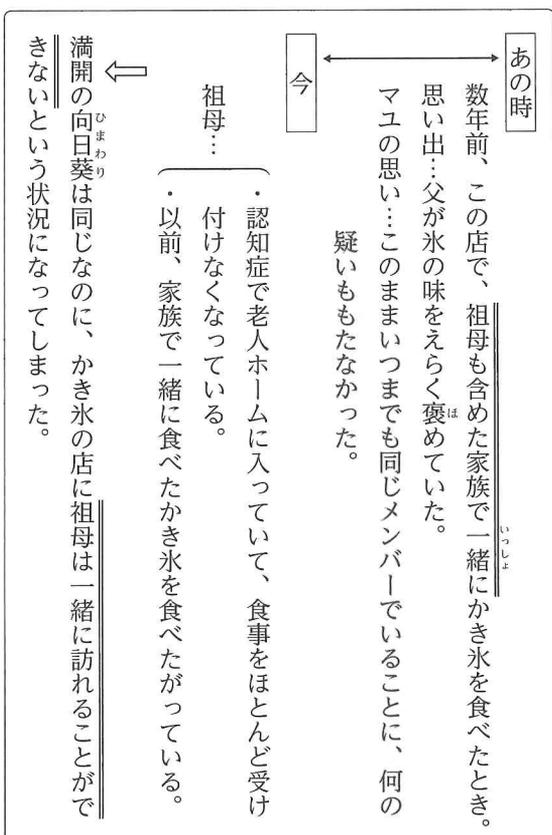
◆ 標準問題 ◆

148 ~ 150 ページ

- (1) イ (2) ア (3) エ
- (4) 例 祖母が死んでしまったのではないかという不安な気持ち。(26字)
- (5) ウ

解説

(1) —— 線①の「あの時」が指す内容を、前後に注目して捉え、現在と比較する。



この内容に当てはまるのは、「家族がそろっていることを当然のように思っていた」のに、数年前には考えもしなかった家族の状況の変化に思いをはせているという内容のイ。

アの「家族がばらばらになってしまった」は、マユも母も祖母のことを思っていることと合わない。ウは、「氷にまつわる父の発言」を思い出してはい

るが、当時の父の言葉に「納得がいかない」とは思っていないので不適切。エの「険悪な関係」は描かれていないし、ここでは祖母のためにかき氷を早く買って帰ろうと必死なので、「悲しみがこみあげて」はいない。

(2) このとき、マユは「ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止めて」いたことを押さえて、涙の理由を考える。

かき氷店の前に、長い行列ができていた。

このまま待っていたら、夜になってしまってもかもしれない。

← 店の奥へ突き進む

氷を削っているおじさんに声をかけた。

「祖母が、もうすぐ死にそうなんです」

最後に、ここのかき氷を食べたいって

・どうして口走ったのか、自分でもわからない(戸惑い)
・ずっと気をつけて避けて通ってきた一文字の単語(「死」)が
口をつけて出たことに、自分でも驚いている。

この気持ちに合うものはア。イの「涙を押しとどめてしまった」は、悲しみをこらえたのであって、悲しんでいないわけではない。ウについては、実際に「周囲が急に静かになった」わけではない。エについては、二度目は「私の方を見てくれ」たので、「おじさんに無視され」は誤り。

(3) 線③は、かき氷を食べたときの祖母の表情で、「うっとり」という表情から満ち足りた気持ちを読み取れる。また、この「うっとりとした表情」を見たとき、マユがどのように思っているかを捉える。この直後に「私は確信する」とあり、続けて確信した内容を述べている。

バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。

祖母の様子とマユの確信した内容について書かれているエが適切。アは、祖母の様子は合っているが、「祖母の病状もこれから必ず快復に向かうはずだ」

と思っではない。イとウの内容は文章中に書かれていない。

(4) まず、線④のようになったときの背景を押さえる。「バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう」に、マユは簡易ソファで横になってまぶたを閉じていた。再び目を開けた時「部屋の中があまりに静か」だったのである。次に、部屋の静けさに気づいたマユの心情や行動を読み取る。

マユの思い：「もしかして……。」

マユの行動：バーバの鼻先に手のひらを翳した

↓ バーバが呼吸しているかどうかを確かめる行為。

「もしかして……」の「……」で省略されている内容は、呼吸をしていることを確かめて、「よかった。バーバは、生きている。」とあることから、祖母の死を疑うものだと読み取れる。

「胸」は「心」を表すので、胸が折れるは、心が壊れる(傷つく)というような意味になる。祖母の死を恐れるマユの心情をまとめる。

記述ポイント ⑦：祖母(バーバ)が死んでしまったのではないか ①：不安な気持ちの二点をまとめる。⑦は「祖母が息(呼吸)をしていないのではないか」、①は「心配・気がかり・動揺」などの気持ちでもよい。文末は「……不安になっている。」というまとめ方でも可。

(5) 「バーバは今この瞬間も、甘く発酵し続けているのだ」(88～89行目)と述べていることに注目する。「発酵」とは、酵母菌や細菌などの働きで、糖分やタンパク質などを他のものに変えること。この働きによって、ヨーグルトや酒やみそなどができる。「発酵」の意味をよく考えれば、「発酵し続けている」が、確かに生きて、活動していることを表現していると捉えることができる。

マユは、祖母が確かに生命活動をしていることを感じ取ったのである。この内容を読み取って、選択肢を検討していくと、ウが当てはまる。

アの「祖母の死期も間近に迫っている」とイの「今もなお自分を大切に思ってくれている」は、「甘い味」から感じ取っていることとして不適切。エは「少しずつ快復している」とあるが、快復までは感じていないので不適切。

- (1) エ
 例 耕うん機を起こせれば、兼三さんは助かると、かつてに決めつけていた(から)。(32字)
 例 耕うん機なら、トラクターでは入れない山の小さい田んぼを耕作することができて、田んぼを荒らさずにすむ(から)。(49字)
 敬二郎さは、暗闇の田 (5) ウ

解説

(1) —— 線①に至る状況を、前書きも参考にして押さえる。

- ・ 兼三^{けんぞう}さんが、農作業中に田んぼで倒れて病院に運ばれた。
- ・ 直^{なお}と健^{けん}さんは、横倒しになった耕うん機を起こそうとしている。
- ・ かなり深く埋まっていて、何度やっても起こせなかった。

健さん…やけになったように、声を荒らげ、
 「いまどき、耕うん機なんかで走りまわってるから、ぶっ倒れるんだよっ。」
 直……健さんの声が泣いているように聞きかえせなかった。

健さんの発言は、口調や内容からは、兼三さんを非難しているようだが、直が「泣いているようで」と感じていることに注目する。直は、健さんが言葉とはうらはらに、とても兼三さんを心配していて、泣きそうになっているに違いないと感じて、聞きかえせなかったことを読み取る。この内容に当てはまるのはエ。

アは、健さんが「泣くところを見たこともない」のかわからないし、実際に泣いているわけでもない。イは、直は、健さんが「怒っている」というより泣きそうな気持ちだと考えているので、当てはまらない。ウは、「耕うん

機を起こすことを優先すべきだと思った」とは、どこにも書いていない。
 (2) —— 線②で、直はなかなか立ちあがろうとしない耕うん機を起こしながら、「兼三さん、がんばってっ」と心の中で叫んでいる。この叫びと結びつく直の気持ちがわかる部分を探す。

〈耕うん機を起こすときの気持ち〉

これ(＝耕うん機)を起こせれば、兼三さんは助かる。
 かつてに**そう**決めつけて、力を振りしぼった。

記述ポイント ⑦：耕うん機を起こせれば、兼三さんは助かる ①…かつてに⑦と決めつけていたの二点を捉え、⑨「…から。」に続くようにまとめる。
 誤答例 早く元気になって、兼三さんに、また耕うん機で田んぼを耕してほしい(ここでは、元気になった後のことまでは考えていない。ただ、助かってほしいと一心に願っているのである。)

(3) —— 線③に「トラクターでなく耕うん機にこだわった」とあるので、「耕うん機にこだわ」る理由を、ここから後の敬二郎^{けいじろう}さの言葉から捉える。

〈耕うん機にこだわる理由〉

「山の小さい田んぼを荒らしたくないからだ。」(62行目)
 「山の小さい田んぼにトラクターは入れん。」(73行目)
 「耕うん機でないと、こちらの棚田は耕作できん。」(73～74行目)
 「村を守るつちゆうことを本気で考えてきた。」(76行目)

これらを押さえて、トラクターと比較しながら、耕うん機でできること、達成されることをまとめる。

記述ポイント ⑦：耕うん機なら、トラクターでは入れない山の小さい田んぼを耕作できる ①…田んぼを荒らさずにすむの二点を捉え、⑨「…から。」に続くようにまとめる。⑦の要素は、「トラクターが入れない山の小さい田んぼも、耕うん機なら耕せる」などと、同じ内容なら、語順は入れ替わっていてもよい。また、①の要素は「田んぼを荒らさずにすむので、村を守れる」

という内容でも可。

(4) 敬二郎さんの「表情」を表す言葉を文章中から探し、兼三をいたわる気持ちと結び付くかどうかをみていく。

敬二郎さんは、暗闇の田んぼにひっそりと居すわっている耕うん機を、

目を細めて見つめた。

← (暗闇の中でよく見ようと目をこらしている)

「兼三にや、まだ生きとってもらわんならん…。」

ひとりごちのようにつぶやき

敬二郎さのつぶやきと考え合わせると、「目を細めて見つめた」という表情から、耕うん機を持ち主である兼三さんを心配し、いたわる敬二郎さんの気持ちが読み取れる。

(5) — 線④の前の健さんの言葉に注目する。耕うん機を起こすことができ、敬二郎さんは兼三さんが耕うん機にこだわる理由を話した後、立ち去っていた。そして、直と二人になった健さんは、次のように言っている。

「やるな、敬二郎さ。」

「九十歳で、ああしぶくはでせん。」

「この村には、しぶいおとながいっぱいいる。かなわん…。」

尊敬の念

兼三さんを含めた、この村のしぶい(深い味わいがあるという意味の、ほめ言葉)おとなへの敬意を表す言葉を聞いて、直は、「ほんとうにその通りだ」と共感する思いでうなずいたことを捉え、選択肢の内容をみていく。

アの「自分に言い聞かせている」は当てはまらない。イの「兼三さんの仕事を軽視してきた」とは書かれていない。ウの、村を必死で守ってきた「そんな大人(しぶいおとな)」たちに「尊敬の念を表す健さんに共感している」が当てはまる。エの「兼三さんこそが頼りだという敬二郎さんの切実な思い」、「兼三さんが退院するまでは健さんと二人でこの村を守っていかう」と決意を固めている」は文章中になく内容なので、当てはまらない。

特別講座①

記述問題

標準問題

154 ~ 156 ページ

- (1) ア (2) 世界の読者の視点 (3) エ
- (4) 1 例よいものは必ずいつか伝わるのだから、説明など必要ないと考える姿勢。(33字)

- 2 例日本の文化に接する機会を得た世界の人々が、自分の視点でとらえた日本文化を真の日本文化だと思ひ込むということ。(54字)

- (5) 例 イ
- (6)

別解

新幹線を降りてから、目的地に行くために	は、どのバスに乗ればよいかわからなくて	不便な思いをすることがあると思う。仮に、	目立つところに案内板があっても、日本語だ	けの表記では、外国人の役に立たない。外国	人がよく行く場所については、写真入りで、	どのバスに乗ればよいかを、複数の外国語で	示した案内板にすればよいと思う。	買物に行ったときに、欲しい商品がどこ	にあるのか、また、似たような商品では、違	いがわからなくて困る場面も考えられる。店	内に、目立つような形で外国語の売り場案内	を表示すれば、外国語を話せる店員が近くに	いなくても、困らないと思う。家電などでは	その商品の特徴を、簡潔に示した外国語の広	告をつける工夫があるとよいと思う。
---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------

解説

(1) □ A・Bについて、前後のつながり方を考える。

Aは、前には、「外国語の、自分から遠い文化で生まれた作品」には「親近感はない」とあり、後では、「時代や国境を越えて読み継がれる」作品の存在に言及している。「しかし」や「ただし」が当てはまる。

Bは、「世界の日本文化の受容の実態」の調査について、前には「本」が結構多く出版されてきたこと、後には最近「インターネット」で情報が手に入るようになったことを書いている。同じような内容を付け加えているので、「また」や「あるいは」が当てはまる。

A・Bの両方に当てはまるものは、ア。

(2) — 線①「このような考えかた」には、「いまの『文化』について考えるうえで大事なヒントが隠されている」ので、日本の文化をどのように見るという「考えかた」なのかを、ここよりさかのぼって読み取る。

このような考えかた

このように想像することは……けっこう難しいかもしれない

← (どの)ように想像するのか

□ 日本文化が世界の読者からどう見えて、どう思われるだろうか

「日本文化が世界の読者からどう見えて、どう思われる」とかという内容を表す別の言葉を探すと、さらに前の段落に「世界の読者の視点から日本文化を見ると」(14行目)という表現が見つかる。

(3) 「日本の文化が海外で人気がある」理由について、どのような結論に導くことを、筆者が「安易」と論じているかを、直前の具体例に注目して考える。

「日本人(日本文化)の勤勉さ・美的センス・ものづくりの伝統のためだ」

← この結論が表す意味

□ 日本人はこんな国民だ」という自己像を確認するため

歴史的に説得力のある説明とはなっていない＝安易

(4) 1 — 線③の直前の「そのような」が指している内容を、同じ段落の第一文(45～48行目)から捉える。

芸術的
人姿勢
職な

「よいものは必ずいつか伝わるのだから、本物の日本文化をそのままに発信することのほうが重要だ」と考える姿勢。

↓ をそのままに発信することのほうが重要だ」と考える姿勢。

記述ポイント

⑦……よいものは必ずいつか伝わるから ④……説明しない(黙っていたよう)と考える 以上の二点を、⑥「……姿勢。」という文末でまとめる。①は「そのまま発信すればよいと考える」でもよい。

2 「誤解」する人については、「世界中の人々が日本の文化に接する機会が増え」(53行目)に注目して、「……人(人々)が」(⑦)の形に直す。

「誤解」は職人芸術的な姿勢(＝説明しないこと)によって生まれるので、それぞれの人が自分の目で捉えた(自分の考えた)日本文化を、「真の(本当の)日本文化」だと思い込んでしまう(④)ことである。

(5) この⑦・④二点の内容を、⑥「……こと。」という文末でまとめる。最終段落の内容に注目して、ア～エの内容と照らし合わせる。

日本中心のもの見かたから自由に
なり、世界の読者の視点をとる

↓ より幅広い日本文化を、より多様な受け手の視点から見られるようになる。

(6) よって、広い視野で日本文化を見ることの利点について述べているイが適切。外国人が日本旅行中に「言葉に関する問題」で不便さを感じる場面を、自分なりにいくつか思い浮かべてみる。

例・案内板(観光地、道順など)が見つからず、あっても外国語表記がない。

・ 困ったことがあって質問したくても、外国語を話せる人がいない。

いくつか思い浮かべたことの中から、具体的な問題内容と対策を書けるものを選んでまとめる。書くときは「条件」を守るよう注意する。

(1) 例 理央に、素直に受け入れられた(14字) (2) エ
 (3) 例 モコが早く立派に飛べるように、努力させたいと思っていたが、広い心を持つべきだという平橋さんの忠告により、自分の気持ちしをか考えていない自分に気づき、モコにすまないと思うようになった。(90字)
 ウ

解説

(1) まず、理央が平橋さんのところに行ったときの状況(背景)を確認する。そのうえで、花太郎を飛ばしながら平橋さんが理央に話した言葉と、それに対する理央の反応も押さえて、「平橋さんの言葉」が「すかんと開いた空にしんなりとしみこんでいくようだった」という表現の意味を考える。

〈理央が平橋さんのところに行ったときの状況〉

モコの訓練が思うように進まない。(友人の忠告に耳を傾ける) 余裕がない。

〈花太郎を飛ばしながら、平橋さんが言った言葉と理央の反応〉

<p>平橋さんの言葉</p> <p>楽々と飛んでいるように見えるが、意外に細かい技術が必要なんよ</p> <p>尾羽をよく見てみると、少しずつ左右に傾けて、微妙なバランスをとっとるのがわかるよ</p>	<p>理央の反応</p> <p>細かい技術？(知らなかった)</p> <p>えっ、そうなんですか(驚き)</p> <p>あ、ほんとう(納得)</p>
<p>軽くやってのけているように見えても、その裏には、繊細な技術が必要なんよね</p>	<p>平橋さんの言葉は、すかんと開いた空にしんなりとしみこんでいくようだった</p>

二人のやり取りから、理央は、鷹の訓練についてまだまだ知らないことが多いことがわかる。また、そのことを理央自身が自覚していて、平橋さんの言葉を素直に聞いていることが読み取れる。

これらを踏まえて、——線①の表現の意味を考えると、

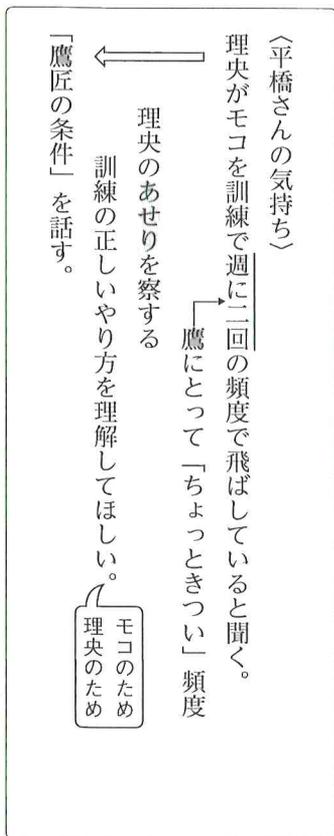
「平橋さんの言葉」が「空にしみこむ」＝「理央の心にしみこむ」

と言ひ換えられる。平橋さんの言葉が「しみこむ」ように、理央の心の中に受け入れられたのである。

記述ポイント ⑦：理央に ①：(素直に) 受け入れられた ②：二点をまとめる。

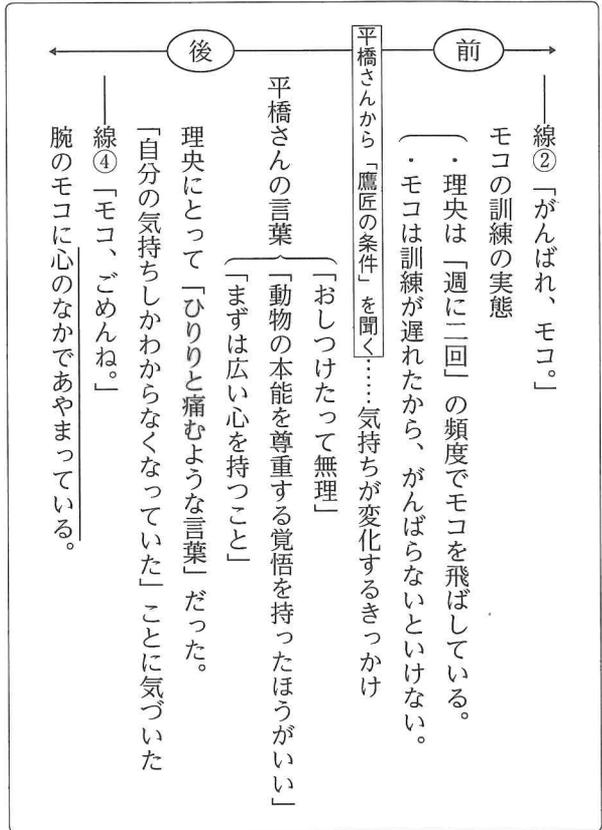
⑦は「理央の心に」でもよい。□に当てはめて、スムーズに読めるように表現を整えること。

(2) まず、場面を押さえる。——線③は、モコの訓練が思うように進まず、少しあせっている理央に対して、平橋さんが「鷹匠の条件」について話している。このことから平橋さんの気持ちを捉えて、どのように朗読するのが適切かを考える。



この気持ちを理央に伝えるための効果的な朗読の仕方は、「穏やかな口調」「ゆっくり」「論すように」が適切なので、エが正解。理央を思いやりながら、「鷹匠の条件(鷹の訓練方法)」について論じているので、アの「厳しい口調」や、イの「語尾を長く伸ばし、慰めるように」や、ウの「全く抑揚をつけず、報告するように」はそれぞれ不適切。

(3) 線②・④の背景を捉え、理央の気持ちの変化を読み取る。



- ①…平橋さんの話を聞いて、自分の気持ちしか考えていないことに気づいた
- ②…モコにすまないと思うようになった 以上の三点をまとめる。③は「モコに早く一人前の鷹になってほしかった」、④は「平橋さんが言うように、広い心を持たなければいけないことに気づいた」、⑤は「自分の気持ちをモコにおしつけてきたことを反省した」などでもよい。
- (4) ア、エの内容が文章の表現の特徴に合っているかどうかを、それぞれ検討していく。アの「色彩を表す言葉をふんだんに使う」、イの「カタカナの表現を織り交ぜる」「文章全体に軽快な感じを与えている」、エの「回想の場面を入れる」は、当てはまらない。ウは、花太郎が空を飛ぶ様子を、比喻表現を使ってイメージ豊かに描いているので、これが適切である。

特別講座②
標準問題

長文読解

160
〜
163
ページ

- (1) ア (2) ウ (3) イ
- (4) ア (5) エ
- (6) ①人と違う言葉の使用が価値を生み、同じ言葉だと思っても同様になるので、世界に言葉は無数にあった方がいい。(50字)
- ②別解 言葉が同じなら、誰もが同じようなことしか考えられなくなるから、世界には無数の言葉があった方がいい。(49字)
- (7) イ

解説 (1) 接続語を選ぶ問題では、前後の文脈の関係をみる。Aは、筆者の考えたタイムマシンの短所と長所という反対の内容を結ぶので、逆接の接続語が適当。Bは、「時間の感覚が狂う」とこと「自分の過去をじっくり回想」できることを並べているので、並列・累加の接続語が当てはまる。この両方の条件を満たしているものはア。実際にA・Bとも接続語を文章中の□に当てはめて、確認すること。

(2) 線①の直前に、「日本が外国との貿易関係なしには存在できないのと同じように」とあることに注目し、日本と外国との関係を押さえて考える。

南蛮貿易の時代とは比べ物にならないくらい大量の情報と物とが絶え間なく交錯している

このため

← その結果

たぐさんの外来語が入り込んでいて

一切の外来語を使わずに、話をするのは、ほとんど不可能

日本語も外国語との結びつきなしにはあり得ない。

アは、「ずっと昔から外来の漢字を使っている」ために「外来語を排除することは考えられなくなっている」わけではない。イの「国や言葉の境界があいまいになってきた」や、エの「外国語の習得が必要不可欠になっている」という内容は書いていない。

(3) 線②は、日本語の表現が豊かになったことを述べている。この内容を具体的に述べている部分を捉える。

日本語には、……たくさん外来語が入り込んでいる (26～27行目)

+

先祖たちが日本語の改良に努めた (49～50行目)

アは、先祖は「あらゆる外来語をそれ以前からある日本の言葉に置き換え表現してきた」のではない。ウのように「日本が言葉を使わなくても心が通じ合う文化を持っていた」とは書いていない。エの「日本語は世界を代表するすぐれた表現ができる言葉になった」と、筆者は述べていない。

(4) 線③の直後の段落の「タイムマシン」の例に注目する。

タイムマシン

・ 思い通りに過去や未来に旅ができる一種の乗り物

(誰もが知っている意味)

・ 時間の感覚を狂わせる機械

(筆者が新たに与えた意味)

表現の
可能性が
広がる

「タイムマシン」は、言葉の定義を変えることで新たな意味を与える例なので、この内容にふさわしいものを選ぶ。イの「どんなに言葉を選んでも複数の解釈が生じる」という内容は、文章中にない。ウは、「古い言葉をもとに次々と新しい表現が生み出されて言葉が豊か」になったのではない。エの内容は、先祖たちが日本語を改良してきたことに関わる内容である。

(5) 「それは外国語の学習も同じだ。」は、直前にある「古典の勉強」と「同じ

だ」という意味なので、古典の勉強に必要なものを読み取る。

古典の勉強

昔の日本人がどのように日本語を使っていたかを知るためには、文法の学習だけでは足りない。

+

生活上の流儀や趣味、恋の作法、自然との関係、その他多くのことを言葉の向こうに読み取らなければならない。

筆者が、外国語の学習でも、文法の学習だけではなく、その背後にある、その言葉を使っている人々の生活や習慣などを理解する必要があると考えていることを読み取る。ウは、前半の内容は合っているが、「人々の生活様式をまねする」ことは述べていない。

(6) 要約するときには、筆者が考えを述べている部分(中心文)を探す。ここでは、第二段落(2～7行目)の要点である「世界には無数の言葉があった方がいい」を捉え、その根拠を含めてまとめる。簡潔にまとめないと五十字以内に収まらなくなってしまうので、文章中の内容を変えずに、短くする必要がある。同じ理由で、「たとえば」以降の具体例(8～12行目)も省略する。

記述ポイント

⑦：人と違う言葉の使用が価値を生む(同じ言葉だと思っても同様になる)ので

⑧：世界には無数の言葉があった方がいい(世界中の言葉が同じだとよくない) 以上の二点をまとめる。

(7) アは12行目に「ズレ」という言葉があることに注目して、8～12行目の内容と合っていることを確認する。イは「英語はたくさん使っている」「英語を上手に話せない」に注目して、関係のある35～39行目の内容と比べる。「実際の英会話に必要な単語や言い回しがまだ日本語の中に定着してない」とは、筆者は述べていないことをつかむ。ウは、「小説」「小説家」「嘘」という言葉に注目し、57～78行目の内容と照らし合わせると、文章の内容と合っていることがわかる。エは、「先人」「日本語を便利にしてきた歴史」と関係のある45～54行目に注目し、文章の内容と合っていることを捉える。

- (1) ア (2) ウ (3) イ
- (4) 例 曾祖父と祖父の研究の重みや自分の名前に込められた父の思いを知り、ノートを使いこなして自分でも糸を染めてみたい (54字)
- (5) A 決断力に欠けている (9字)
- B 例 自分のこれからのことをどのように伝えるべきか迷っている (27字)
- 別解 東京へ帰るか祖父の家で過ごすか決断しなければいけない (26字)

解説

- (1) 線①と、それまでの美緒の言葉に着目する。

・「昔、読んだときは絵が怖くて、全然好きじゃなかった」
 ・「こんなきれいな本だったっけ、これも。」
 ↓ 祖父とのやり取りによって、絵本の美しさに気付いた
 ↓ 祖父への興味や親しみ
 ・(祖父の自慢話を)「うん、聞かせて!」

これらを踏まえると、線①「柵の本、あとで私の部屋に持っていったいいい?」と美緒が言ったのは、「祖父の本をもっと読みたい」と考えたからであるとわかる。よって、正解はア。イ「本を研究して、祖父に認めてもらいたい」、ウ「柵の本に興味を示すことによって、祖父をもっと喜ばせたい」、エ「柵の本を読むことで、本の好みや選び方を知りたい」は文章からは読み取れない。

(2) 線②より、ノートに混じる曾祖父と祖父の文字は、それぞれ「角張った字」「流れるような書体」と、どのような見た目がわかる表現となっている。また、線③の直前の祖父の言葉から、このノートが書かれたのは、祖父が曾祖父の助手として染めの仕事を始めた頃だとわかる。ウの「二人の異なる筆跡を視覚的に描く」、「祖父が……記録を引き継いできた」がこの

二点に当てはまるので、ウが正解。アの「祖父が曾祖父の厳格さに反発する気持ちをもっていった」は文章から読み取れない。イは、「芸術的表現を追求していた」とは文章から読み取れない。また、「情緒的に表現している」も誤り。エは「二人の字形や色彩を絵画的に描く」が誤り。

(3) 線③の直後に注目し、祖父が言葉に詰まったときの気持ちを捉える。

祖父 しばらく黙る ↓ 小さな声で話し始める
 「ただ……」 || 言葉を考えながら話している
 ・ 息子(美緒の父)が家業を継がなかったとき ↓ 寂しかった
 ・ 息子が娘に美緒と名付けたとき
 ↓ 息子が家業を深く思っていたとわかった…「それでいい」
 || 受け入れる・納得

以上の内容に合うのはイ。アの「本当はがっかりしていたのだと思ひ直し」は、がっかりはしなかったけれど、寂しくはあった。という祖父の言葉に合わない。また、ウの「心の底に抱いてきた寂しさや疑問が不意に膨れ上がり」、エの「祖父としてただ威厳を示そうとした」も文章から読み取れない。

(4) まず、線④までで美緒が見聞きした内容と美緒の思いを押さえる。

・ ノート (|| 染めの記録) を見る
 …… 染めの記録が曾祖父から祖父へと引き継がれたことを実感
 ・ 「美緒」という名前の意味を聞く
 「美しい糸、美しい命」
 …… 父の、家業への深い思いが表れている。
 ・ 「家業は続かなくとも、美しい命の糸は続いていく」
 …… 祖父たちから自分にも何かが受け継がれているのか

次に、設問に「……と考えている様子。」に続くように」という指示があるので、線④の直後の部分から、美緒が考えていることを捉える。

・曾祖父と祖父が集めてきたデータの蓄積

このノートを使いこなす↓自分が思った色に羊毛や糸を染められる。

「おじいちゃん……私、染めも自分でやってみたい。」……願望

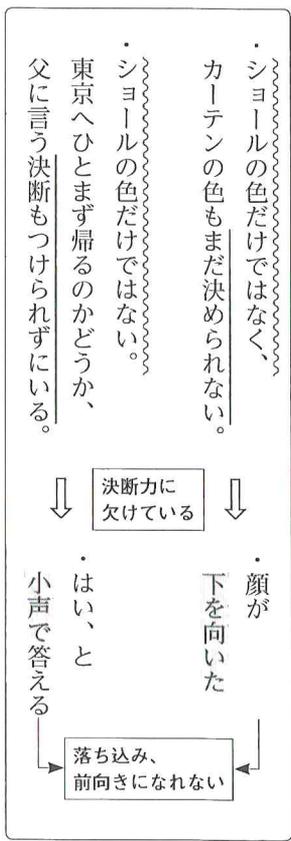
以上より、曾祖父から祖父に引き継がれた染めの記録の重みや自分の名前に込められた父の思いを知った美緒が、染めの記録であるノートを使って自分も糸を染めたいと考えていたことをまとめる。

【記述ポイント】⑦：曾祖父と祖父が集め引き継いだデータの重み ⑧：「美緒」という名前の意味 ⑨：⑦・⑧を知ったことで生まれた、自分も糸を染めたいという思い 以上の三点をまとめる。

【誤答例】曾祖父と祖父の集めたデータの重みや自分の名前の意味を知り、自分もデータを引き継いで糸を染めなければならない（53字）

（糸を染めることを義務と感じているわけではない。）

(5) 祖父の頼みごとに対し「小声で」答えたことから、美緒の気持ちが消極的であることがわかる。美緒がそうだった気持ちになった出来事や理由を、線⑤の前後から捉える。まとめられた文の前半は祖父とのやり取り、後半は祖父の頼みごとにより父とこのことを思い出した結果であることを踏まえる。



【記述ポイント】⑦：自分のこれからのことを ⑧：どのように伝えるべきか迷っている（決断しなければならぬ） 以上の二点をまとめる。

35 テーマ別

笑話

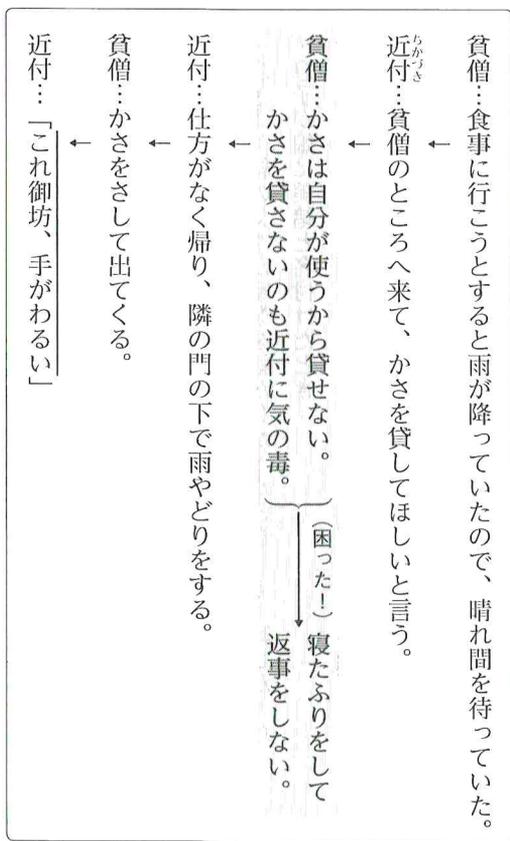
標準問題

168 ~ 169 ページ

- ① いえば
- (2) 例かさを貸さずに済まそうと、寝たふりをしたから。（23字）
- 別解 貧僧が寝たふりをして近付にかさを貸さなかったから。（25字）
- (3) イ

【解説】(1) 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すときは、助詞と語頭以外の「は」ひ・ふ・へ・ほ」を「わ・い・う・え・お」に直す。ここでは、「いへば」の「へ」を「え」に直す。

(2) 線「御坊」は貧僧への呼びかけ。「手がわるい（やり方がずるい）」とは、貧僧のどのようなやり方に対する言葉なのかを文脈から考える。



以上から、近付は「この部分の貧僧のやり方を「手がわるい」と言ったとわかる。貧僧が、かさを貸したくないけれど貸さないとほつきり言うのもため

らわれた結果、寝たふりをしてごまかしていたことを捉え、「……から。」……
ので。」など理由を表す形でまとめる。

- (3) 貧僧の行動を確認して人物像を捉える。文章の前半での貧僧の行動は(2)で押さえたので、近付に「手がわるい」と言われた後の貧僧の行動を確認する。

自分が寝たふりをしたことを指摘される。

「せんかたなくて、からかさをさして大いびきをかいた」

「せんかたなくて」は「どうしようもなく」という意味で、貧僧がすっかり困っている様子を表している。また、「からかさをさして大いびきをかいた」は、かさをさしたまま、また寝たふりをしたということである。この行動はイの内容に当てはまるのでイが正解。アは「相手の思いにしっかりと応える」が近付にかさを貸さず寝たふりをしたことに合わない。ウは「貪欲に睡眠をとろうとする」とあるが、貧僧は寝たふりをしていただけなので不適切。エは、近付にかさを貸さなかったことに合わない。

現代語訳

ある場所の草庵そうあんに貧しい僧がいた。食事に行こうと思うちょうどその時、雨が降っていたので、しばらく晴れ間を待っていたところに、親しい知人が一人やって来て、「からかさを一本お貸しください」と言うので、「かさは一本しかないし、自分も食事に行くから貸すことはできない。(とはいえ)貸さないのも気の毒だ。」(と考え)すばやく横になり、昼寝をしているふりをしていた。この知人は、「これこれ」と起こしたけれど、(貧しい僧は)寝入っているふりをして相手にしなかったので、(知人は)仕方がなく帰り、隣の門(の下)で雨やどりをしていた。あの貧しい僧が、むくりと起きあがり、食事に遅れてしまいそうだと思う、かさをさして出かけたところ、隣で雨やどりをしていた男が、「これお坊さんよ、やり方がずるい」と言うので、(貧しい僧は)どうしようもなく、からかさをさしたまま大いびきをかい(て寝たふりをし)た。

2

- (1) すべきようなく
(2) さやうく惜しや
(3) A 霊宝 B 開帳 (4) ア
(5) 例 貧しい寺の僧が、貧乏神を開帳する立て札で参詣客を集め、寺が豊かになったこと。(38字)
別解 やせ寺の僧が、立て札で人を集めた結果、寺が繁盛し、貧乏神がいられなくなったこと。(40字)

解説

(1) 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すときは、母音が「ie」となる部分を「oi」に直す。ここでは、「やう(yau)」を「よう(yo)」と直す。

- (2) 会話の終わりを表す「と言ふ」と申す」となどに注目する。「かの神(=貧乏神)」は――線で初めて登場したので、その発言はこれより後にあると考えて探すと、11行目の終わりに「……名残惜しや」という会話の終わりが見つかる。次にどこから会話が始まるかを探すと、「われ(=私)」という貧乏神びんぼうが自分を指す言葉が見つかるので、会話の初めは「さやうにわれを」。
(3) 線①の直後の「霊宝なければすべきやうなく、智恵ちえを出して開帳の札にはいへく」に着目する。「山崎の開帳」をうらやましく思っても、「やせ寺」であるこの寺には開帳できるような霊宝がないのである。

- (4) 僧が書いた「開帳の札」の内容に着目する。立て札には、

・ 夢のお告げによって貧乏神を開帳すること
・ 参詣さんげいしない者の家には貧乏神が入る(取りつく)こと
・ 早々と参詣せよということ

の三点が書かれていた。貧乏神は人々にとっては迷惑な神なので、本来わざわざ参詣しないが、立て札に「参詣しないと取りつく」と書かれていたため、貧乏神に取りつかれてはたまらないと思った人々が集まったのである。

- (5) この文章の主人公は、貧しい寺の僧である。僧はよその寺の開帳をうらや

ましく思っていたが、僧の寺には開帳できるような宝がないので「智恵を出して」開帳を行った。——線③には「智恵かな」とあるので、作者が僧の智恵に感心していることがわかる。僧の智恵と、開帳の結果を捉える。

智恵…貧乏神の開帳
 参詣しない人のところには貧乏神が取りつくの
 で参詣せよと立て札に記す。

結果…たくさんの人が参詣し、金銭が集まる。

豊かになった寺をいやがって貧乏神が出て行く。

筆者は、貧乏神を開帳するという立て札で参詣客を集めて寺を豊かにし、その結果、貧乏神を出て行かせたという僧の智恵に感心しているのである。

【記述ポイント】寺が豊かになったことが書けていれば、その結果として貧乏神が去ったことまでは書かれていなくてもよい。

現代語訳

ある田舎の貧しい寺に僧がいて、山崎にある宝積寺の開帳をうらやましく思っていたが、秘蔵の宝がないのでどうしようもなく、智恵を出して開帳を知らせる立て札に書いておくことには、

一 この寺に代々伝わる貧乏神を、夢のお告げによって、来る七月十四日から開帳させるものである。もし参詣しない者がいたら、(その者のところには) 貧乏神がお入りになるはずだとの神仏のお告げである。

早々と参詣するべきでございます。 以上

未年五月四日

と書いて、さあ客が集まるぞと(待っていると)、当日になり村中の人が大勢集まっているところに、不思議なことに、あの貧乏神が現れなされて、「このように私を人目にさらし、金銭を得て繁盛するので、この寺には住むのは難しくなった。名残惜しいことよ」と、夕暮れ時にかき消すように姿を消しなされた。(金銭を得て、さらに貧乏神も追い出すとは) なんとまあ、(すばらしい) 智恵であるよ、(すばらしい) 智恵であるよ。

36 テーマ別
 標準問題

説話

170 ~ 171 ページ

① (1) おもえり

(2) A 例討とう (3字)

B 例険しい山に平らな道 (9字)

C 例金を与えた (5字)

(3) ウ

解説

(1) 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すときは、助詞と語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」を「わ・い・う・え・お」に直す。ここでは、「思へり」の「へ」を「え」に直す。

(2) 「策略」とは、自分の目的を達成するために相手をおとしめる計画のこと。恵王がどのような目的のために、どのような手段で誰に何をさせたのかを、文章全体から捉える。

恵王が蜀の国を討とうとする。…目的

↔しかし

国境の道は人が通れない状態。

←そこで

恵王は石の辺りに金を置いた石の牛を作って国境近くに置く。…手段

←すると

蜀の国の人「石の牛が金を与えたと考えて、力持ちに頼んで山を掘り崩して石の牛を蜀へ引いて行った。…何をさせたか

←結果

・国境の険しい山に平らな道ができた。

・その道を通って秦が蜀を打ち滅ぼした。

…目的達成

以上の内容を設問の文と照らし合わせて、 A～Cに当てはまる言葉を考える。

(3) 文章中に作者の感想は特に書かれていないので、教訓は文章の内容から捉えなければならぬ。この文章では恵王が策略をめぐらして蜀を討ち滅ぼしたことが取り上げられており、作者の感動の中心は、恵王の策略の見事さにあったと考えられる。したがって、目的を達成できるようによく練られた策略のすばらしさ、つまり物事をよく考えることのすばらしさを説くための説話と考えられるので、ウが正解。ア「友人」、イ「思い上がった態度」、エ「親切」については文章中で触れられていないので、誤り。なお、よく考えもせずに「金を与える牛だ」と思い込んで石の牛を国まで引いていったために、国を滅ぼされてしまった蜀の国の人の視点に立つても、ウ「物事をよく考えなければならぬ。」という教訓はぴったり合う。

現代語訳

秦の恵王は、蜀の国を討とうとなさったときに、(蜀への)道は途中でなくなり、(国境の辺りは)人が通るような場所ではなかった。(恵王は)策略を練って、石の牛を作って、牛の尻の辺りに金を置いて、ひそかに国境近くの場所に運ばせた。その後、蜀の国の人々が、この牛を見て、「石の牛が天から下ってきて、金を与えたのだ。」と思った。すぐさま五人の力持ちに頼んで山を掘り崩し、牛を引いたので、険しい山に平らな道ができた。秦は大臣張儀を派遣して、石牛を引いた跡を見て(そこから攻め込み)、蜀の国を討ち滅ぼしてしまった。

十訓抄：鎌倉時代中期に成立した説話集。中国の説話を含む約二百八十話の教訓的な説話を十項目に分けて整理したもの。編者未詳。

2

(1) あように ①おわしける

(2) イ (3) aオ bイ

(4) 例裸にされてしまったということ。(15字)

(5) A例冷静 B例機転(気転)

解説

(1) あは、母音が「あ」となる部分を「あ」に直す。①は、語頭以外の「は」ひ・ふ・へ・ほ」を「わ・い・う・え・お」に直す。

(2) 「あさまし」は、良くも悪くも驚きあきれる気持ちを表す。ここでは、牛車の中で、冠と足袋だけを身につけて裸で座っている「史」(役人)を見た盗人の気持ちを表している。イの「あきれた」が正解。

(3) 線aの「見るに」は「見ると」という意味。牛車の簾を開けて、裸で座っている史を見たのは盗人。線b「答へければ」は「答えたので」という意味。答えた内容に当たる会話文は少し前の「東の大宮にて……みな召しつ」なので、会話文の直前に「史」とあるとおり、答えたのはイの「史」。

(4) 「かくのごとくなりつる」とは、「このようになってしまった」という意味。「このように」の指す内容を、文脈から捉える。

牛車の中で、史が裸で座っているのを見て、盗人が驚きあきれる。

盗人の問い「こはいかに」(「これはどうしたことだ」)

史の答え「東の大宮にてかくのごとくなりつる。」

理由 君達寄り来て、おのれが装束をばみな召しつ
(「貴公子たちが来て、私の衣を全て取り上げた」)

(5) 史のどのような行動が妻の——線cのような感想につながったのかを、冒ちらも史が裸でいることを指している。

頭の前置きも参考にして捉える。史は盗人が襲ってくることを予想して自分で衣を脱いで待ち構えていた。そして、実際に盗人が現れると、史は別の盗人（「史は「君達」貴公子たち」と言っている）に衣を取られたのだと説明し、あきれた盗人は何も奪うことなく去って行ったのである。したがって、あらかじめ衣を脱いでおくという機転や、盗人の前でも落ち着いて前もって考えていた芝居を打つ大胆さに妻が感心したことをつかむ。二字の言葉とあるので、Aには「冷静」「平静」などが当てはまる。Bには「……を利かせる」に続くので、「機転」などがふさわしい。

現代語訳

盗人が近寄って、牛車の簾を引き開けて中を見ると、裸で役人が座っていたので、盗人はあきれたことだと思つて、「これはどうしたことだ」と尋ねると、役人は、「東大宮大路でこのようになってしまった。貴公子たちが近寄ってきて、私の衣を全てお取り上げになってしまった」と笏を持って、立派な人に申しあげるようにかしこまって答えたので、盗人は笑つて（役人を）うち捨てて去って行った。その後、役人は、声を出して牛飼童たちを呼んだので、（供が）全員出てきた。それから家に帰ってきた。

それで、妻にこのいきさつを語つたところ、妻が言うことには、「その盗人よりも優れた心でいらつしやいました」と言つて笑つた。本当にたいそう尋常ではない心である。

今昔物語集…平安時代後期に成立した説話集。日本、インド、中国の説話が集められ、一千話余りが収録されている。題名は、各説話が「今は昔……」から始まることに由来する。作者未詳。

37 テーマ別

随筆

標準問題

- ① (1) おもわ (2) ウ (3) ウ

(4) 例人の命ははかないので、自分も聖も死んだら薄のことを聞けない（と考えたから。）（29字）

【別解】命の終わりはわからないので生きていっているうちに薄について聞きたい（と考えたから。）（30字）

解説

(1) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直すので、「思は」の「は」を「わ」に直す。

(2) この文章には、会話文がたくさんある。それぞれの会話文が誰の言葉で、何を言つてどうしたのかを、順に確認する。なお、「ますほの薄」「ますほの薄」は和歌に詠まれる言葉で、違う種類の薄なのか、同じ薄ならどちらの言いが正しいのかは、当時の歌人にとっては重要な問題だった。

ある者 「ますほの薄、……この事を伝へ知りたり。」

登蓮法師 「箕笠やある、……尋ねまからん。」

人 「ある者」の言葉を聞いて、聖を訪ねようとする。

登蓮法師 「あまりにも……雨やみてこそ。」（登蓮法師を引き留める。）

登蓮法師 「無下の事をも……聞きてんや。」

（「人」が引き留めるのを聞かずに走って出て行き、聖を訪ねて教えるを受ける。）

以上から、ア・イ・エの主語は登蓮法師、ウの主語は「人」である。

(3) この文章は、筆者の考え↓登蓮法師のエピソード↓筆者の感想という構造になっている。選択肢を見ると、筆者が登蓮法師のどのようなところにどのよう心動かされたかを確かめなければいけないので、登蓮法師のエピソード

ソードの内容と筆者の感想を確認する。

エピソード…登蓮法師は、雨の中、まずほの薄のことを教えてもらうた

めに、参加していた集まりを中座して出かけていく。

筆者の感想…「ゆゆしくありがたう覚ゆれ」≡称賛

したがって、ウが正解。アは「人からの忠告や激励に應えて」が誤り。イは「自分の力で学べないものはないと信じ」が当てはまらない。エは、「誰よりも早くそれを手に入れることを求め続けた」わけではない。

(4) 「敏きときは則ち功あり。」という言葉で示されている登蓮法師の行動は、思い立ったらすぐに聖のもとへ薄のことを聞きに行ったこと。「あまりにも…雨やみてこそ。」と人が引き留めたのに対する登蓮法師の言葉から、法師の考えを読み取る。

【記述ポイント】指定語句になっている「薄」「命」の二語を必ず使うこと。「人の命は、雨の晴れ間をも待つものかは。」から、人の命がはかないこと、また、いつ終わるかかわからないことを捉えて解答に盛り込む。

現代語訳

一つのことを必ず成し遂げようと思うならば、他のことが失敗することをも嘆いてはいけない。人の嘲笑も恥じてはいけない。あらゆることと引きかえにしないでは、一つの重大な事は成し遂げられるはずもない。人がたくさん集まっている中で、ある人が、「まずほの薄とか、まずほの薄とかいうようなことがある。わたのべの聖がこの事を伝え聞いて知っている。」と語ったのを、登蓮法師という、その集まりにおりました法師が聞いて、雨が降っているときに、「糞と笠はありますか、貸してください。あの（まずほの）薄のことを学ぶために、わたのべの聖の所へたずねて参りましょう。」と言ったので、「あまりにもせっつかちだ。雨がやんでから行くのがよい。」とある人が言ったところ、（登蓮法師は）「とんでもないことをおっしゃるものだなあ。人の命は（はかなく、いつ終わるかもわからないのに）、雨がやんで晴れ間

が見えるのを待つものだろうか、いや待ちはしない。私も死に、聖も死んだら、（薄のことを）尋ねて聞けようか、いや聞けない。」と言って、走って出て行って、習いましたと申し伝えているのは、すばらしくてめったにないことと思われる。「機敏に行えば成功する。」と、論語という書物にも書いてあるそうだ。

徒然草…鎌倉時代後期に成立した随筆。筆者は兼好法師。仏教的な無常観を背景に、人生論や昔の人物の逸話など、さまざまな内容が書かれている。

②

(1) ア
(2) エ
(3) ウ

(4) 例 公平な判断（5字）

【解説】(1) 線①までの文脈を確認すると、次のようになる。

魔下まかの土何某しなにがしが町奉行ちやうべいぎやうになったとき

堀田筑前守殿ほりたたくさねのりょう：「必ず相手あいてにならぬやうにあれかし」

←しかし

何某なにがし：そのときは「合点あてんゆかざりし（≡納得なつとできなかつた）」

訟うたをきくようになつて初めて「心付きし（≡理解りかいできた）」

(2) したがって、——線①の主語はアの魔下の土何某である。まず、——線②を含む一文の内容を確認する。

訟うたをきくは

公きみの事ことながら

↓

悪あくしとおもひ、むつかしとおもへば、

必ず其人そのひとを我が相手とおもふやうになるものなり。

【逆接】

◆ 標準問題 ◆

174 ~ 175 ページ

町奉行として訟をきくのは「公の事」だが、「其人」に対して「悪し」「むつかし」のような私的な感情を抱くと、「其人」を「我が相手」と思うようになる、という文脈である。相手に対して私的な感情を抱くは公ではなく自身自身の相手になってしまふ、ということなので、正答は工。

(3) まず、誰が「言を尽くすことあたはず」となるのかを考える。直前に「其人」とあり、「其人は言を尽くすこと(が)あたはず」と主語を示す助詞が省略されている。ここでの「其人」とは、奉行が訴えを聞く相手のこと。(2) でみたように、訴える人を奉行が「自分自身の争いの相手」だと思つてきつて話しぶりになると、相手は萎縮して十分に話せないというのである。

(4) 何某が堀田筑前守の「相手になるな」という言葉を金言だと思つたのは、裁きを受ける人に対して私的な感情を交えて相手になると、その人を自分の争いの相手だと思つようになつて、公平に裁けなくなるとわかつたからである。したがつて[]には公平に裁きをすることを表す言葉が当てはまる。設問文中に「五字以内」「二文節」という条件があるので解答時に注意する。

現代語訳

旗本の武士で何とかという者が町奉行におなりになつたとき、堀田筑前守殿が「必ず相手にならないようにあれよ」と申されたが、何とかという者はそのときは納得できなかったが、(人々の)訴えを聞くようになって初めて理解できたとおっしゃつたということだ。訴えを聞くのは公的なことなのに、(奉行である自分が)気に入らないと思ひ、わずらわしいと思つと、必ずその人(は奉行所で裁きを受ける人)を自分の(争いの)相手と思つようになるものだ。(そのため)自分の言葉が厳しくなるので、その相手は(奉行の言葉に威圧されて)十分に主張することができない。必ず一方の言い分だけを聞くようになって、裁定が公平でない。(何とかという者は、堀田筑前守殿が)相手になるなどおっしゃつたのは金言であると、子孫にも(堀田筑前守の言葉を)言い残したということだ。

① うえたる

(2) イ

(3) 工

解説

(1) 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すときは、「ぬ・ゑ」を「い・え」に、助詞以外の「を」を「お」に直す。ここでは「うゑ」を「うえ」と直す。したがつて、意味が切れている箇所は「折りつる」の直後。

(2) 「濡れつつぞ……」の歌は、「雨に濡れながらあえてこの藤の花を折りました。今年のうちには春はあと幾日もないだろうと思ひますので。」という意味。したがつて、意味が切れている箇所は「折りつる」の直後。

(3) 和歌の意味は(2)で見たとおり。年内に春は幾日もないと思つて、雨の中、わざわざ藤の花を折つて相手に贈る人の気持ちを考える。この場面は「三月のつごもり(三月の月末)」の場面である。ここで、古文の暦が旧暦になっていることに注意する。三月の終わりは現在でいうと四月下旬、五月の中頃に当たり、春の終わりの時期である。このような時期に「年の内に春はいくかもあらず」というのだから、もう少しで終わつてしまふ春への名残を惜しむ気持ちを読み取れる。また、わざわざ雨の中で藤の花を折り取つたのは、大切な相手に贈るためだと考えられる。以上の内容に合う工が適切。アは「春の初め」、イは「春の盛り」としていて、いずれも季節が合わない。ウは春を惜しむ気持ちに触れられていないので、誤り。

現代語訳

昔、落ちぶれた家に、藤の花を植えている人がいた。旧暦三月の月末に、その日は雨がしとしと降るのに、人のもとへ(藤の花を)折つて差しあげるということ(藤の花に添えて贈るために)詠んだ歌。

雨に濡れながらあえてこの藤の花を折りました。今年のうちには春はあと
 幾日もないだろうと思いますので。

伊勢物語：平安時代に成立した歌物語。作者未詳。在原業平がモデルとされる人物の恋物語や主君との交流を描いている。百二十五の短い話が収められ、ほとんどが「昔、男ありけり。」という書き出しで始まっている。

②

(1) まいり
 (2) A || I B || 例すき間 別解踏み場
 (3) エ
 (4) ウ
 (5) 1 I 2 E

解説 (1) 「まるり」の「る」は、現代仮名遣いでは「い」に直す。漢字に直す
 と「参り」になる。

(2) まず、——線①までの文脈を確認する。

場面 花の盛りの時期、鳥羽院の、法勝寺へのお出かけが決まる。
 執行なりける人（＝寺の運営に関わる責任者）
 鳥羽院のお出かけを知り、法勝寺に急いで来る。
 寺の様子：庭一面に花が散り敷いている
 ← 執行なりける人「あさましき事なり。」

「執行なりける人」とは、注によると「寺の運営に関わる責任者」。鳥羽院の法勝寺へのお出かけにあたって、もてなす側として責任のある人である。したがって、鳥羽院を迎える準備がきちんとしてきているかを気にして寺にやって来たと考えられるので、Aに当てはまるのは、イ。ア・エは文章中で全く

話題になっていない内容なので誤り。また、——線①の直後から、鳥羽院のお出かけがあると知っていて鳥羽院がご覧になるであろう庭の様子を気にして寺に参上していることがわかるので、ウも当てはまらない。Bの「庭一面にBもないほど花が散ったままの状態」は、古文の2行目「庭の上に、所もなく花散りしきたりける」に対応しているので、庭一面にびっしりと花（花びら）が散っている様子を表すような言葉を答える。

(3) この文章に登場する主な人物は「執行なりける人」と「公文の従儀師」。この文章に描かれた場面では鳥羽院の御幸（お出かけ）はまだ行われていないため、鳥羽院は直接登場していないことに注意する。したがって、「鳥羽院」を含むア・イは誤り。次に、文脈を確認する。

場面 鳥羽院の、法勝寺へのお出かけが決まる。

執行なりける人…

- ・鳥羽院のお出かけを知って、法勝寺に来る。
- ・庭に散った花が掃除されていないのを見て叱る。
- ・腹を立てて公文の従儀師を呼び出す。
- ・「今までどうして掃除をしなかったのだ」

公文の従儀師…

- ・ひざまずいて歌を詠む。
- ・「散るもうし……春のつもり」

——線①「腹立ちて」の主語は、鳥羽院のお出かけがあるのに庭を掃き清めていないことに怒った人物なので、「執行なりける人」。——線②「言ひければ」の会話の内容は「今までいかに掃除をばせざりけるぞ。ふしぎなり。」の部分。この言葉は、「執行なりける人」が「公文の従儀師」を呼びつけたときの発言なので、②の主語も「執行なりける人」となる。

(4) 「ふしぎなり」は、「思いがけない」「非常識だ」という意味。ここでは、鳥羽院のお出かけがあるというのに庭を掃除していなかったことに対して「執行なりける人」が「非常識なことだ」と言ったのである。

(5) 1 和歌を詠んだのは、「執行なりける人」に呼び出され、「今まで……ふしぎなり。」と言われた「公文の従儀師」。詠んだ相手は「執行なりける人」。

散るもうし……桜の花が散るのはつらい

散りしく庭も

はかまうし

桜の花びらが散り敷いている庭を掃くのもつらい

花に物思ふ……桜の花のためにもの思いをする

春のとのもり……春に庭掃除をしている役人

「とのもり」は庭掃除をする役人。掃除をしなかったと責められたので、公文の従儀師は自分のことを「とのもり」と言っている。

以上から、庭を掃こうと思う、としているアイは誤り。ウとエの違いは、「散りしく庭もはかまうし」という理由についてで、掃除の手間がつかいからなのか(ウ)、花びらが散り敷いた庭が美しく掃くのはつかいからなのか(エ)である。「花に物思ふ」という表現から、公文の従儀師が散り敷いた花にも風流を感じていることが読み取れるので、エが正しい。

現代語訳

鳥羽院が世を治められていたとき、桜の花盛りに、(鳥羽院が)法勝寺へお出かけなさろうとしたおりに、執行であった人が、それを知って急いで寺に参上したところ、庭一面に、すき間なく花を散り敷いていたので、(執行であった人は)「驚きあきれたことだ。今すぐ(鳥羽院の)お出かけがあるうというのに、今まで庭を掃かせなかったとは。」と叱り、腹を立てて、公文の従儀師をお呼びになつて、「今までどうして掃除をしなかったのだ。非常識なことだ。」と言ったところ、(公文の従儀師は)さっとひざまずいて、桜が散るのもつらいし、(美しく)花びらが散り敷かれた庭を掃くのもつらい。桜の花のためにもの思いをする春のとのもり(春に庭の掃除をしている役人)でございます。

39 テーマ別

漢文・漢詩

標準問題

176 ~ 177 ページ

① (1) ア

(2) 例 (夜も書物を読みたいのに、いつも灯火の油を得られるとは限らなかった)ので、螢の光で、書物を照らして読む(ため)。(37字)

別解 (夜も書物を読みたいのに) 貧しくて灯火の油を得られないときもあつたので、集めた螢の光で照らして書物を読む(ため)。

(3) エ

(39字)

解説

(1) 「交遊不雑」の「不」は「ず」と読む。書き下し文では助詞や助動詞は平仮名で書くが、あえて漢字を当てはめると「交遊雑なら不」となる。そのうえで、書き下し文の読み方になるように、読む順に漢字に番号を付けると、「交遊不雑」となる。したがって、「雑」から一字上の「不」に返って読むように、「不」の下にレ点が付いたアかウかエだとわかる。エは「遊」の下にもレ点があるので誤り。「不」は「ず」と読むので、「雑」の送り仮名を「ナラス」としているウも誤り。

(2) 文章後半の車胤のエピソードの内容を確認する。

車胤

・まじめで努力家。書物をたくさん読み、物知り。

・家が貧しく、いつも灯火の油を得られるとは限らない。

←そこで 夜、書物を読むために必要な明かり

夏はたくさんさんの螢を絹の袋に入れる。

その光で書物を照らして夜も書物を読む。

車胤は、貧しくて書物を読むための灯火の油を得られなかったこと、螢の光を書物を読むための明かりとしたことがわかる。この二点を押さえて、設問の条件に合わせて解答をまとめる。

【記述ポイント】「夜も書物を読みたいのに」、「という書き出しに合うように」、「書物を読みたい」とは逆接の関係になる「灯火の油がない」「灯火の油がなくて書物を読めない」などから書き始める。指定語句にも注意して、螢の光で書物を読むことを「照らして」という表現を使って説明すること。

(3) 孫康と車胤のエピソードの内容を押さえて考える。車胤のエピソードは(2)で確認したので、孫康のエピソードを確認する。

孫康

・貧しくて灯火の油がない ↓ 雪明かりで読書

・潔癖で、優れた人を選んで交際

← 貧しくても努力を重ねた結果
後に御史大夫にまで出世。

「螢雪の功」の「螢」は、車胤が書物を読むために用いた「螢の光」を、「雪」は、孫康が書物を読むために使用した「雪明かり」を指している。二つとも自然の光を使って夜も書物を読んで勉学を積み、出世したというエピソードからできた故事成語なので、学問とその成果について述べている工が適切。

現代語訳

孫康は、家が貧しくて灯火の油がなかった。(そのため、)いつも雪明かりに照らして書物を読んでいた。若い頃から潔癖で、優れた人を選んで交際した。後に(出世して)副首相にまでなった。

晋の車胤は別名を武子^{ぶし}とって、南平郡の人である。まじめで努力をおこたらず、書物を多く読み、物事をよく知っていた。家が貧しくていつも灯火の油を得られるとは限らなかった。夏は柔らかな絹の袋にたくさんの螢を入れて、その光で書物を照らし、昼に続いて夜も(書物を)読んだ。

2

- (1) ウ
- (2) 上江楼^{じやうりやう}
- (3) エ

解説

(1) 漢詩の詩型は、一句(一行)の文字数と句数(行数)で決まっている。

漢詩の種類

- 五言絶句：一句の文字数＝五字。句数＝四句。
 - 五言律詩：一句の文字数＝五字。句数＝八句。
 - 七言絶句：一句の文字数＝七字。句数＝四句。
 - 七言律詩：一句の文字数＝七字。句数＝八句。
- ※「絶句」は四句からなる漢詩。「律詩」は八句からなる漢詩。

この詩は、題名を除いて四句(四行)からなり、一句の文字数が七字なので、「七言絶句」である。

(2) まず、——線①に対応する書き下し文「江楼に上れば」を押さえる。書き下し文の読み方になるように、「上江楼」に読む順に番号を付けると、「上江楼」²となるので、「楼」から二字上の「上」に返って読むように返り点を付ける。二字以上を隔てて上に返って読むときは、一・二点を用いる。先に読む「楼」の下に一点、次に読む「上」の下に二点を付ける。「江」はすぐ下の「楼」を次に読むので、返り点を付けない。

(3) まず、漢詩の構成に沿って、それぞれの句の内容を確認する。

漢詩の構成

起	うたい起こす	絶句	律詩
承	発展させる	第一句	第一・二句
転	話題を転じる	第二句	第三・四句
結	全体をまとめる	第三句	第五・六句
		第四句	第七・八句

起句 独り江楼に上つて感慨を覚える。

承句 江楼から見える風景。

転句 去年一緒に江楼から月を見た人を思い出す。

結句 風景は去年と同じである。

——線②は結句に当たりますが、転句で登場した「去年一緒に江楼から月を見た人」については何も書かれていない。転句では去年一緒に月を見た人はどこにいるのかと述べているので、その人は今は作者のそばにいないことがわかる。以上から、結句では、風景は変わらないものの今年は一になつてしまつたという作者の境遇の変化による孤独感が暗示されていることがわかるので、工が適切。アは「晴れ晴れとした作者の気持ち」が誤り。また、作者の境遇が去年と変わつていることに触れられていない点も誤り。イは「小さなことに悩む人間のつまらなさ」が詩からは読み取れないので誤り。また、去年との相違について述べられていない点も誤り。ウは「作者のおかれた状況にも変化がないことを暗示している」が誤り。

現代語訳

江楼にて感を書す（川辺の楼閣で感慨を書き付ける）

趙暇

独りで川辺の楼閣に上ると、思いはるか遠くへと広がっていく。

月光は水のように澄んで、川の水は大空まで連なっているかのようだ。

一緒にこの楼閣に上つて月を愛好した人は、今どこにいるのだろうか。

この場所から見る景色は去年あの人と一緒に見たときと変わらずよく似ている（のに、あの人だけがいなのが悲しいことだ）。

40 テーマ別

古文と漢文の融合問題

標準問題

178 ~ 179 ページ

① (1) 袖に入れて

(2) イ

(3) あまりくめなり

(4) かよふの

(5) ア

解説

- (1) ——線①の中の漢字を手がかりに、古文の中から似た内容を述べた部分を探すと、「橘」を「三つ取りて、袖に入れて帰る」という表現が見つかる。
- (2) 「報・含・飴」は「含飴を報ず」と読み、「母が飴を与えてくれた恩に報いる」という意味なので、イが正解。ア・ウ・エでは「知らせる」という意味。
- (3) 古文の中で会話文を見つげるときは、引用を示す助詞「と」「とて」や、「言ふ」「申す」などの動詞に着目する。ここでは、5行目の「と申し侍り」に着目し、直前の「……母に与へんためなり」までが会話文であると判断する。ここが「……母に与えるためです」と理由を述べていることを押さえて文脈を確認すると、この会話文は、陸績が橘を持ち帰ろうとした理由を述べている部分だとわかる。よって会話文の初めは、「(橘が) あまりに見事なる……」。
- (4) 母音が「e」となる部分は、現代仮名遣いでは「o」に直す。ここでは、「やう (yan)」の「au」を「o」に直すと、「yo」となるので「よう」と直す。
- (5) 袁術の言動を確認して、心情を捉える。

1 やつてきた陸績のために橘を出す…歓迎 —— 欲深さ

2 橘を持ち帰ろうとした陸績は「幼き人に似あはぬこと」…不快

3 母のために橘を持ち帰ろうとした陸績をほめる…感心

このような心情の変化になっているものはア。袁術は、橘を持ち帰ろうとし

た陸績を、子供らしくないまねをすると感じて不快に思ったのである。

書き下し文

陸績

孝悌皆天性

人間六歳の児

袖中に緑橘を懐して 母に遺つて含飴を報ず

現代語訳

陸績

父母に孝行をつくし、年長者に従うのは、全て天性の性質である。

人の世で六歳の子供が、

袖の中に緑橘を入れて、

母に贈り、母が飴を与えてくれた恩に報いる。

陸績は、六歳のとき、袁術という人の所へ行きました。袁術は、陸績のために、果物として、橘（＝みかんの一種）を出した。陸績は、この橘を三つ、手にとって、袖の中に入れて帰るにあたって、袁術におじぎをしようとして、袂から（橘を）落としてしまった。袁術は、これを見て、「陸績殿は、幼い人に似合わないことをなさる」と言ったところが、（陸績は）「あまりに見事な橘なので、家に帰って、母に与えるためです」と申しあげました。袁術は、これを聞いて、「幼い心で、このような心遣いをするとは、めったにないことだ」とほめたということだ。そういうわけで、世間の人は、彼が親孝行であることを知ったということである。

御伽草子集…「一寸法師」や「浦島太郎」など、現代まで昔話として伝わる話

も収録されている短編物語集。問題文は、中国の二十四人の孝行者の話を集

めた「二十四孝」からの出題。

② (1) これゆきならず(と)

(2) ア

(3) 例梅の文章を書こうとして見下している態度。(20字)

(4) 別解漢文の題材である梅をひどく非難する態度。(20字)

(a) かしこがりたるさま(9字) (b) 一 (c) 白 (d) 暗香

解説

(1) 線の部分には一・二点が使われている。一・二点は一点が付いた字から二字以上返って二点が付いた字を読むので、二点の付いた「不」は飛

ばして「是」から読み始め、一点の付いた「雪」から「不」に返って読む。

書き下し文は「是れ雪ならず」となるが、設問条件にしたがって全て平仮名

で書く。

(2) 「翁の文」(「梅は唐国より…いたく劣れり。」の内容を確認する。

梅は…中国から伝わる

・古くは和歌に詠まれることもない

・枝ぶりがごつごつしている

・冬の間得意顔に咲き、立派なようにふるまう

・華やかで美しい桜より劣る

以上の内容と合うものは、ア。イは「いと古くは和歌にもよめる事なく」に合わない。ウは文章中にない内容。「華やか」とされているのは桜なので、エは誤り。

(3) 門人の言葉に着目する。門人は「梅の文を書かんとておとしめたる」ことを、「梅の為おもてぶせぞかし」と言っている。これは、梅を題材に漢文を作る会で翁が「きはめて梅をそしりて」「口をきはめていひ落とされたる」ことを受けた言葉。門人は、梅を題材として文章を作る場で、梅のすばらしさを述べるのではなく、梅を非難する文章を作った翁の態度に不服を感じているのである。

記述ポイント

⑦梅を題材とした文章（漢文）を書くとき、①梅を非難する 以上の二点を、字数に収まるように簡潔にまとめ、②「……態度。」と結ぶ。

(4) 設問の文章と、[A]の古文、[B]の漢詩を対応させて、[]に当てはまる言葉を検討する。

①は、「冬の時期から得意顔に咲き始める様子を [a] である」と非難している」に対応する[A]の部分は、「冬の中より我は顔に咲き出でてかしがりたるさま」である。

②は、設問の文章の「(冬の時期から得意顔に咲き始める様子を) [B]の漢詩では……逆境に負けない梅の強さを魅力として表現している。」に対応している[B]の漢詩の句は、第二句の「寒を凌ぎて独り自ら開く」。

③・④は、設問の文章の「[B]の漢詩では [c]色の梅の花の美しさだけでなく、嗅覚で捉えられる梅のもつ魅力を [d] という言葉で表している」に対応する[B]の漢詩の句は「遥かに知る是れ雪ならずと / 暗香の来たる有るが為なり」(第三・四句)。「雪」という言葉から白色の梅とわかるので、[c]には「白」が当てはまる。また、「嗅覚」に対応する二字の言葉は「暗香」。

現代語訳

あるとき、県居翁の家で漢文の会があつて、梅を題材にした漢文を人々にも作らせ、翁もお作りになつたが、翁の文章は、ひどく梅を非難したもので、「梅は中国から伝わつたものであつて、たいそう古い時代には和歌にも詠んでいゝことがなく、『万葉集』に見られるのが初めである。(梅は) 枝ぶりがごつごつしていて、冬の間から得意顔に咲き出して立派なようにふるまう様子は、桜が我が国で生まれて、華やかで美しいのに比べて、たいそう劣っている。」とこれ以上ないような言い方で非難なされたことを受けて、(翁の) 門人が独り言のように言つたことには、「梅についての文章を書こうとして(梅を)見下していることは、梅にとっては名誉を傷つけることだよ。」と言つた。

41 テーマ別

漢字の読み書き

標準問題

1

- ① おお
- ② おもむ
- ③ こ
- ④ ひた
- ⑤ あやつ
- ⑥ の
- ⑦ なつとく
- ⑧ さと
- ⑨ ただよ
- ⑩ こうけん
- ⑪ ぎんみ
- ⑫ ひろう
- ⑬ ふんいき
- ⑭ おちい
- ⑮ まぎ
- ⑯ もよお
- ⑰ かえり
- ⑱ うけたまわ
- ⑲ くわだ
- 20 くちよう
- 21 うなが
- 22 たずさ
- 23 おんけい
- 24 あわ
- 25 ともな
- 26 せま
- 27 きんこう
- 28 いしよく
- 29 いこ
- 30 いちじる
- 31 すんか
- 32 はぶ
- 33 はげ
- 34 ひそ
- 35 あつか
- 36 おさ
- 37 す
- 38 きぎ
- 39 けいだい
- 40 けんちよ
- 41 さつかく
- 42 こくふく
- 43 えつらん
- 44 ゆだ
- 45 せんかい
- 46 みやくらく
- 47 た
- 48 いじ
- 49 くし
- 50 にぎ
- 51 びみよう
- 52 もつぱ
- 53 けいしょう
- 54 すこ
- 55 とどこお
- 56 ひか
- 57 こば
- 58 ひんばん
- 59 もうら
- 60 じゅんかん
- 61 つの
- 62 あぎ
- 63 りんかく
- 64 そぼく
- 65 は
- 66 おこた
- 67 もぐ
- 68 せいぎよ
- 69 きわ
- 70 かく
- 71 なが
- 72 ほどこ
- 73 するど
- 74 つくろ
- 75 す
- 76 も
- 77 ひび
- 78 いとな
- 79 にゆうわ
- 80 めぐ
- 81 すいこう
- 82 きやだく
- 83 かわ
- 84 ぎようし
- 85 なご
- 86 せいじやく
- 87 いど
- 88 はあく
- 89 きた
- 90 かたよ
- 91 す
- 92 おだ
- 93 ゆる
- 94 あお
- 95 さえぎ
- 96 うるお
- 97 こわ
- 98 まんきつ
- 99 たくわ
- 100 はず

2

- ① 困 ② 告 ③ 降 ④ 展望 ⑤ 縮 ⑥ 認 ⑦ 奮起 ⑧ 導 ⑨ 営
- ⑩ 往復 ⑪ 築 ⑫ 典型 ⑬ 吸 ⑭ 發揮 ⑮ 拾 ⑯ 負担 ⑰ 誤 ⑱ 幼
- ⑲ 操縦 ⑳ 散 ㉑ 貯蔵 ㉒ 勢 ㉓ 浴 ㉔ 編 ㉕ 寄 ㉖ 功績 ㉗ 敵 ㉘ 胸
- ㉙ 痛 ㉚ 唱 ㉛ 看護 ㉜ 並 ㉝ 支 ㉞ 群 ㉟ 専門 ㊱ 照 ㊲ 経験 ㊳ 危
- ㊴ 提案 ㊵ 幹 ㊶ 庄卷 ㊷ 規模 ㊸ 省 ㊹ 呼 ㊺ 簡潔 ㊻ 垂 ㊼ 綿密
- ㊽ 暮 ㊾ 囲 ㊿ 根幹 ① 批評 ② 約束 ③ 操 ④ 異 ⑤ 耕 ⑥ 難
- ⑦ 拡張 ⑧ 複雑 ⑨ 容易 ⑩ 祝辞 ⑪ 芽 ⑫ 幕 ⑬ 厚 ⑭ 借
- ⑮ 宇宙 ⑯ 済 ⑰ 率 ⑱ 帯 ⑲ 勤 ⑳ 包装 ㉑ 届 ㉒ 演奏 ㉓ 訪
- ㉔ 招 ㉕ 危険 ㉖ 刻 ㉗ 候補 ㉘ 遺産 ㉙ 減 ㉚ 朗 ㉛ 預 ㉜ 拝
- ㉝ 補 ㉞ 貿易 ㉟ 試 ㊱ 資源 ㊲ 投 ㊳ 郵便 ㊴ 設 ㊵ 条件
- ㊶ 額 ㊷ 散策 ㊸ 貸 ㊹ 染 ㊺ 養 ㊻ 価値 ㊼ 勤勉 ㊽ 疑 ㊾ 盛
- ㊿ 招待

42 テーマ別

漢字・語句

標準問題

184 ~ 187 ページ

- 1 (1) ①イ ②ア ③エ (2) ①イ ②イ
- 2 ①二(画目) ②四(画目) ③五(画目) ④三(画目) (1) ①イ ②エ ③ウ ④エ ⑤ウ ⑥エ 構成Ⅱウ 四字熟語Ⅱク
- 3 (2) ①試行 ②否 ③信・疑 ④石・鳥 (3) ①ウ ②イ ③イ ④エ (2) ①ウ ②ア ③エ
- 4 (3) ①ウ ②エ (4) ①誤って使われている漢字Ⅱ積 正しい漢字Ⅱ積 ②誤って使われている漢字Ⅱ集 正しい漢字Ⅱ拾 (5) ①心機 ②新規 ①複雑 ②縮小 ③肯定 ④能動
- 5 (2) ア・エ・オ〔順不同〕 (3) エ (4) ア・エ〔順不同〕 (1) ①エ ②イ ③エ ④ウ (2) ①舌 ②鼻 ③頭
- 6 (3) 百聞・一見

解説

1 (1) ①「割」は十二画。ア「紙」は十画。イ「開」は十二画。ウ「済」は十一画。エ「照」は十三画。②「登」は十二画。ア「税」は十二画。イ「郵」は十二画。ウ「路」は十三画。エ「救」は十一画。③「歴」は十四画。ア「窓」は十一画。イ「簡」は十八画。ウ「絵」は十二画。エ「演」は十四画。

(2) ①「袖」の部首は「こゝろもへん」。ア「礼」は「しめすへん」。イ「複」は「こゝろもへん」。ウ「税」は「のぎへん」。エ「枝」は「ぎへん」。オ「祝」は「しめすへん」。②「枝」の部首は「ぎへん」。ア「祈」は「しめすへん」。

イ「柳」は「きへん」。ウ「肢」は「にくづき」。エ「牧」は「うしへん」。

- ② ①「必」の筆順は、「一」→「ソ」→「又」→「必」→「必」。②「城」の筆順は、「一」→「一」→「カ」→「カ」→「折」→「城」→「城」。③「初」の筆順は、「一」→「一」→「ネ」→「ネ」→「初」→「初」。④「併」の筆順は、「一」→「一」→「付」→「付」→「併」→「併」→「併」→「併」。

- ③ (1) ①「大陸」は「大きな陸」で、上の字が下の字を修飾している。同じ構成のものは「水的路(みち)」という意味のイ。②「関連」は「関」も「連」も「かかわりあいになる」という意味で、似た意味の字を重ねた熟語。同じ構成のものは、「決まり」という意味の字を重ねたエ。③「密疎」は反対の意味の字を重ねた熟語。同じ構成のものは「表」と「裏」という反対の意味の字を重ねたウ。④「通園」は「幼稚園や保育園に通う」という意味で、下の字が上の字の対象を示している。同じ構成のものは「災難に遭う」という意味のイ。⑥「高齢者」は「高齢の人(者)」で、上の二字が下の一字を修飾している。同じ構成のものは「古本の店屋」という意味のウ。

- (2) 「無病」と「息災」は「病気をしない」「災いに遭わない」という意味で、意味の似た熟語といえる。ク「鯨飲馬食」も鯨のようにたくさん飲み、馬のようにたくさん食べるという意味で、「鯨飲」と「馬食」が似た意味の熟語である。
- (3) ①「試行錯誤」は、いろいろな方法を試して失敗を重ねながら解決方法を見いだしていくこと。②「賛否両論」は、賛成と反対の意見があること。
- ③「半信半疑」は、うそか本当か決めかねている状態。①「一石二鳥」は、一つの行動で二つの利益を得ること。

- ④ (2) ①「観察」。ア「習慣」、イ「簡単」、ウ「觀光」、エ「完成」。②「首尾一貫」。ア「首席」、イ「主軸」、ウ「着手」、エ「先取」。③「就航」。ア「修復」、イ「観衆」、ウ「収束」、エ「去就」。

- (3) ①「効く」。ア「新聞」、イ「傍聴」、ウ「効率」、エ「利益」。②「納める」。ア「治療」、イ「収録」、ウ「修理」、エ「納得」。
- ⑤ (2) イ・ウは対義語の関係。(4) 「客観」と「主観」は対義語の関係。

- ⑥ (2) ①「舌を巻く」は「非常に驚く、感嘆する」、②「鼻が高い」は「誇らしい、得意である」、③「頭が下がる」は「感服する」という意味。

43 テーマ別

文法

標準問題

- ① (1) ①5(文節) ②4(文節) (2) 大きく
- ② (1) 主語ももてなしは 述語も異なりませ (2) エ (3) イ
- ③ (1) ない (2) 形容詞 (3) エ
- ④ (1) ①ウ ②ウ (2) イ ⑤ ①ア ②イ ③イ
- ⑥ (1) ウ・オ「順不同」 (2) イ
- ⑧ (1) ①ウ ②イ ③エ (2) ウ
- ⑨ (1) ①ウ ②ウ (2) ①エ ②エ (3) イ
- ⑩ イ・オ「順不同」

解説

① (1) ①は「面白い／勝負が／できると／いう／ものです」、②は「全く／予想も／しなかった／ことを」と文節に区切ることができる。

(2) 文節(／)・単語(二)に分けると「彼女は／歩いて／いる／兄に／大きく／手を／振った」となる。

(1) 主語は「何が・誰が」に当たる部分。「茶の湯のもてなしは」がこれに当たるが、「二文節」という指示があるので、「もてなしは」を抜き出す。

(2) 「おのずと」は副詞で、用言を修飾する。エ「織り込まれてくる」だけが用言を含む。

(1) 「必ずしも」は呼応の副詞で、否定(打ち消し)の語と呼応する。「必要も」に続く平仮名二字の否定(打ち消し)の語「ない」が当てはまる。

(2) 「暖かく」は活用し、言い切りの形は「暖かい」となる。言い切りの形が「い」で終わるのは形容詞。

(3) —線「くる」は補助動詞である。補助動詞は、動詞本来の意味が薄れ、て前の語句に付属的な意味を添えるもので、「動詞+て」や「体言+で」

などに続く。ア・ウは動詞の「くる(来る)」。

- ④ ①のア・イ・エは動詞の連体形。ウは連体詞。「あらゆる」は「あらゆる」などと活用しない。②のア・イは終助詞。エは接続助詞。ウは断定の助動詞。ウだけが「だろう」などと活用する。

- ⑤ (2) 「ますます」は副詞。アは連体詞。イは副詞。ウは「穏やかだ」と活用するので形容動詞。エは「すばやい」と活用するので形容詞。それぞれ、文節・単語に分けてから考える。

① いう(動詞)ーまで(副助詞)ーも(副助詞)ーない(形容詞)

※最後の「ない」は助詞の後にあり、「ぬ」と言い換えられないので形容詞。

② よい(形容詞)／目安(名詞)ーで(助動詞)／ある(補助動詞)

※「目安で」は形容動詞と紛らわしいが、「とても目安だ」とはいえないので名詞+断定の助動詞「だ」の連用形。

③ 富士(固有名詞)ーでも(副助詞)／描こ(動詞)ーう(助動詞・意志)ーか(終助詞)

※「でも」は一語で例示を表す副助詞なので、「で」も「と」分けず。

- ⑥ (1) 「招く」は下に「ない」を付けると「招か^{ない}」となり、「ない」の直前の音がア段なので、五段活用。カ行変格活用のア、サ行変格活用のエは覚えておく。イは「似^{ない}」となるので上一段活用。ウは「折ら^{ない}」となるので五段活用。オは「配ら^{ない}」となるので五段活用。

- ⑦ (1) ①「から」は起点を表す格助詞。ウも同様。ア・イ・エは確定の順接(原因・理由)を表す接続助詞。②「ながら」は「黄色であるけれども」という意味で確定の逆接を表す接続助詞。イも「知っているけれども」という意味で同様。ア・ウ・エは前後の動作が同時に行われていることを表す接続助詞。③「の」は「ならないことは」と言い換えられるので、体言の代用を示す格助詞。エも「文章を書くこと」と言い換えられる。アは連

体修飾語、イは主語を示す格助詞。ウは連体詞「この」の一部。

- (2) 「こそ」は強調を表す副助詞。

- ⑧ (1) ①「当たるだろう」という意味になるので「う」は推量の助動詞。②は「研究室を統括されていた」人物は「齋藤洋教授」であるから、「統括されていた」は目上の人である「齋藤洋教授」への敬意を示している。

- (2) ① 「「そうだ」の意味の見分け方」

① 様態…連用形、形容詞・形容動詞の語幹に付く。
ア「なりそうだ」、オ「苦労しそうだ」は連用形。
イ「おいしそうだ」は形容詞の、ウ「元氣そうだ」は形容動詞の語幹。
② 伝聞…終止形に付く。エ「行こうそうだ」は終止形。

- (2) ② 全て助動詞「た」。ア・イ・ウは過去を表し、エは存続を表す。

- (3) ① 線「れ」とイは受け身。アは「越えることができる」という意味で可能。ウは目上の人(先生)が主語なので尊敬。エは前に「自然と」とあるので自発。なおア・イは「られる」、ウ・エは「れる」。

- ⑨ ① 線「らしい」は、「いかにも日本語らしい」といえるので形容詞を作る接尾語。イも「いかにも彼女らしい」といえる。ア・ウ・エは前に「どうやら」を補えるので推定の助動詞。

- ⑩ ① 線「ない」は、直前の語が形容詞「よい(連用形「よく」)」なので、補助形容詞。イ・オも直前の語が形容詞(「ふさわしい」の連用形)や形容動詞(「穏やかだ」の連用形)で、補助形容詞。ア・ウは「存在しない」という意味を表す形容詞。エは直前の語が動詞(「忘れる」の未然形)なので、助動詞。

【「ない」の見分け方】

- ① 「ない」を「ぬ」に言い換えられる&直前の語が動詞 … 助動詞
② 「ない」の直前に助詞「は」を入れても文が成立する … 補助形容詞
「ない」の直前の語が形容詞か形容動詞

標準問題

192～195 ページ

- | | | | | | | | |
|----|--------|-----------|----|----|-------|-------|---|
| 1 | ア | 2 | ア | 3 | ①ア ②キ | 4 | エ |
| 5 | ①品詞名Ⅱア | 同じ品詞のものⅡイ | | | | | |
| | ②品詞名Ⅱウ | 同じ品詞のものⅡエ | | | | | |
| 6 | ①ウ | ②イ | 7 | ア | 8 | ①ウ ②イ | |
| 9 | ①エ | ②ア | ③ウ | | | | |
| 10 | ①イ | ②イ | ③ア | ④ウ | | | |
| 11 | ①エ | ②ア | ③イ | ④ア | | | |

解説

1 「貴重な」は、形容動詞「貴重だ」の連体形。アは「いろんなだ」とは活用しないので連体詞。イ・ウ・エは「元氣だ」「にぎやかだ」「緩やかだ」と活用するので形容動詞の連体形。

2 「裏返し」は、「裏返す」という動詞の連用形が名詞になったもの。「思いは―裏返しであり」の部分が「何が―何だ」の形で主語・述語の関係になっていることから名詞と判断できる。アは名詞。イは五段活用動詞「戻す」の連用形。ウは呼びかけの感動詞。エは「お待ちください」を修飾する副詞。

3 ①「豊かさ」は形容動詞「豊かだ」から派生した名詞。

4 ア・イ・ウの「ない」は、動詞に付いて「いかぬ」「集まらぬ」「ならぬ」と言い換えられるので否定(打ち消し)の助動詞。エは「ない」の直前に助詞「は」があるので形容詞と判断できる。

5 ①「ある」は体言「一瞬」を修飾する。「存在する」という意味を表さず、活用しないので連体詞。同じものはイ。ア・ウは「存在する」という意味を表すので動詞。エは「歌集である」という補助の関係にある連文節を作っている補助動詞。②「らしい」は「……ようだ」という推定の意味を表す助動詞。ア・イは形容詞の一部。ウは形容詞を作る接尾語。

「らしい」の見分け方

- ① 推定の助動詞「らしい」「……上に」「……上に」「どうやら」を補える。
- ② 形容詞を作る接尾語「らしい」「……上に」「いかにも」を補える。

6 ①は「おそろしいことは」と言い換えられるので、体言の代用。ウも「泳ぐことも」と言い換えられる。アは主語、エは連体修飾語を示す格助詞。イは疑問・質問を表す終助詞。②は「人影がない」と言い換えられるので、主語を示す。イも「雨が降る」と言い換えられる。アは体言の代用、エは連体修飾語を示す格助詞。ウは後に助動詞「ような」が続く形。

7 ①・②は手段を表す格助詞。③は接続助詞「ので」の一部。④は副助詞「でも」の一部。

8 ①の「れ」は、前に「先入観に」という「……に」があるので受け身の助動詞「れる」。ウは「人に」などが省略されていると考えられるため、同様を受け身。アは自発、エは尊敬。オは助動詞「られる」の連用形「られ」の一部。「見ることができる」と可能の意味を表している。イは動詞「憧れる」の連用形の活用語尾。

<p>① 受け身…上に「……に」があることが多い。</p> <p>② 可能 ……ことができる」と言い換えられる。</p> <p>③ 自発 ……上に「自然に」が補える。</p> <p>④ 尊敬 ……目上の人が主語である。</p>	<p>「れる」「られる」の意味の見分け方</p> <p>五段活用・サ変動詞 ↓ 「れる」 その他の活用 ↓ 「られる」</p>
---	---

9 ②の「よう」は推量の助動詞。イも同様。アは勧誘、エは意志。ウは助動詞「ようだ」の「だ」が省略されたもので比喩を示す。

①の「ながら」は、前の「話し」と後の「歩いて」という二つの動作が同時に進行していることを示す接続助詞。エも「音楽を聞き」と「作業をする」という動作が同時に行われていることを示している。アは「知っているのに」、イは「残念であるが」という確定の逆接を表す接続助詞。ウは「昔のままで」

という名詞についてそのままの状態が続いていることを表す、あるいは副詞「昔ながら」の一部。②の「さえ」は「だけ」と言い換えられるので限定の副助詞。アも同様。イ・エは類推、ウは添加を表す。③の「ばかり」は「だけ」と言い換えられるので限定の副助詞。ウも同様。ア・イは程度、エは動作の直後の意味を表す。オは「手を貸したために」という原因を表す。

⑩ ①の「と」は格助詞で、引用を表している。イも同様。アは「……すると」の意味で確定の順接を表す接続助詞。ウは「ゆつくりと」で一語の副詞とする考え方と、格助詞とする考え方がある。エは接続詞「すると」の一部。②の「に」は場所を表す格助詞。イも同様。アは形容動詞「急だ」の連用形「急に」の活用語尾、あるいは副詞「急に」の一部。ウは助動詞「ようだ」の連用形「ように」の一部。エは目的を表す格助詞。③の「だ」は「……である」という意味を表す断定の助動詞。アも同様。イは形容動詞「豊かだ」の終止形の活用語尾。ウは伝聞を表す助動詞「そうだ」の一部。エは過去の助動詞「た」が濁ったもの。④の「ない」は「思い出せぬ」と言い換えられるので、否定（打ち消し）の助動詞。ウも同様。アは形容詞。イは「うまくはない」といえるので補助形容詞。エは形容詞「あどけない」の一部。

⑪ ①のアイウは確定の逆接の接続助詞。エは主語を示す格助詞。②のイ・ウ・エは断定の助動詞。アは形容動詞「きれいだ」の終止形の活用語尾。

【「だ」の見分け方】

- ① 断定の助動詞「だ」…上に「とても」を補えない。×僕は中学生だ。
とても
僕は中学生だ。
- ② 形容動詞の活用語尾…上に「とても」を補える。○僕は元氣だ。
とても
僕は元氣だ。

- ③のア・ウ・エは、動詞や助動詞の連用形に付いているので様態の意味を表す助動詞。イは助動詞の終止形に付いているので伝聞の意味を表す助動詞。
- ④のイ・ウ・エは五段活用動詞「なる」が活用した形。アはすぐに次の動作が行われることを示す接続助詞。

◆ 標準問題 ◆

- (1) エ
- (2) 例 私たちは、英語を勉強することはもちろん、英語以外の言葉にも興味を広げ、日本の文化も理解しつつ、国による文化や価値観の違いをふまえて意思を伝え合おうとする意識をもつべきだ。(85字)

解説

(1) Dさんの発言の主旨を、話し合いの流れから押さえる。直前でBさんとCさんは、グラフ1の「留学生者数」に着目していて、Cさんは「日本では留学しようと思わない」「内向き」の若者が増えているのでしょうか」と発言している。これに対してDさんは「そうとも言い切れない」と言っている。つまり、Dさんは、日本では留学しようと思わない若者が増えているとはいえない、という意見を述べているのである。グラフ1には、棒線グラフの「留学生者数」と、折れ線グラフの「留学生率」が表されている。ここで比較されている平成13年と平成24年について、「留学生率」を読み取ると、どちらも約〇・八%であり、ほとんど変わっていない。このことが、日本では留学しようと思わない若者が増えているとはいえない、というDさんの意見の根拠といえる。したがって、エが答え。

(2) Aさんは「ここまで、海外の人たちと交流するために私たちが意識しなければならぬことについて話してきましたが、それぞれの内容については、Bさん、Cさん、Dさんがまとめてくれていたように思います。」と言っている。この前のBさん、Cさん、Dさんの発言に注目する。

まず、Bさんの発言から、「英語を勉強することはもちろん、英語以外の言葉にも興味を広げておくことを意識しなければならぬことですね」が押さえられる。次に、Aさんの「私たちが海外の人たちと交流するために意識すべきことについて、もう少し考えてみたいと思います」という発言

を受けて、Cさん、Dさんがそれぞれ発言した、「交流にあたって私たちが、日本の文化を理解しておくことも必要だと思います」(Cさん)、「国によって文化や価値観が異なるわけですから、そうした違いをふまえて意思を伝え合おうとすることも大切だと考えます」(Dさん)が押さえられる。この三点を、「書き出し」「文末」「指定字数」の条件に従ってまとめる。

記述ポイント

「書き出し」や「文末」の語句が指定されている場合は、それらの語句が「指定字数」に含まれるのかどうかを、設問文や解答欄を見て確認すること。この問題の場合は、条件①に「これらも全体の字数に入れること。」とあるので、「私たちは」、「意識をもつべきだ。」も含めて、七十五字以上八十五字以内でまとめる。

❖ 発展問題 ❖

198～199 ページ

- (1) ア
例めりはりをつける (8字)
- (2) 例関連をもたないバラバラの内容をやみくもに頭に詰め込むより、関連をもつ内容を結びつけながら学習すると、楽しく勉強できる (58字)
- (3) 例古文の学習で平安時代の文章を読む時に、歴史で習った平安時代の出来事をつけると、列々の内容につながりが見えて、勉強が楽しくなり、やる気も高まります。(75字)
- (4) 例古文の学習で平安時代の文章を読む時に、歴史で習った平安時代の出来事をつけると、列々の内容につながりが見えて、勉強が楽しくなり、やる気も高まります。(75字)

解説

(1) 本村さんの発言と、一年生の発言のつながりを見ていく。まず本村さんは「中学校に入ってから勉強はどうですか?」と、話題を限定して発言を促している。一年生が「授業の内容が難しいです」などの悩みを答えると、本村さんは「みんな、勉強面で苦労しているみたいですね。」と、受け止めている。そして、「では、家での勉強はどうですか?」と、別の面から質問を重ねて、話し合いを深めている。一年生が、勉強のやり方についてアドバイスを求めると、本村さんはそれを受けて、「みんないろんな工夫をしてい

ると思うけれど、……二・三年生でそのアイデアを出し合ってみてはどうでしょうか。」と、二・三年生も含めてアイデアを出す方向へ、話し合いを進めている。このように、一年生の発言の内容を受けて、それをもとに次の話題を決めているので、アが答え。

(2) 資料1にある「遊ぶときは遊び、勉強するときは集中して勉強する。」「暗記するものは短時間で、じっくり考えるものは多めに時間を取る。」ということを表す言葉を考える。この言葉は、「勉強のやる気を高める工夫」を表すキーワードとして、「整理する」「関連づける」と並ぶことになるので、この二つの言葉と同じように、動詞の終止形で終わるように書く。

設問例 よく遊び、よく学ぶ (暗記するものは……) を反映していない。

(3) 設問文に「対比されている内容を利用して」とあることに注意して、資料2の内容を読み取る。資料2の中の「一方」という言葉に着目すると、その後で、「お互いに関連をもたないバラバラの内容をやみくもに頭に詰め込まれているのがわかる。さらに、後者の学習法について「そのことによつてしっかりと勉強になる」「楽しく勉強するための大事なコツでもある」と述べられているので、後者の学習法がよいことを明らかにしてまとめる。

(4) 設問文に「あなたならどのように書きますか」とあるので、資料の要約ではなく、自分の体験や考えに基づいた内容を書く。解答例では、「平安時代の文章」と「平安時代の出来事」を結びつけるといふ具体例を挙げている。また、資料2から、「関連づける」勉強法は、「楽しく勉強する」ことができるという効果があると述べられているので、具体例から「楽しく勉強する」ことができるという効果につなげてまとめる。発表原稿の他の文とそろえて、文末を「……です。」「……ます。」とすることにも注意する。

設問例 これまで学習したことと、自分の興味のあることを結びつけて勉強すると、知識どうしがしっかり結びついて、楽しく勉強することができます。(具体例を挙げていない。)

例

資料2から、六十歳以上では「ざっくりとした説明」という言い方をしたことがある人が二割にも満たないことがわかります。千葉さんが違和感を覚えるのはもつともです。	私は、多くの人が大切にしていた元々の意味をすっかり受け継いでいきたくないと思います。また、言葉は変化し続け、新しい使い方も生まれてくるので、それらを積極的に取り入れて語彙を増やし、自分の表現の幅を広げていきたいです。
--	--

(10行)

解説

前段には、「投書の問いかけ」について考えを書くので、まず、「投書の問いかけ」の内容を押さえる。投書を見ると、最後に「私だけなのでしょいか」という問いかけの表現がある。投稿者である千葉さんが、何についてそう問いかけているのかというと、千葉さんの孫が、「ざっくり」という言葉を「おざっぱに」という意味合いで使ったことについて、「日頃使わない表現なので違和感を覚えた」ことについてだとわかる。そこで、「ざっくり」という言葉の使い方という観点で、資料を見ていく。資料1は、「ざっくり」という言葉の、出版年度の異なる二つの国語辞典の説明が比較されている。ここで捉えるのは、二〇〇二年版の国語辞典にはなかった「大まかであるさま」という意味が、二〇一〇年版の国語辞典に追加されていることである。ここから、千葉さんの孫が使っていた「おざっぱに」という意味は、近年になって一般的に使われるようになった意味であることがわかる。また、資料2か

ら読み取れるのは、「ざっくりとした説明」という言い方をしたことがある人の年代別の割合である。四十代までの世代では五十%以上の人が新しい意味で「ざっくり」という言葉を使っているのに対し、六十歳以上で「ざっくりとした説明」という言い方をしたことがある人は十六・一%しかないことがわかる。二つの資料から読み取ることができた事実をまとめておく。

資料1から：「ざっくり」という言葉を「大まかであるさま」という意味で使うのは、比較的新しい使い方である。

資料2から：「大まかであるさま」という意味で「ざっくり」を使う人は、六十歳以上では少ない。

ここで、問いかけの内容を改めて見てみる。投稿者の千葉さんは七十八歳である。だから、資料2の事実から、「大まかであるさま」という意味で使うことに違和感があるのは当然といえる。その一方で、資料1から、千葉さんの孫が、新しい意味の載っている辞典で学習する機会があることも想像できる。したがって、千葉さんの孫の言葉の使い方を誤りだとはいえないので注意する。これらを根拠にして考えをまとめる。

後段では、「言葉の新しい使い方」についての考えを書く。ここでは「前段の内容をふまえて」という条件があるので、前段に述べた内容と食い違いないように注意する。

【構成】

資料2から読み取った根拠

資料2から、六十歳以上では「ざっくりとした説明」という言い方をしたことがある人が二割にも満たないことがわかります。

問いかけて自分の考え

私は、多くの人が大切にしていた元々の意味をすっかりと受け継いでいききたいと思えます。また、言葉は変化し続け、新しい使い方も生まれてくるので、それらを積極的に取り入れて語彙を増やし、自分の表現の幅を広げていきたいです。

「前段をふまえた部分」

言葉の新しい使い方についての自分の考え

・二段落構成になっているか（注意）1。二段落より多くても少なくとも不適切である。

・二段落目の書き出しは、一マス空け（注意）6、「それに対して」で書き始めているか（注意）3。

・誤字や脱字はないか（注意）6。特に、設問中で漢字で書かれている言葉は、解答でも漢字で書くこと。

◆ 発展問題 ◆

特別講座 ③

特殊な融合問題

204 ~ 207 ページ

- (1) おくろう
その如く、
エ
1 例 かわいいそうに思ったとは、お手を助けるために、食いちぎった枝を川に落としました。(40字)
2 例 おっしゃる 3 ウ

積	れ	結	な	か	清	と	私	こ	ざ	人	は	資
極	か	果	っ	ら	掃	い	も	こ	の	の	、	料
的	ら	と	た	感	ボ	う	、	が	本	割	「	2
に	も	な	。人	謝	ラ	意	以	わ	来	合	そ	を
人	、	っ	の	さ	ン	味	前	か	の	が	の	見
の	結	返	た	れ	テ	だ	は	。	意	多	の	と
役	局	っ	た	、	ィ	と	っ		味	い	の	、
に	は	て	め	逆	ア	思	そ		が	。	た	六
立	自	く	に	に	に	っ	の		、	こ	め	十
つ	分	る	す	私	参	て	人		十	の	に	歳
こ	の	の	る	の	加	い	の		分	こ	ら	以
と	た	だ	こ	が	し	。	た		に	の	な	上
を	め	と	は	温	と	し	め		理	こ	い	を
し	に	実	、	か	き	か	に		解	の	」	除
て	な	感	自	い	、	し	ら		さ	こ	と	く
い	る	し	分	気	地	、	な		れ	の	回	年
き	思	た	に	持	域	先	ら		て	こ	答	代
た	っ	。	良	ち	の	日	い		い	と	し	で
い	て	こ	い	に	人	、	い		な	わ	た	

(13行)

解説

(2) 冒頭から「……飛び去りぬ。」までが、蟻と鳩の登場する物語の部分。最後の一文は、それを踏まえた教訓を述べたものである。

(4) 1 読み原稿Aは、古文の「浮きぬ沈みぬする所に……河の中に落しければ」の部分に紙芝居にしたもので、□に当てはまるのは、「哀れなる有様かなと、……河の中に落しければ」の部分である。最後のせりふは、

このときの鳩の心情を想像して付け加えたものである。

記述ポイント 「かわいそうに思った」という鳩の心情、「(食いちぎった) 枝を川に落とした」という具体的な行動、「ありを助けるため」という目的

を押さえ、保育園児に対する紙芝居の読み原稿にふさわしい文体で書く。

3 春香さんは、拓郎さんの「人に親切にすると、……返ってくる」という

話を受けて、「情けは人のためならず」ということわざの話題を提供しているので、アは適切。また、「恩返しの話よね」「習ったわね」と、確認の言葉を用いて拓郎さんの発言を促しているのも、イも適切。拓郎さんは、「そう思うよ」「そうだね」「本当だね。」と、まず春香さんの発言を受けとめているので、エも適切。「反論」は述べられていないので、ウは適切でない。**記述ポイント** 前の段落で「資料2から読み取ったこと」を書き、その内容を踏まえて、後の段落で、「情けは人のためならず」ということわざについての考えを書いていけばよい。

(5)

現代語訳

ある川のほとりで、蟻が遊ぶことがあった。急に水かさが増してきて、その蟻を巻き込んで流れる。(蟻が) 浮いたり沈んだりするところに、鳩が、木の枝からこれを見て、気の毒な様子だなあと(思っ)て、木の枝を少し食いちぎって川の中に落としたので、蟻は、これに乗って渚に上がった。こうしているところに、ある人が、竿の先に鳥糞を付けて、鳩を捕らえようとする。蟻が、心(の中)に、さっきの恩を返したいなあと(思)い、その人の足にしっかりとかみついたので、(その人は) ひどく恐れて、竿をその場に投げ捨てたが、その人はこのいきさつを知らなかっただろう。けれども、鳩は、これをわかって、どこへともなく飛び去った。このように、人の恩を受けた者は、なんと少しでもその恩返しをしたいと思う志を持つべきである。

